

melodyne4

ハンドブック

最終更新日 20.04.2021

MelodyneオンラインユーザーズマニュアルとこのPDF文書

このPDF文書は、Melodyneヘルプセンターの内容から自動生成されたものです。フロントページに記載されている日付の時点での最新バージョンのテキストと画像が含まれています。

数々のビデオやチュートリアルを含む最新のMelodyneヘルプセンター、最新バージョンのPDF文書は、弊社ウェブサイトにてご覧いただけます。ぜひ一度ご覧ください。

PDFの各ページのフッターに記載のリンクをご使用ください。

ARAでの操作

トラックモード • トラックモードのマルチトラックビュー • クリップモード • トラックモードからクリップモードへ、クリップからクリップへ切り替える • Melodyneでのローカル再生 • ARA統合のテンポとテンポ調整 • テンポとタイムグリッド • ノートをクオンタイズする • ノートをコピーおよびペーストする • サウンドエディターのトラックモードとクリップモード • 比較スイッチ

再生、ナビゲーション、ズーム

Melodyneでのローカル再生 • タイムルーラーを使って再生、スクラブ、ズームをコントロールする • ウィンドウサイズを変更する • ノートエディターでのスクロールとズーム • ナビゲーションとズーム機能

サイクルモード

サイクルゾーンを定義する • サイクルモードのオンとオフを切り替える • サイクルゾーンの長さを変更して移動する • 選択されているblobを使用してサイクルゾーンを定義する

表示とその他のオプション

ユーザーインターフェイスの要素を表示/隠す • ピッチカーブを表示 • ノート分割を表示 • ノートテールを表示 • blob情報を表示 • 対象ノートを表示 • 再生中ノートを強調表示 • 関連トラックを強調表示 • blob編集時にモニター • クリップ境界を表示

環境設定とキーボードショートカット

ウィンドウと一般設定を開く • ショートカット • アップデートを確認

オーディオ特性とアルゴリズム

検出処理 • メロディック • パーカッシブアルゴリズム • ポリフォニック(サステイン/ディケイ)アルゴリズム • ユニバーサルアルゴリズム • アルゴリズムを切り替える • 自動または手動アルゴリズム

ノートアサインメントモード

検出結果の編集の内容 • 編集対象と場所 • アルゴリズムインスペクター • ノートアサインメントモードのメインツール • アクティベーションツール • スライダーと「エネルギーイメージ」 • ブラインド • スタート位置ラインと指定のスタート位置 • ノート分割ツールと分割タイプツール • スタート位置ツール • エネルギー分配ツール • ノートインスペクター

タイムグリッド

タイムグリッドを有効にする、設定する • グリッドが有効な場合にノートを移動する

ピッチグリッドと音階

ピッチルーラーの機能とピッチグリッドへのアクセス • ピッチグリッドをオンにして表示オプションを選択する • 音階ルーラーと基準音高ルーラー • マスターチューニングを調整する • 主音と音階を選択する • 音階ウィンドウ • 音階を保存する

音階を編集する

音階の拡張機能を表示する • 旋法を編集する • 音程を編集する • 周波数比として表示される音程 • 音程を定義する • 独自の音階を作成する • ストレッチチューニングを使用する

音階を識別する

音階検出機能を表示して感度を調整する • 音階検出オプション • 検出された音階を適用する

ノートを選択する

一般的な選択方法 • スネーク選択 • ピッチルーラーを使って選択する • メニューのコマンドを使って選択する

ピッチ修正マクロ

マクロを開いて使用する • 再開時にマクロと補正値を閉じる

[タイムをクオンタイズ]マクロ

クオンタイズのタイミング: 何がどこに移動するのか • [タイムをクオンタイズ]マクロを開きパラメーターを設定する • 再開時にマクロと補正値を閉じる

メインツール

ノートのピッチとタイミングを変更する • ノートの長さを変更する • ノート分割を編集する

ピッチツール

ピッチセンターをシフトさせる • ピッチシフトをモニターする • インスペクタでピッチを編集する • ダブルクリックでピッチを補正する • ピッチトランジション • 特定の編集をリセットしランダムなずれを追加する

ピッチモジュレーションとピッチドリフト

ピッチモジュレーションとピッチドリフトを編集する • ピッチモジュレーションとピッチドリフト用のインスペクタ • [リセット]コマンド

フォルマントツール

フォルマントをシフトさせる • フォルマントのインスペクタ • フォルマントトランジション • [リセット]コマンド

音量ツール

音量を編集する • インスペクタを使用して音量を編集する • 音量トランジション • ノートをミュートする • [リセット]コマンド

タイムツール

ノートの位置と長さを変更する • 連続するノートのタイミング変更 • ダブルクリックでタイミングを修正する • ランダムなずれを加える • [リセット]コマンド

タイムハンドルとアタックスピード

タイムハンドルツールとアタックスピードツールの操作 • タイムハンドルを使ってノートの時間的变化を変更する • ノートのアタックスピードを変更する • タイムハンドルをアタックスピードツールと組み合わせる

ノート分割ツール

ノート分割を挿入・移動・削除する • 複数のノートが選択された状態でノート分割を編集する • ソフトなノート分割とハードなノート分割 • 分割タイプツールでハード分割とソフト分割を切り替える • ノートをトリルとして分割 • ノートの分割

ノートインスペクター

ノートインスペクターのパラメーター • 値を入力する、選択されている複数のノート进行操作する

ノートをコピーする

コピー時の選択、カーソル、グリッド • コピー時のテンポ調整:オートストレッチスイッチ • ARAとの関連におけるコピー

[編集]メニュー

編集をリセットする • ランダムなズレを加える

オーディオMIDI変換

オーディオMIDI変換について • MIDIをエクスポートする

マルチトラック編集

Melodyneのマルチトラックリング • スタンドアロンとプラグインの違い • トラックヘッダー • 編集ミックスフェーダー • [ユニゾン]トラックを分散]

サウンドエディター

サウンドエディターを開く • 平均スペクトル • 強調とダイナミクス • バイパス、ゲイン、グローバルのサウンドエディターメニュー • 作業エリア • 倍音、Hi、Loの各作業エリア • 倍音バーと使用方法 • 倍音、Lo、Hiのマクロコントロール • EQ作業エリア • EQマクロスライダー • フォルマント • [シンセ]エリアのエンベロープ • [シンセ]エリアの[再合成]コントロール

拍子記号変更

拍子記号を変更する • 小節1の先頭に移動する • 拍子記号を挿入、編集する • テンポ表示の近くの拍子記号表示

バージョン履歴

Melodyne 4.2.3の新機能 • Melodyne 4.2.2の新機能 • Melodyne 4.2.1の新機能 • Melodyne 4.2の新機能 • Melodyne 4.1.1の新機能 • Melodyne 4.1の新機能

トラブルシューティング

Melodyneの正しいインストール方法が分からない。 • Melodyneをインストールしたが、見つからない。 • Melodyneをインストールしたが、アクティベーションの方法が分からない。 • エラーメッセージが表示され、アクティベーションを完了できない。 • Melodyneを再インストールしたいが、インストールプログラムが手元にない。 • 実行中のMelodyneのエディションとバージョンが分からない。 • 使用中のMelodyneに対するアップデートがあるかどうか知りたい。 • Melodyneをスタンドアロンで起動できない。 • MelodyneをプラグインとしてDAWのオーディオトラックにインサートしたが、反応がない。 • 使用中のDAWとMelodyneとの連携がうまく行っていない気がする。 • Melodyneスタンドアロンからのオーディオ出力が得られない。 • オーディオの転送後またはインポート後、Melodyneに表示されたblobが予想と全く異なっている。 • ノートエディターでblobを縦方向に動かせるときと、横方向にしか動かせないときがある。 • blobによっては、ピッチをずらすと不自然なサウンドになることがある。 • スタンドアロンで、インポートしたオーディオファイルのテンポが間違っている。

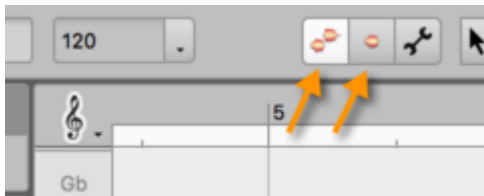
ARAでの操作

対応DAWとのMelodyneのARA統合は特にユーザーフレンドリーです。その利点には、Melodyneプラグインへの転送が不要であること、MelodyneがDAWトラックの変更すべてに自動で追従すること、DAWでMelodyneのテンポ検知機能を活用できることなどがあります。

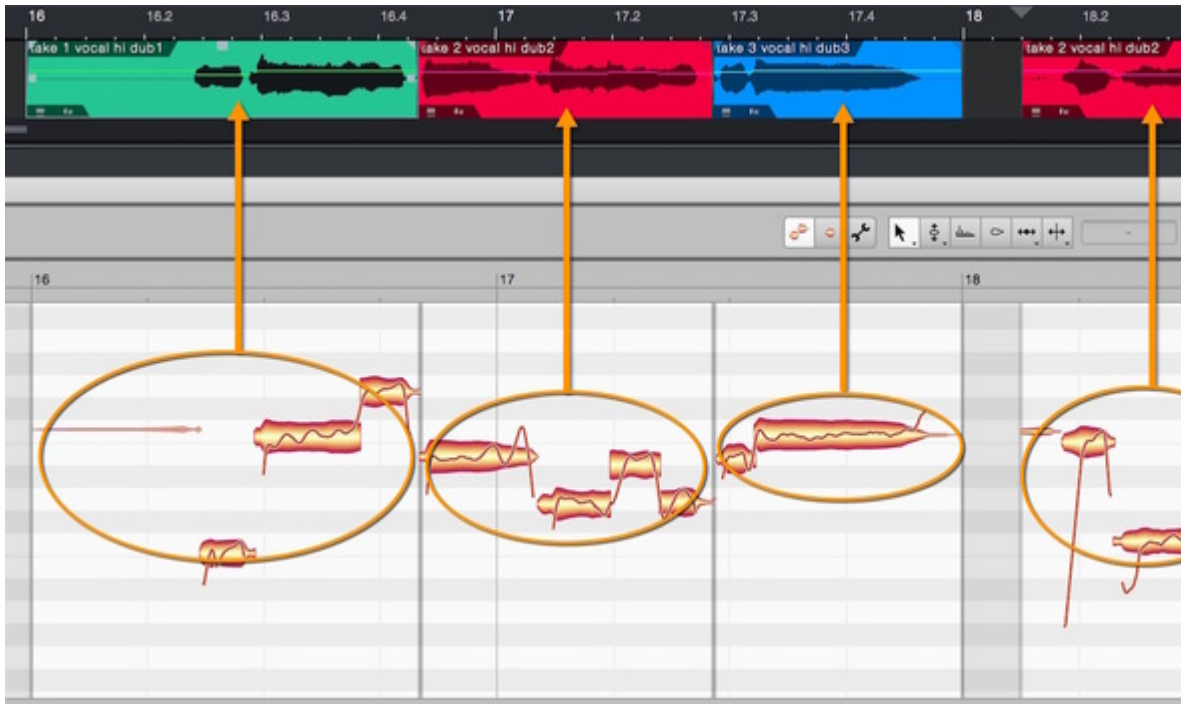
正確な機能は、DAWがどのようにARAを実装しているかにより異なります。このツアーでは、Melodyne側からMelodyneに関連するARA統合の一般的な機能について説明しています。

トラックモード

ARA統合では、MelodyneプラグインをインサートしてDAWトラックを開くと、ノート編集に次の2種類のモードを使用できます:トラックモードとクリップモードです。ノートエディター上のボタンを使用して切り変えることができます。左のボタンはトラックモードを、その右のボタンはクリップモードをそれぞれ有効にします。



トラックモードでは、DAW内でのトラック内のクリップ数に関係なく、Melodyneで開いているトラックの内容全てを表示できます。



クリップ境界は、Melodyneでは灰色の縦線で示されます。境界の移動はDAW内で実行し、Melodyne内では実行できませんが、Melodyneユーザーインターフェース内の線がDAWに合わせて移動します。これにより、クリップ変更があるノートの中央など都合の悪い部分に生じている場合、すぐに判別することができます。

トラックモードのマルチトラックビュー

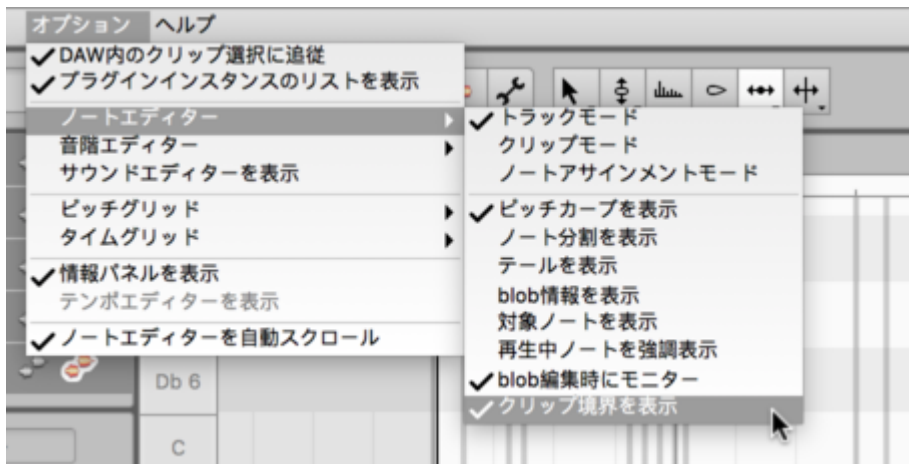
トラックモードでは、Melodyneがインサートされている全てのDAWトラックのリストを表示できます。



(色付きの)[編集]スイッチおよび(灰色の)[参照]スイッチを使用して、トラックに属する全てのノートがノートエディターに表示できます。CmdまたはShiftキーを押したまま[編集]ボタンをクリックすると、ノートエディター内の複数のトラックのノートを同時に表示して一度に編集できます。これは、たとえば和音が確実に調和するように、ボーカルのハーモニー全てに同時にアクセスしたい場合などに行います。

同じテクニックを使用して、対応する灰色の[参照]ボタンをCmdまたはShiftクリックして、参照用に1つまたは複数のトラックを表示に追加できます。これらのトラックのノートも灰色で表示されます。これは、これらのノートが不意の編集を防ぐためロックされており、単にハーモニーやリズムの参照用に表示されていることを示します。典型的な使用方法としては、ボーカルのハーモニーを編集する際に参照用にリードボーカルを表示させる手法があります。これにより、結果として生じる和音をきちんと調和させることができます。

アドバイス: ノートエディター内に複数のトラックが同時に表示されており、複数のクリップから構成されている場合、クリップ境界を示す灰色の線は、その数が非常に多くなり、表示を分かりにくくしてしまふことがあります。このような場合、[オプション]メニューの[クリップ境界を表示]オプションをクリアすると、灰色の線が非表示となり、乱雑さを低減できます。



DAW内のクリップ選択に追従: Melodyneのトラックパネルの[編集]スイッチでは、ノートエディターに表示されるトラックを選択できますが、DAW内でトラックを選択しても、Melodyneの[編集]スイッチがリモートで有効化/無効化され、結果として表示されるトラックを選択できます。これは、Melodyneの[オプション]メニューで[DAW内のクリップ選択に追従]が選択されている場合にのみ生じます。

注: この方法でDAWからリモートで選択できるのは一度に1つのトラックのみです。この選択が行われると、そのクリップを含むトラック以外の全てのトラックの[編集]ボタンが自動的に無効化されます。この動作が生じないようにするには、[DAW内のクリップ選択に追従]オプションをクリアします。このメニューを使用する代わりに、トラック名の前にある点をクリックすることもできます。



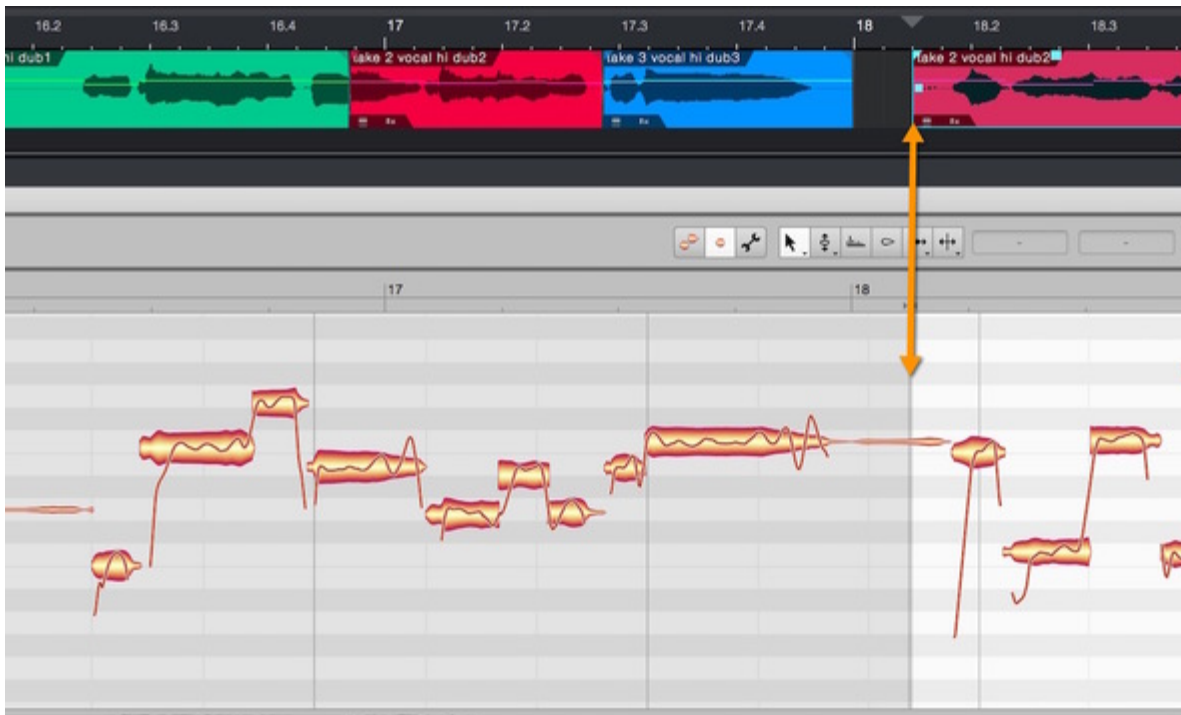
この点は、DAW内で直前に選択したクリップが含まれるトラックを示す役割も果たしています。

[参照]ボタンの状態は、[DAW内のクリップ選択に追従]オプションの影響を受けません。

クリップモード

トラックモードの対となるのがクリップモードです。ノートエディター上の右側のモードボタン(blobボタン)をクリックして選択します。

クリップモードでは、DAWトラックのクリップを一度に1つのみ表示できます。トラックリストはビューに表示されたままとなりますが、クリップモードでは[編集]ボタンと[参照]ボタンが灰色表示になります。トラックモードとクリップモードでは、クリップ境界にノートが表示される方法が異なります。トラックモードではDAWにより決定されるクリップ境界内にあるノートのみ表示されますが、クリップモードでは境界の両側のノートも表示され、Melodyne(灰色の背景内のエリア)に表示されるのは、DAWでクリップのサイズを変更した際に聞こえる部分となります。



クリップ境界を越える機能は、コンピングなどのタスク実行時に利点となります。(コンピングとは、複数のテイクから各パッセージのベストな部分を選別し、選択したクリップを連結させ、最良のパフォーマンスとなるような素材にすることです)。問題となるクリップ境界に重なるノートは、コンピング時に特定の問題を引き起こします。クリップモードでは、これらの問題は、問題のあるノートがクリップ内に収まるよう動かしたり短縮したりするだけでノートレベルで解決することができます。クリップモードでは、クリップ境界外のノートをコピーしてクリップにペーストすることも可能です。これは、コンピング時に非常に便利です。

トラックモードからクリップモードへ、クリップからクリップへ切り替える

トラックモードでは表示されているものが何であるか(現在選択されている全DAWトラックの内容)ははっきりしているのに対して、クリップモードではトラックのクリップの「いずれか」のみ表示されるため、クリップモードに切り

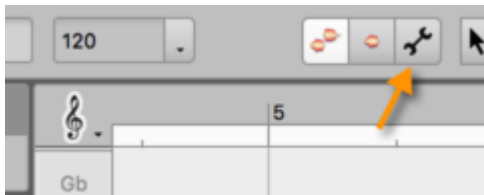
替える際には、その前に編集したいクリップが_どれ_なのかを指定する必要があります。それが不明なままだと、クリップモードボタンは灰色表示になります。この場合、トラックモードの状態、確認したいクリップがどれなのかをはっきりさせる必要があります。これは2種類の方法で行えます。

- ノートを選択する。この場合、対象となるクリップがはっきりする: 選択されているノートを含むもの
- 範囲を選択する。選択されている全てのノートが同じクリップに属する場合も、同じようにはっきりする。全てのノートが同じクリップに属さない場合、選択範囲を(必要に応じて1つのノートまで)狭める必要がある。

ノートがひとつも選択されていない場合、MelodyneはDAW内でどのクリップが選択されているかを確認します。DAW内で現在選択されているのが1つのクリップのみの場合、Melodyneはその内容をクリップモードで開きます。複数のクリップが選択されている場合、確認したいトラックに属するノートを選択するだけでこのあいまいさを解決できます。

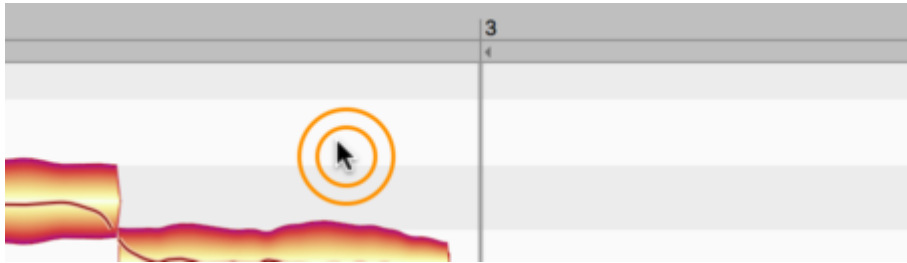
アドバイス: クリップモードになっている際にクリップを変更したい場合、トラックモードに切り替える必要はありません。DAW内で希望のクリップをクリックすれば、Melodyneにその内容が即座に表示されます。もちろんこれは、選択されているクリップを含むトラック内にMelodyneがすでに存在している場合にのみ適用されます。

ノートアサインメントモードに切り替える現在のノート選択から確認したいクリップが明らかである場合にのみ、トラックモードからノートアサインメントモードに切り替えることができます。そのため、必要に応じて、ノートアサインメントモードで確認したいクリップのいずれかのノートをクリックします。クリップモードからノートアサインメントモードへは直接切り変えることができます。これは、クリップモードでは一度に1つのクリップのみ選択できるので、確認したいクリップがはっきりしているためです。



Melodyneでのローカル再生

たとえば、タイムルーラーやトランスポートボタンを使用してDAWから再生を開始すると、フルアレンジが再生されます。DAWミキサーはその後トラック間のバランスを判断します。同じ事は、Melodyneルーラーをダブルクリックして再生を開始する際にも言えます。ただし、Melodyneだけで再生をコントロールすることも可能です。これを「ローカル再生」と呼びます。ARA統合があれば、このローカル再生はノートエディターの背景をダブルクリックして開始できます。



ローカル再生中に聞こえる内容は、現在の編集モードにより異なります。

トラックモードでのローカル再生: ローカル再生中のトラックモードでは、Melodyneが使用されている全てのDAWトラックが聞こえます。これらのトラックは通常どおりDAWミキサーを通過しますが、編集ミックスフェーダーを使用してMelodyneでプリミックスすることができます。



これが左端にある場合、色付きのノート、つまり、ノートエディター内で編集用に現在開いているトラックに属するノートのみ聞こえます。フェーダーを中央に向かって動かすと、灰色のノート(参照用にのみ表示されている)がフェードインします。フェーダーをさらに右方向に動かすと、Melodyneのトラックリスト内の残りのトラック、つまり編集用でも参照用でもない開いているトラックがミックスに加えられます。編集ミックスフェーダーは、Melodyneでのローカル再生中のみ効果を生じます。DAWから再生を開始すると、ソングのトラック全てが聞こえ、編集ミックスフェーダーは効果を生じず、灰色表示になります。

クリップモードでのローカル再生: このモードでは、Melodyneのノートエディター内で現在開いているクリップのみ聞こえます。ただし、このモードでの再生とDAWでの再生の間の大きな違いはクリップ境界に現れます。DAW再生中は、選択されているクリップの境界内にあるもののみ聞こえます。クリップ境界の配置が良くなく、ノートの先頭または末尾が切れている不完全なノートがある場合、DAW再生中にすぐ分かります。一方、ローカル再生中は、クリップ境界をまたぐ素材(灰色の背景のエリア内)が聞こえます。

そのため、DAWでクリップ境界を動かした場合どのような音になるのかを確認することができます。これは、このトラックの残り(下内定義されているクリップ外にある部分)を作業中のクリップ内にコピー&ペーストして素材として使用したい場合などにも便利です。

ローカル再生とDAW再生は、再生テンポの面でも異なります。次のセクションではこれについて説明します。

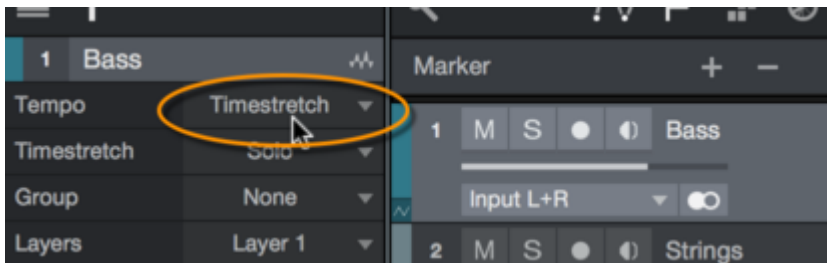
ARA統合のテンポとテンポ調整

ARA統合の利点のひとつに、オーディオファイルのテンポを既存のソングテンポに合わせて調整できることがあります。これは技術的には次のように機能します。Melodyneは各オーディオファイル(とDAWアレンジ内の各クリップ)に対して元の録音のテンポを「検出」します。これは、クリックなしで録音されており、テンポの揺れが含まれるテイクでも機能します。また、現在のDAWソングと大きく異なる状況で録音されていても(たとえば、別のソングから取得されたステムや別のループライブラリから取得されたループなど)機能します。この情報は

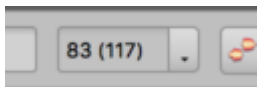
Melodyneによりまず「発見」され、DAWに伝えられます。その後、該当するファイルの再生テンポを「変形」させ、ソングテンポに完全にマッチさせて欲しいとのリクエストと共にMelodyneに戻されます。

ARA制御によるMelodyneとDAW間のこのやりとりには手を加える事ができるようになっています。なぜなら、DAWがMelodyneのテンポ処理を「信用」するべきかどうか不明な場合など、ユーザーが判断すべき状況があるためです。ステムが一定のテンポで録音されたことが分かっている、Melodyneに存在しない可変テンポを検索させる必要がない場合などがこれに当たります。このプロセスに介入する方法については、次のセクションで手順を追って説明しています。

- DAWトラックが、クリップのテンポをソングのテンポに合わせて調整できる状態になっている必要があります。これはDAW側の機能で、ここではStudio Oneを使用しています。



ファイルテンポと現在のソングテンポが同じである場合、括弧のない単一の値がMelodyneのテンポフィールドに表示されます。ここに2つの値が表示される場合、Melodyneはソングのテンポとは異なるファイルテンポを検出しています。1つ目の値はソングのテンポです(ここでは83BPM)。括弧内の値はMelodyneがオーディオファイル内で検出したテンポを示しています(ここでは117BPM)。



一方、トラックモードでは、ソングテンポのみが表示され(ここでは83)、括弧内には何も表示されません。また、「生の」ソース素材を分析するノートアサインメントモードでは、ファイルテンポのみ表示されます(ここでは117)。

- テンポの不一致をどのように解消するかはユーザーの判断に因ります。これを行うには、[テンポ]ダイアログを開きます。



“ファイルテンポとして確定”: DAWがMelodyneが検出したテンポを受け入れます。これにより、Melodyneのタイムストレッチがトリガーされ、オーディオファイルのテンポがソングのテンポに合わせて調整されます(ここでは、117から83BPMに変化)。一般的な用途:(テンポが分からない)オーディオファイルを使用していて、このファイルのテンポをソングのテンポに合わせたい。

“ファイルテンポをアサイン”: Melodyneがファイルテンポの検出に失敗していると思われる場合、このコマンドで、テンポエディターを[テンポをアサイン]モードで開き、テンポを手動で修正できます。一般的な用途:ボー

カルテイクからファイルが構成されており、テイクに一時停止が多数含まれているためMelodyneがファイル検出に必要な基盤を見つけることができず、結果としてテンポが誤って認識される場合。テンポアサインでMelodyneのテンポ検出を調整し、その後のタイムストレッチが正確な値を元に行われ、音楽的に正しい結果が提供されるようになります。

“プロジェクトテンポを適用”: この場合、Melodyneが検出したテンポに関係なく、ファイルをタイムストレッチさせたくありません。つまり、ファイルとソングのテンポが同じだとあなたは判断しています(タイムストレッチの必要なし)。オーディオファイルが現在のDAWソング内で録音またはバウンスされたものである場合、このオプションを選択します。別の用途: Melodyne内でパッセージを開くかどうかを決める前に、DAWが提供する機能を使用してファイルのテンポをソングのテンポに合わせて調整している場合で、Melodyneでメロディやキーを変更したいが、実行済みのテンポ調整を台無しにしたくない場合。

“一定のテンポを適用”: このコマンドでは、必要に応じてファイルテンポを手動で設定できます。これを行うには、メニューからこのコマンドを選択して[テンポ]フィールドに希望のテンポを入力します。ソングにインポートしようとしている録音のテンポが分かっている場合、これを行うとよいでしょう。たとえば、ソングテンポが83BPMで、サンプリングCDからドラムループをインポートしようとしていて、CDのブックレットに書かれているテンポは90BPMであるとしめます。概して、Melodyneは即座に90BPMを検出し、[テンポ]フィールドに「83 (90)」と表示します。この場合にタイムストレッチをトリガーするには、[ファイルテンポを確定]を選択するだけでかまいません。Melodyneがファイルテンポに90BPM以外の値を表示した場合(たとえば、ループを2倍の長さで解釈して「83 (180)」と表示するなど)、[一定のテンポを適用]コマンドを使用して「180」の代わりに「90」を入力して修正できます。

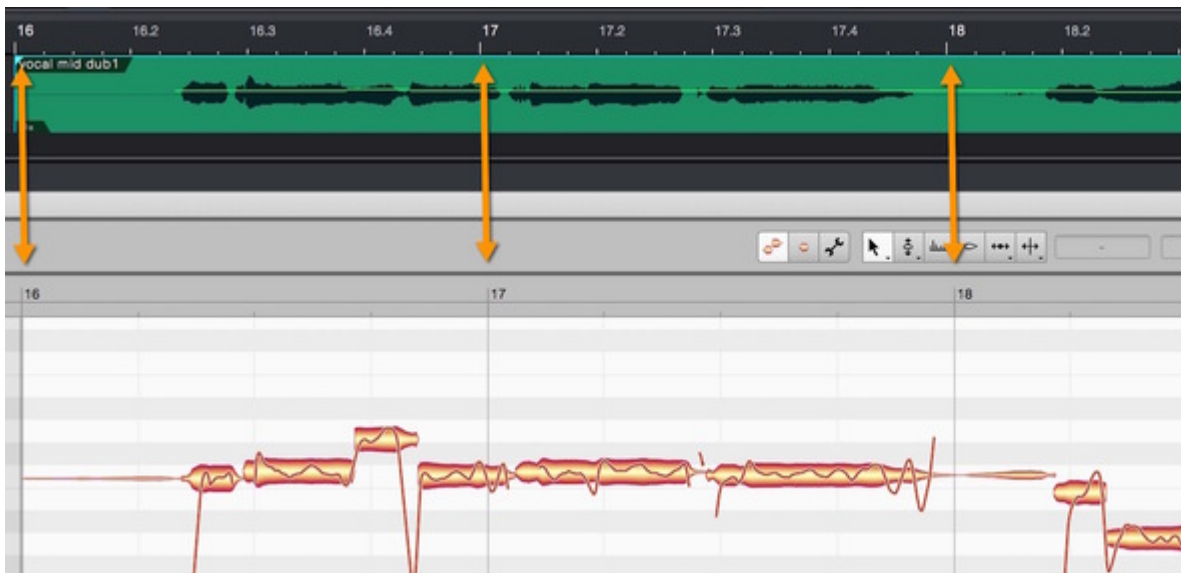
テンポとタイムグリッド

「正しい」ファイルテンポが見つかる(または[テンポ]ダイアログで指定する)と、他の目的や音楽的に微妙なテンポ調整に役立ちます。これにより、ファイルテンポがタイムルーラーの校正およびノートエディターの背景内のグリッド線の位置も決定するため、ノートの編集作業が簡単になります。

ノートを左または右に16分音符分だけ動かしたいとします。この場合、16分音符は現在のソングテンポ(たとえば100BPM)の関数であると考えます。しかしタイムグリッドは元の録音のテンポ(たとえば120BPM)に基づいているため、ノートを16分音符単位で動かそうとすると、間違った場所に配置されてしまいます(テンポが速いほど、グリッド線の間隔は狭くなる)。そのため、ARAでつながるDAWとMelodyneは、ルーラーとタイムグリッドが常に現在のテンポを「正確」に示すよう、またクオンタイズが同じく「正確」に行われるよう努めます。以下では、さまざまな編集モードと、ローカル再生とDAW再生の間の違いを考慮した概要を説明します。

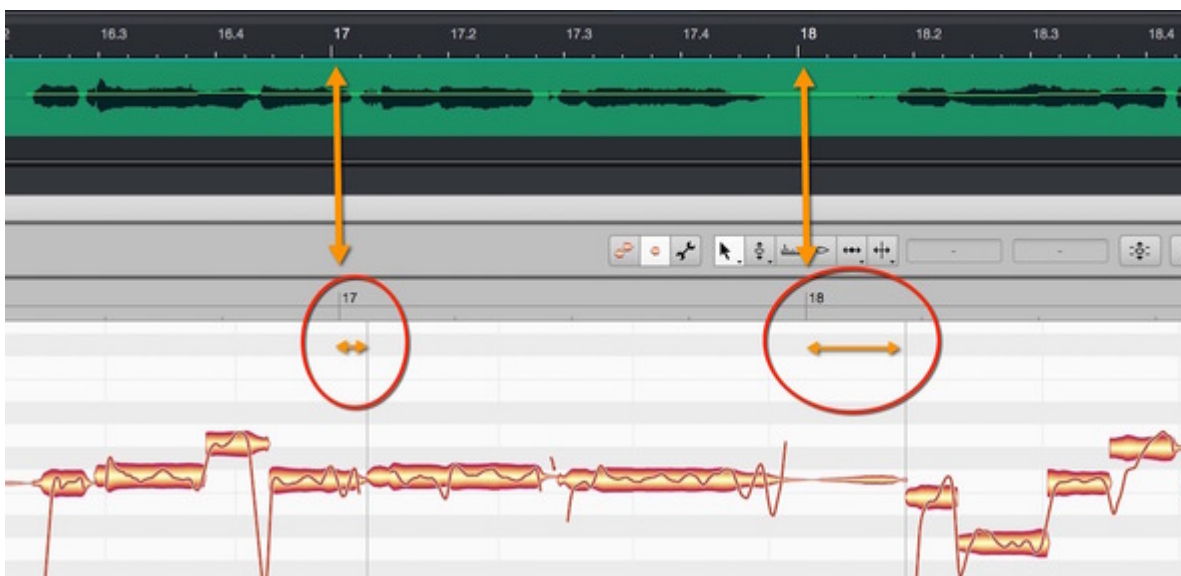
トラックモードでのテンポディスプレイ:

- Melodyneの[テンポ]フィールドには1つの値が表示されます: DAWのソングテンポです。
- Melodyneのルーラーとノートエディター背景内のタイムグリッドは同期しており、同じ原理に従って互いに校正されます。ソングテンポが速いほど、線の間隔は狭くなります。



クリップモードでのテンポディスプレイ:

- Melodyneの[テンポ]フィールドには(上記のとおり)2つの値が表示されます:ソングテンポと、括弧内のファイルテンポです。ファイルのテンポがソングのテンポと同じ場合、1つの値のみ表示されます。
- Melodyneのタイムルーラーとノートエディター背景内のタイムグリッドは必ずしも同期にはなりません。これは、ルーラーはソングテンポを反映するのに対し、グリッドはファイルのテンポを示すためです。2つのテンポが一致しない場合、ルーラー上のダッシュはグリッドの線と一致しくなくなります。



これが正しい状態で、DAW再生中のダイナミックなタイムストレッチの効果を示しています。タイムグリッドと元の録音のノートは、ソングテンポに合わせて伸縮され、またルーラーも同じです。もちろん結果は、タイムグリッ

ドが「正確な」テンポ検知またはテンポ入力に基づいて較正されている場合にのみ音楽的に有効なものとなります。このため、クリップモードではタイムグリッドを確認してノートに対応しているかどうかを確かめることができます。対応していない場合、上記の[テンポ]ダイアログオプションを使用して必要な調整を行えます。

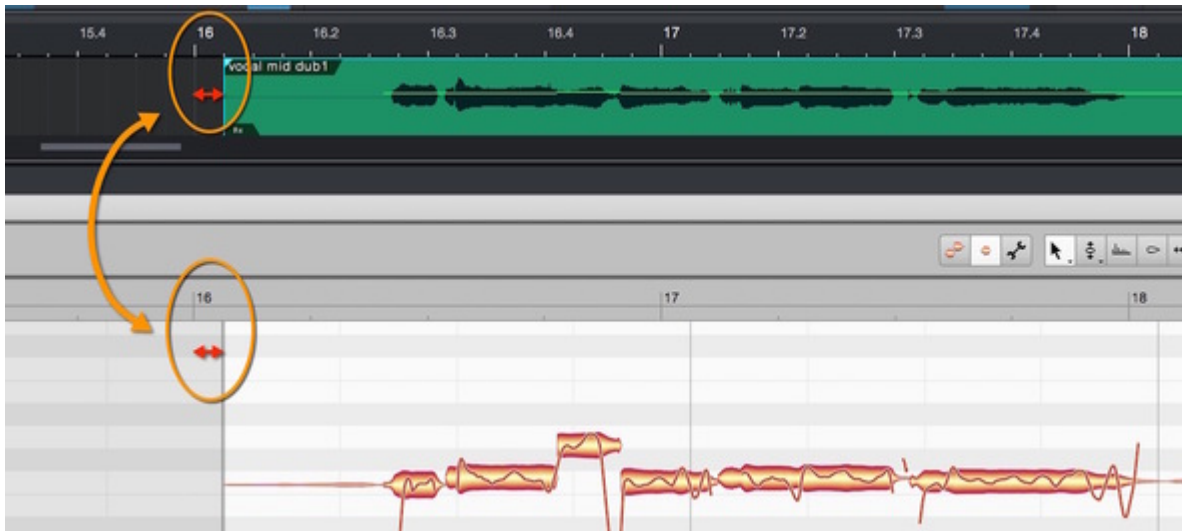
- DAW再生中、クリップはソングのテンポ、つまり括弧の_前_の値に従います。これは、このテンポに合わせて元のファイルを伸縮することで行われます。
- ローカル再生中、クリップはオリジナル(ファイル)のテンポ、つまり括弧内に表示されたテンポで聞こえ、タイムストレッチやスキーズは生じません。

ノートアサインメントモードでのテンポディスプレイ:

- Melodyneの[テンポ]フィールドには1つの値が表示されます:元のファイルのテンポです。
- ルーラーとタイムグリッドは同期します。
- DAW再生はソングテンポに従います。ローカル再生はファイルテンポに従います。ここには違いがひとつあります。この編集モードでMelodyneルーラーをダブルクリックすると、ローカル再生がスタートし、DAWの再生は(トラックモードやクリップモード同様)スタートしません。

ノートをクオンタイズする

「テンポとタイムグリッド」セクションで説明したとおり、ルーラーとタイムグリッドの間にずれがでることがあります(クリップモードのみ)。これらはガイドとして機能し、タイムグリッドがルーラーから16分音符分だけ前にあることから、DAWで16分音符分前に動かした可能性があることが示されます。



ただし、このようなオフセットはクオンタイズに影響します。これは、Melodyneがクオンタイズに独自のタイムグリッドを使用し、DAWのルーラーを使用しないためです。もちろん実際には、2つはほぼ同一で、クオンタイズはMIDIエディターでの操作に似た動作になります。しかし、上記のように、クリップがDAWアレンジで移動されている場合(数ミリ秒分)、クリップモードでは、クオンタイズされる先(クオンタイズを実行するとノートが移動する方向)は見て分かります。

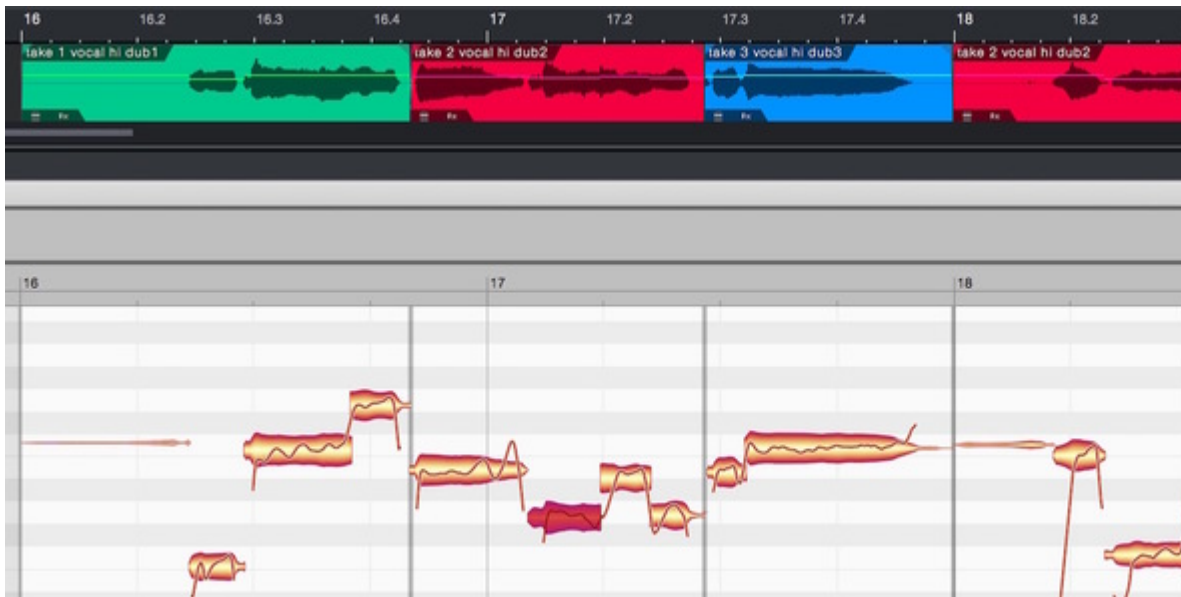
トラックモードでのクオンタイズはクリップモードでのクオンタイズと同じように機能し、元のファイルのタイムグリッドに基づきます。ただし、トラックモードでは、上記のような例外のケース(DAW内でクリップが左右にわずかに動いている場合など)ではクオンタイズ先がグリッド線から少しだけずれているため、DAWのタイムグリッドが分かりにくい場合もあります。ですがこれは見た目のずれに過ぎません。気になる場合はクリップモードに切り替えると、クオンタイズ先とグリッド線が一致するようになります。

ノートをコピーおよびペーストする

クリップ内では、ノートを制限なくコピー&ペーストできます。あるクリップからノートをコピーして別のクリップにペーストできるかどうかは、これら2つのクリップが同じオーディオファイルにアクセスしているかどうかによります。

たとえば、DAWでドラム録音をクリップに分割し、DAWアレンジ内に配置して、それをMelodyneのトラックモードで見ているとします。この場合、ノートは、クリップ境界を気にすることなく、自由にコピー&ペーストできます(クリップがもともと「ひとつ」の長い録音物の一部であるため)。

一方、複数の異なる録音(ボーカルのテイクなど)から取得したスニペットをDAWアレンジ内にコラージュして、それをトラックモードで見ている場合、上記と同じ自由度でノートをコピー&ペーストすることはできません。以下の図では、由来元のテイクごとにクリップが色分けされています。



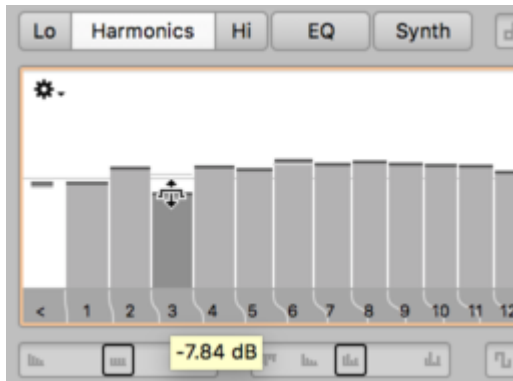
ここでは小節17の先頭で選択されているノート(および赤のクリップに由来するその他のノート)をコピーして小節16にペーストすることはできません。これは、ペースト先に異なる色(この場合緑)のクリップが含まれており、別の録音に由来するものだからです。ただし、同じ赤のテイクに由来する小節18にペーストすることは可能です。

サウンドエディターのトラックモードとクリップモード

ARA統合使用時のサウンドエディターは(スタンドアロンの場合同様)「トラック単位」で機能します。つまり、トラックモードで作業しており、該当のトラックに複数のクリップが含まれている場合、サウンドエディターになされたあらゆる変更は全てのクリップに同じように影響を与えます。たとえば、第3上音を10dB下げた場合、この設定はトラック上の全てのクリップに適用されます。

ただし、クリップモードに切り替えて、選択されているクリップの第3上音を4dB上げると、選択されているクリップ内の該当する上音の値は2つの調整の合計(つまり-6dB)になり、他のクリップ内の第3上音の値は-10dBになります。こうすることで、それぞれのクリップに異なる設定を適用できます。

ここでトラックモードに戻すと、サウンドエディター内に-10~-6dBの値が該当する上音に対して表示されます。これは表示上の妥協で、該当する全てのクリップの平均が表示されています。



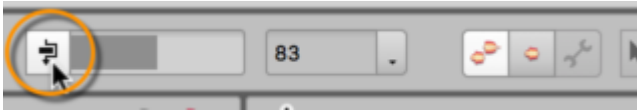
同様に、各クリップのパラメーターを調整するためクリップモードに切り替えることを繰り返すと、他のサウンドエディターコントロールも近似値を表示することがあります。先にも述べたとおりこれは一種の妥協ですが、これが混乱の元になりそうな場合は、目ではなく耳を信頼するようにしましょう。

上記の動作は、指定のトラック上の全てのクリップが異なる録音に由来する場合に生じます。全てではなく、一部のクリップが同じ録音に由来するものの場合、この動作はいくらか異なります。このようなクリップのサウンドエディター設定に行った変更は全て、それと同じ録音に由来するクリップにのみ適用されます。

たとえば、4つの異なるテイクから1つのボーカルトラックを(上で説明した)コンピングで作成した際、ひとつのテイクの音が他と若干異なっていた(別の日に録音されていて声の質が違っているなど)とします。この場合、サウンドエディターで音質が異なっているテイクに由来するクリップを変更すると、そのテイクに由来する全てのクリップに影響します。

比較スイッチ

Melodyneでの作業中、編集された録音の現在の状態と、元のオーディオファイルを比較したい場合がよくあります。Melodyneを無効にするDAWのバイパス機能に加えて、Melodyneの[比較]スイッチは同様の機能を果たします。



ただし、DAWのバイパス機能とは異なり、Melodyneの[比較]スイッチは全ての編集の音だけでなく見た目の違いも比較します。次のような影響があります。

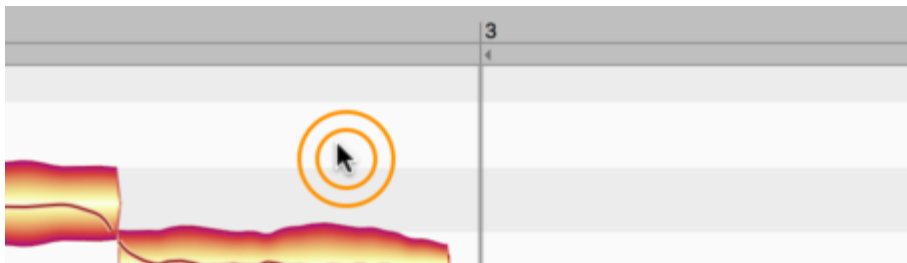
- [比較]スイッチは、どのトラックであるかに関係なく、また現在ノートエディター内に表示されているかどうかに関係なく、Melodyneがコントロールする全てのクリップに影響します。そのため、ソング全体が、Melodyneでノート編集を開始する前の状態に戻ります。
- マクロやツールを使用して行ったかどうかに関係なく、ノートになされた全ての変更が解除されます。
- DAWのテンポに合わせるためのクリップのテンポ調整も覆されます。

再生、ナビゲーション、ズーム

このツアーでは、Melodyneのナビゲーションとオーディオ再生機能の概要について説明します。

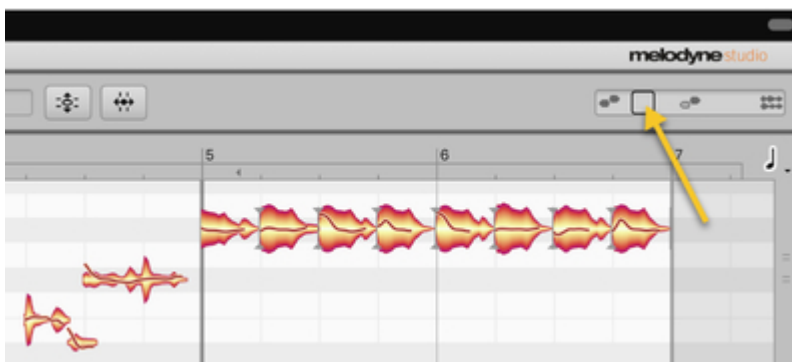
Melodyneでのローカル再生

たとえば、タイムルーラーやトランスポートボタンを使用してDAWから再生を開始すると、フルアレンジが再生されます。DAWミキサーはその後トラック間のバランスを判断します。同じ事は、Melodyneルーラーをダブルクリックして再生を開始する際にも言えます。ただし、Melodyneを「ソロ」にする(Melodyneで独自に再生する)ことも可能です。これを「ローカル再生」と呼びます。ARA統合があれば、このローカル再生はノートエディターの背景をダブルクリックして開始できます。



ローカル再生中に聞こえる内容は、現在の編集モードの状態により異なります。

トラック編集モードでのローカル再生: トラック編集モードでは、ローカル再生中、DAWにMelodyneがインサートされている全てのトラックが聞こえます。これらのトラックは通常どおりDAWミキサーを通過しますが、編集ミックスフェーダーを使用してMelodyneでプリミックスすることができます。



編集ミックスフェーダーが左端にある場合、色付きのノート、つまり、ノートエディター内で編集用に現在開いているトラックに属するノートのみ聞こえます。フェーダーを中央に向かって動かすと、灰色のノート(参照用のみ表示されている)がフェードインします。フェーダーをさらに右方向に動かすと、Melodyneのトラックリスト内の残りのトラック、つまり編集用でも参照用でもない開いているトラックがミックスに加えられます。編集ミックスフェーダーは、Melodyneでのローカル再生中のみ効果を生じます。DAWから再生を開始すると、ソングのトラック全てが聞こえ、編集ミックスフェーダーは効果を生じず、灰色表示になります。

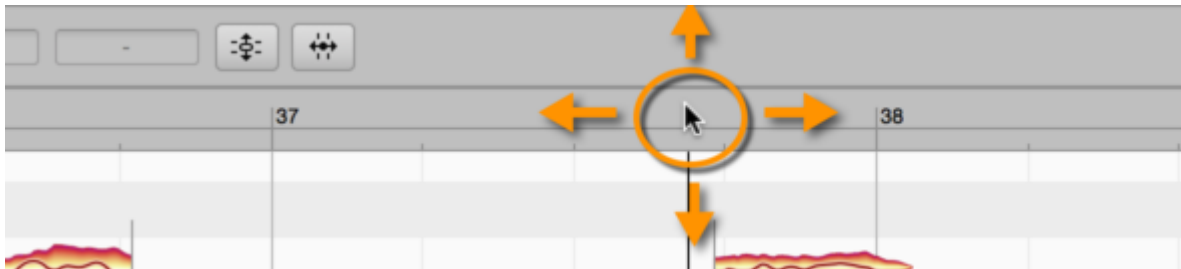
クリップ編集モードでのローカル再生: Melodyneに表示されている1クリップのみ聞こえます。ただし、このモードでの再生とDAWでの再生の間の大きな違いはクリップ境界に現れます。DAW再生中は、DAWで選択されているクリップ境界内にあるもののみ聞こえます。クリップ境界の配置が良くなく、ノートの先頭または末尾が切れている不完全なノートがある場合、DAW再生中にすぐ分かります。一方、ローカル再生中は、クリップ境界をまたぐ素材(灰色の背景のエリア内)が聞こえます。

そのため、DAWでクリップ境界を動かした場合どのような音になるのかを確認することができます。これは、このトラックの残り(定義されているクリップ外にある部分)を作業中のクリップ内にコピー&ペーストして素材として使用したい場合などにも便利です。

タイムルーラーを使って再生、スクラブ、ズームをコントロールする

- Melodyneタイムルーラーをダブルクリックすると、DAW再生が対応する位置からスタートします。
- 該当位置からMelodyneのみ(ローカル再生)をスタートさせるには、Melodyneのノートエディター背景内をダブルクリックします。
- Altを押したままタイムルーラーをダブルクリックすると、DAWとMelodyneの両方で現在選択されているノートのみ再生されます。
- Altを押したままノートエディターの背景をダブルクリックすると、Melodyne内でのみ、選択されているノートのみが再生されます。

これらの機能は再生中にも使用できます。



タイムルーラーをクリックすると、再生カーソルがクリック位置に移動し、再生が停止します。

オーディオ素材内をスクラブするには、タイムルーラーをクリック&ドラッグします。

上または下にドラッグすると、表示を現在位置でズームすることができます。スクラブとズームは組み合わせて使用することができ、ズームの度合い調整しながらカーソルを直感的に操作できます。

Melodyne studioでは、(ノートエディターの背景をダブルクリックしての)再生の開始やノートエディターのタイムルーラーでのスクラブでは、ノートエディターの編集ミックスフェーダーにより聞こえる音が決定されます。フェーダーボタンが完全左にある場合、ノートエディター内の色の付いたblobに対応するノートのみ聞こえます。フェーダーボタンを中央に動かすと、参照用により表示されている灰色のblobの音が少しずつ上がっていきます。フェーダーボタンを完全右に動かすと、現在ノートエディターに表示されていないものを含むすべてのMelodyneトラックが聞こえます。

ウィンドウサイズを変更する

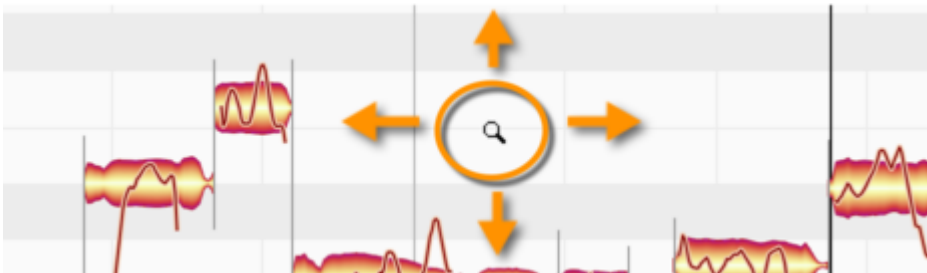
ウィンドウのサイズを変更するには、右下隅をドラッグします。この操作は、Melodyneスタンドアロンでもプラグインでも同じです。



ノートエディターでのスクロールとズーム

マウスで表示エリアを移動するには、メインツールのドロップダウンからスクロールツール(手の形をしたアイコン)を選択するか、CommandとShiftキーを押したままドラッグします。

マウスで表示エリアをズームするには、ズームツール(ルーベの形をしたアイコン)を選択するか、Command+Altキーを押したままドラッグします。水平および垂直方向に同時にズームすることができます。ズームの度合いは場合により異なります。

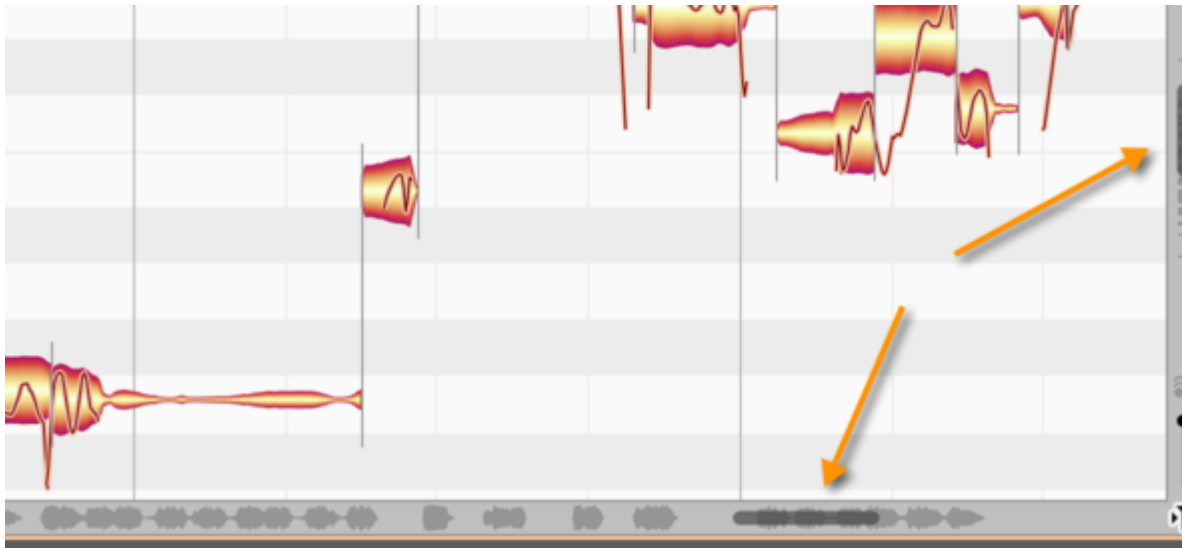


選択されている1つまたは複数のblobにズームするには、Command+Shift+ダブルクリックします。ズームアウトするには、編集エリアの背景をダブルクリックします。

ご使用のハードウェアが相当する機能に対応している場合、マウスやトラックパッドを使用してもスクロールやズームが行えます。

- 水平または垂直方向にスクロールするには、マウスホイール、およびトラックパッドの2本指スワイプを使用します。
- 水平方向と垂直方向に同時にズームするには、トラックパッドのピンチアウト(2本の指でタッチしてから指の間を広げる)を使用します。

表示範囲を移動するには、水平または垂直スクローラー(スクロールボックス)をドラッグします。スクローラーには、blobの配置を示す縮小イメージが表示されています。

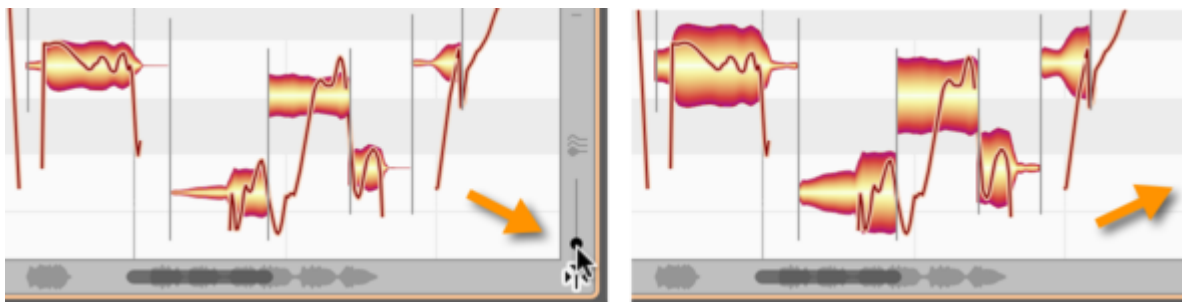


表示をズームするには、スクローラーの端をドラッグします。

特に長いオーディオファイルを編集する場合、サイズの小さいスクローラーでは必要なズーム解像度を得られにくいことがあります。このような場合、CtrlとAltキーを押したまま編集エリアをドラッグするか、タイムルーラーで垂直方向にドラッグしてズームインすることができます。

垂直または水平スライダーの左端または右端を外向きにドラッグすると、表示部分のサイズを垂直方向または水平方向に広げることができます。この機能は、プラグインでの使用に便利です(最初の3小節だけを転送してこの部分を操作し、第20小節に何かを挿入したい場合など)。

すべてのblobが表示されるようズームを調整するには、スクローラーの中央をダブルクリックします。サイクルモードがアクティブの場合、水平スクロールをダブルクリックすると、サイクル範囲全体が表示されるようにディスプレイがズームされます。



blobの高さを変更するには、ノートエディター近くの右下隅のスライダーを使用します。この操作ではボリュームは変化しません。この機能は、音量の極端に小さいまたは極端に大きいノートが多数含まれる素材を表示させる場合に便利です。

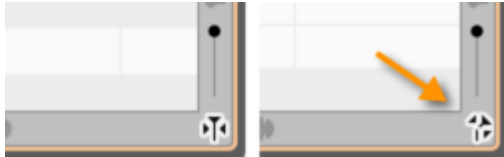
ノートエディター内の自動スクロールについて

1つまたは複数のノートが選択されている場合、Melodyneは、選択対象が編集されるものと判断し、自動スク

ロールを一時的に無効に切り替えます。(ノートエディターの背景をクリックするなどして)ノートの選択が解除されると、再生カーソルの位置から表示エリアのスクロールが再開されます。

同様に、再生中に水平スクローラーを動かして再生カーソルが画面上から消えると、自動スクロールが無効になります。この場合、停止または再開しても自動スクロールは再び有効になりません。

自動スクロールが一時的に無効の場合、ノートエディター右下隅の自動スクロールアイコンがここに示すような形になります。



ナビゲーションとズーム機能

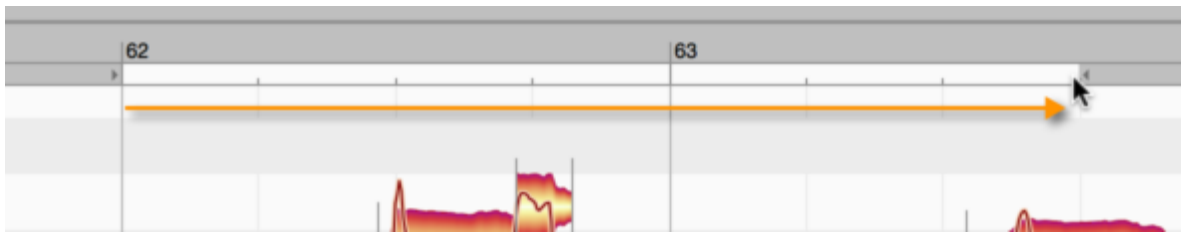
- ウィンドウのサイズを変更するには、右下隅をドラッグします。
- 表示エリアを移動するには、Command+Shiftキーを押したまま編集エリアの背景をドラッグします。
- 上下にスクロールするには、マウスホイールを使用します。左右にスクロールするには、Shiftを押したままマウスホイールを上下にスクロールします。
- 表示をスクロールするには、トラックパッドの2本指スワイプを使用します。
- 表示をズームするには、トラックパッドの2本指ピンチを使用します。
- 表示エリアを水平方向/垂直方向にズームするには、Command+Altを押したままノートエディターをドラッグします。
- 指定のエリア内をズームインするには、タイムルーラーを垂直方向にドラッグします。
- 縦軸と横軸を同時にズームするには、Command+Altを押したままマウスホイールを使用します。
- 現在選択している1つまたは複数のblobにズームするには、Commandを押したままダブルクリックします。
- ズームアウトするには、Commandを押したまま編集エリアの背景をダブルクリックします。
- 表示を水平方向/垂直方向に移動するには、スクローラーをドラッグします。
- 表示を水平方向/垂直方向にズームするには、スクローラーの端をドラッグします。
- 表示部分の長さを伸ばすには、スクローラーの左端または右端を外向きにドラッグします。この機能はプラグインでは重要となります(最初の4小節だけを転送してこの部分を操作し、第20小節に何かを挿入したい場合など)。
- すべてのノートを水平方向/垂直方向にズームするには、スクローラーをドラッグします。
- blobの高さを変更するには、右下隅のスライダーを使用します。

サイクルモード

Melodyneのサイクルモードでは、選択されているパッセージがエンドレスでリピートされます。

サイクルゾーンを定義する

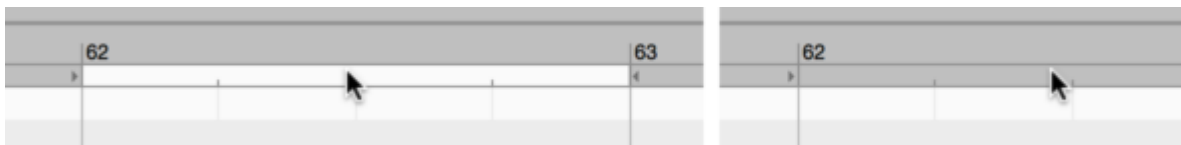
サイクルゾーンを設定するには、タイムルーラーの下半分をクリック&ドラッグします。Altキーを押したまま操作すると、タイムグリッドを無視してスタート位置とエンド位置(「サイクルロケター」)を自由に設定することができます。



ARAが機能中の場合、DAWのサイクルとMelodyneのサイクルはしっかり連結されます。一方のサイクルを変更すると、もう一方のサイクルも同時に変更されます。

サイクルモードのオンとオフを切り替える

タイムルーラー下の細い帯上のサイクルゾーンをダブルクリックしてサイクルモードのオンとオフを切り替えます。サイクルモードがオンの場合、サイクルゾーンが濃い灰色で表示されます。



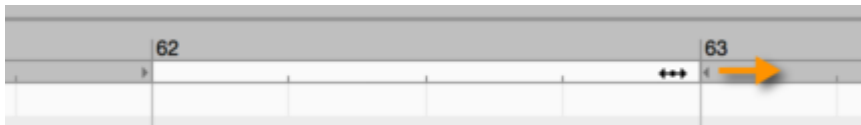
Melodyneスタンドアロンでは、トランスポートのアイコンを使ってオンとオフを切り替えることもできます。



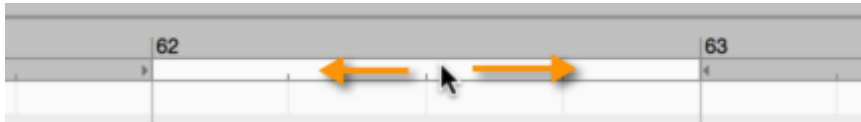
[ファイル]>[環境設定]>[ショートカット]を選択し、サイクルモードのオンとオフを切り替えるキーボードショートカットを定義することもできます。

サイクルゾーンの長さを変更して移動する

サイクル範囲の長さを変更するには、右または左のロケターをドラッグします。Altキーを押したまま操作すると、タイムグリッドを無視してロケターを自由に設定することができます。



サイクルゾーン全体を左右に移動するには、範囲の中央をドラッグします。Altキーを押したまま操作すると、タイムグリッドが無視されます。



サイクルロケーターを左右に広げるには、サイクルゾーンの左右の任意の位置をShift+クリックします。Altキーを押したまま操作すると、タイムグリッドが無視されます。

選択されているblobを使用してサイクルゾーンを定義する

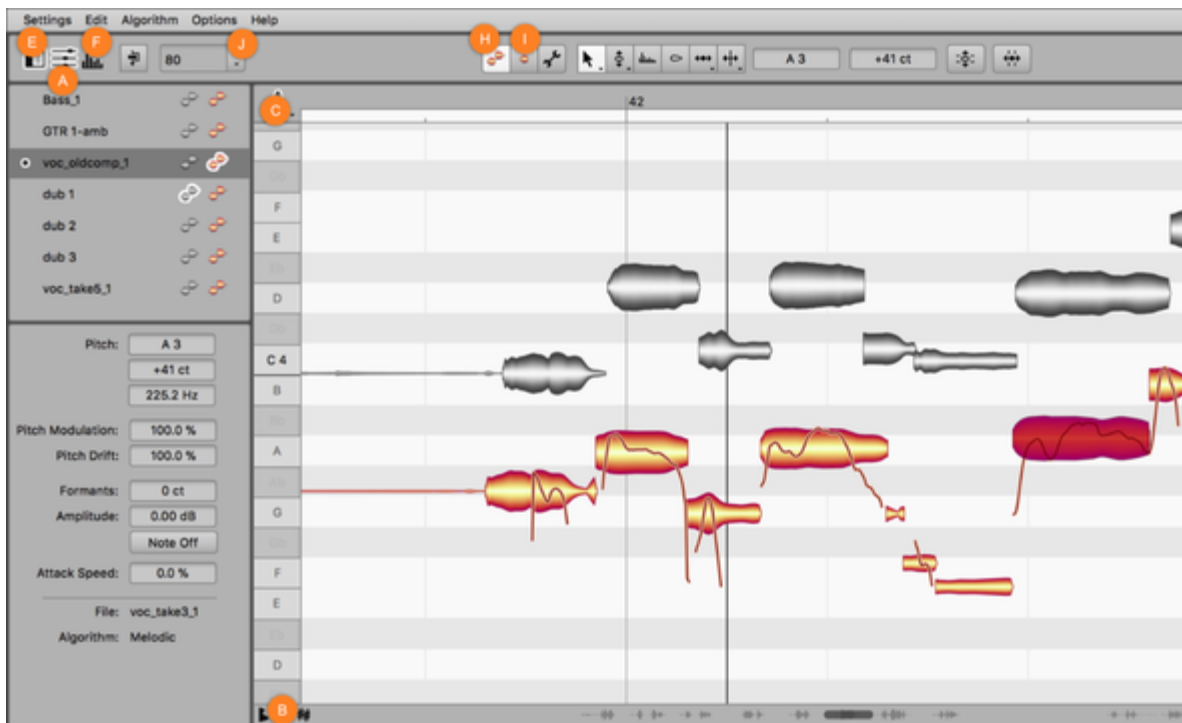
サイクルゾーンを選択されているblobの最初または最後へ移動させる(最も近いグリッドラインへスナップされます)には、Shiftキーを押したままサイクル範囲をダブルクリックします。Shiftキーに加えてAltキーも押したまま操作すると、サイクルゾーンはグリッドにスナップせず、選択されているblobの最初のblobの先頭と最後のblobの末尾の間に移動します。

表示とその他のオプション

Melodyneは、プログラムの外観と動作を好みに合わせて変更できる、ノートエディターのユーザーインターフェイスおよび操作のさまざまなオプションを提供します。

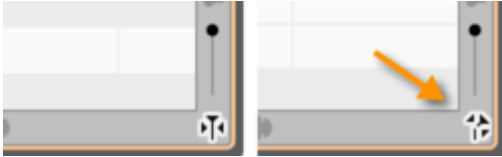
ユーザーインターフェイスの要素を表示/隠す

Melodyneのユーザーインターフェイスは、作業状況やニーズに合わせて変更できます。これらは[オプション]メニューまたはインターフェイス内で行えます。



- プラグインインスタンスのリストを表示(A): プラグインインスタンスのヘッダーに表示されるパネルの表示と非表示を切り替え、[情報]パネルの高さを調整します。
- 音階エディターを表示(B): 3つの音階エディター列の表示/非表示を切り替えます。
- ピッチグリッド設定(C): ピッチグリッドのオプションを提供します。
- タイムグリッド設定(D): タイムグリッドのオプションを提供します。
- 情報パネルを表示(E): [情報]パネルの表示と非表示を切り替えます。
- サウンドエディターを表示(F): サウンドエディターをノートエディターの下に表示/隠します。
- 自動スクロール(G): このオプションを選択すると、再生カーソルに合わせてノートエディターの表示がスクロールします(これについて詳しくは下参照)。
- トラック編集モード(H): トラック上のすべてのリージョン/クリップのノートを表示します。
- クリップ編集モード(I): 現在選択されているリージョン/クリップのノートのみを表示します。

- テンポダイアログ(J):テンポ調整の方法を管理するさまざまなオプションを提供します。
- クリップ境界(K):クリップ間の境界を示す灰色の線です。線の表示は[オプション]>[クリップ境界を表示]で有効/無効にできます。



ノートエディター内の自動スクロールについて:1つまたは複数のノートが選択されている場合、Melodyneは、選択対象が編集されるものと判断し、自動スクロールを一時的に無効に切り替えます。(ノートエディターの背景をクリックするなどして)ノートの選択が解除されると、再生カーソルの位置から表示エリアのスクロールが再開されます。

同様に、再生中に水平スクローラーを動かして再生カーソルが画面上から消えると、自動スクロールが無効になります。この場合、停止または再開しても自動スクロールは再び有効になりません。

自動スクロールが一時的に無効の場合、ノートエディター右下隅の自動スクロールアイコンがここに示すような形になります。

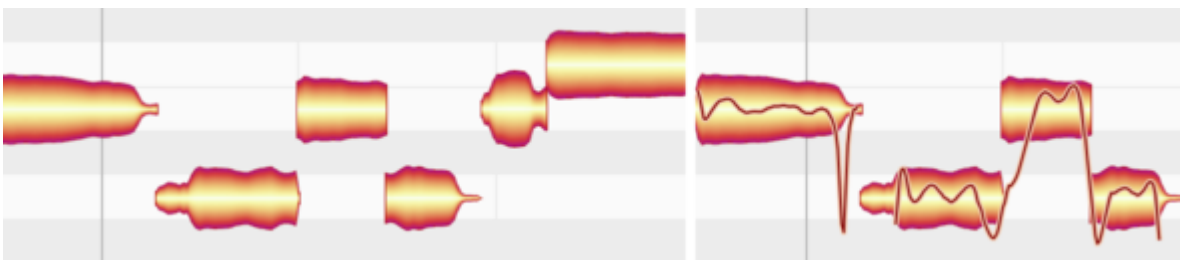
以下に説明しているオプションはすべてノートエディターに関連しており、メインメニューの[オプション]>[ノートエディターオプション]を選択するか、ノートエディター右上隅の歯車アイコンをクリックすると表示されます。

これらのオプションは、編集モードとノートアサインメントモードに対して個別に選択できます。

ピッチカーブを表示

[ピッチカーブを表示]を選択すると、音の音高を示す細い曲線が各blob内に表示されます。

左は何も表示されていない(ノートエディター表示オプションで何も選択していない場合の)blob、右はピッチカーブが選択されている場合のblobです。

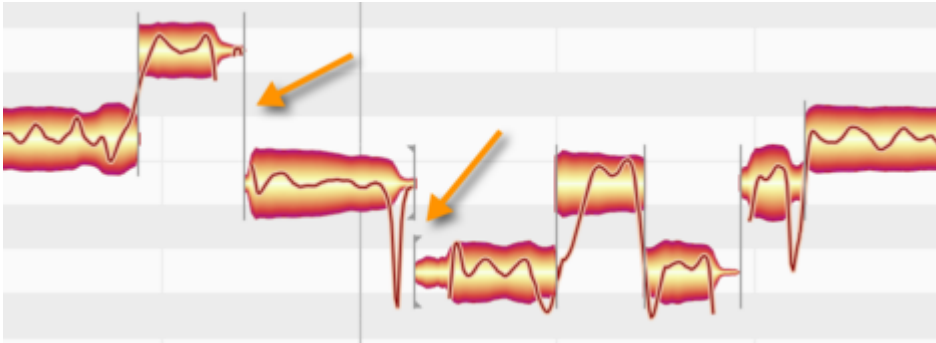


このオプションが選択されているかどうかに関係なく、ピッチツールが選択されている場合は常にピッチカーブが表示されます。

ノート分割を表示

[ノート分割を表示]を選択すると、ノートの最初と最後を示す境界線に灰色の垂直線が表示されます。

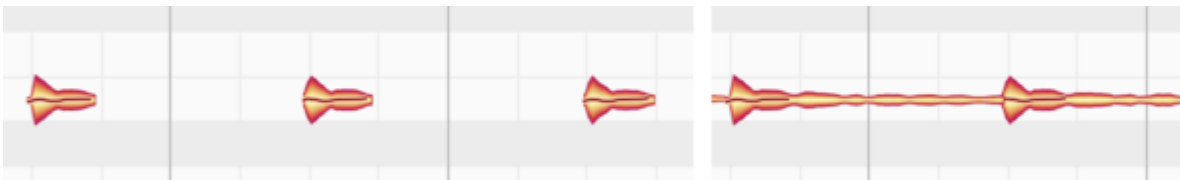
ノート分割は、線(つながっているノート間の「ソフト」な分割)または細括弧(ハードな分割)として表示されます。



このオプションが選択されているどうかに関係なく、ノート分割ツールが使用されている場合は常にノート分割が表示されます。

ノートテールを表示

ノートを検出し表示する際、Melodyne editorはノート自体とノートのテールを区別します。ノートは「音楽的な事象」であり、テールは「音楽的ではないサウンドのフェードアウト部分」として認識されます。演奏された音に付随する残響音などがテールとなります。[ノートテールを表示]では、ノートのリバーブテールの表示と非表示を切り替えることができます。重点が音楽的な側面なのか音響的な側面なのかによって表示を切り替えるといでしょう。



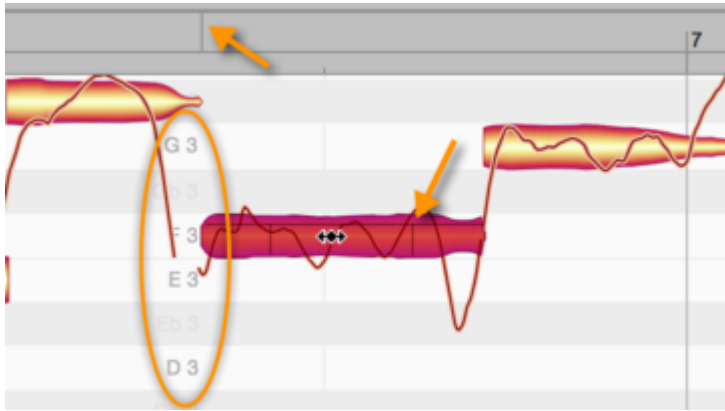
テールが表示されていない場合、タイミングツールでノートの最後の部分をドラッグし、ノートの長さを変更することができます。この際、テール部分は変更に合わせて自動的に調整されます。この表示オプションは、意図されるイベントの概要が分かりやすくなることを目的として提供されています。

テールが表示されている場合、タイミングツールでテール部分をドラッグすることができます。[ノートテールを表示]は、残響などを含む、実際に聞こえる音をできるだけそのまま表示させたい場合に適しています。

blob情報を表示

[blob情報を表示]では、各音を操作する際に参考となるさまざまな要素の表示と非表示を切り替えることができます。

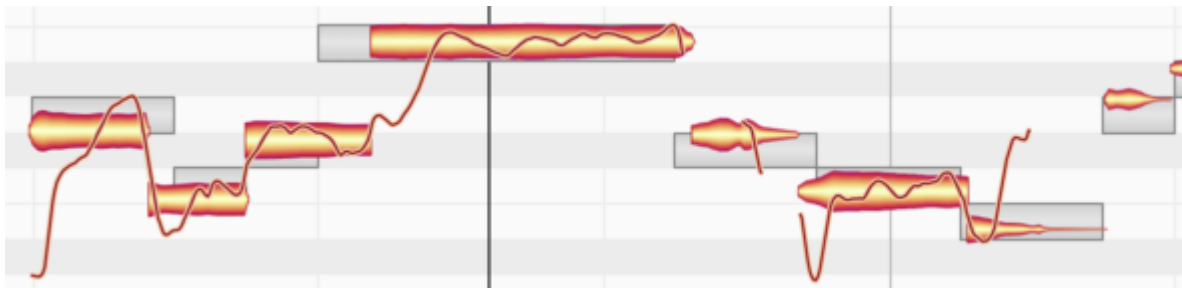
もっとも特筆すべき要素はローカルピッチルーラーです。マウスポインタをノート上に移動させると、ノートの前に表示されます。blobをドラッグしようとする、blobの形をしたドラッグゾーンを示す細線が表示されます。



[blob情報を表示]が選択されている場合、マウスポインタをノート上に移動させると、ノートの最初に合わせた垂直線もタイムルーラーに表示されます。これにより、より正確な位置合わせが行えます。

対象ノートを表示

[対象ノートを表示]を選択すると、各blobを囲む灰色の枠が表示されます。

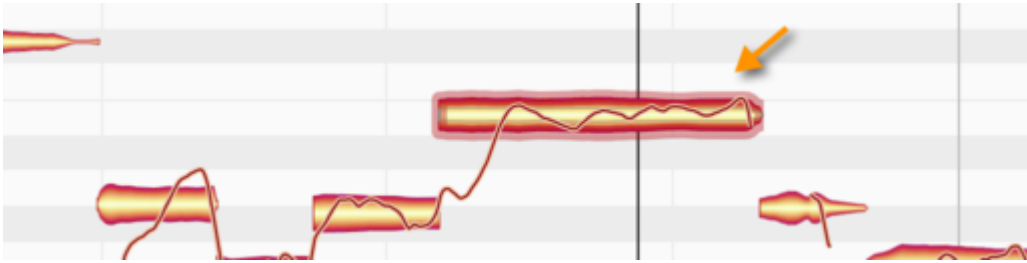


この枠は、半音単位のリッド線に一致しています。つまりこれは、Melodyneが(オーディオ分析に基づいて)ノートの音高と拍子または小節内の位置をどのように仮定しているかを示しています。ほとんどの場合この仮定は正確に行われますが、必ずしも正しいとは限りません。参考としてとらえておくといでしょう。

この枠は、マクロを使って部分的なクオンタイズをノートに適用する際にノートが引き寄せられる先の音高と時間上の位置も示しています。また、タイムツールまたはピッチツールを使ってダブルクリックするとスナップされる位置も示しています。

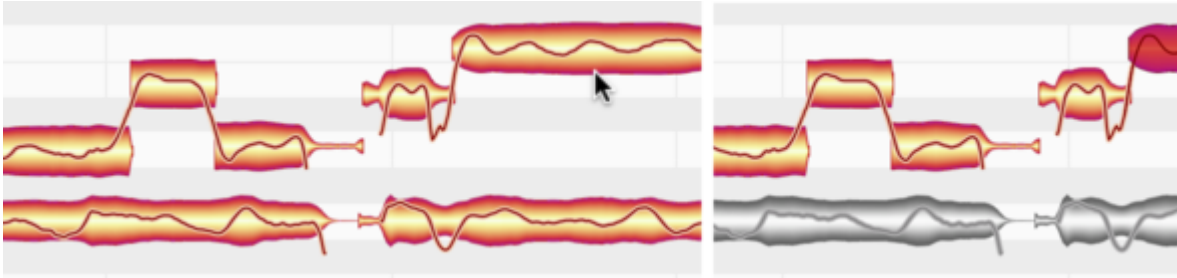
再生中ノートを強調表示

このオプションでは、現在再生中のノートを強調表示するかどうかを選択できます。強調表示は、画面上にノートが多数存在する場合に便利です。



関連トラックを強調表示

このオプションを選択すると、ノートエディター内に複数のトラックが表示されている場合に、どのノートがどのトラックに属しているかがより分かりやすくなります。このオプションを選択してツールでノートをクリックすると、マウスボタンを押している間、クリックしたノート以外が属するトラック以外のトラックに属しているすべてのノートが灰色で表示されます。どのノートが選択されているトラックと同じトラックに属しているかが一目で分かります。

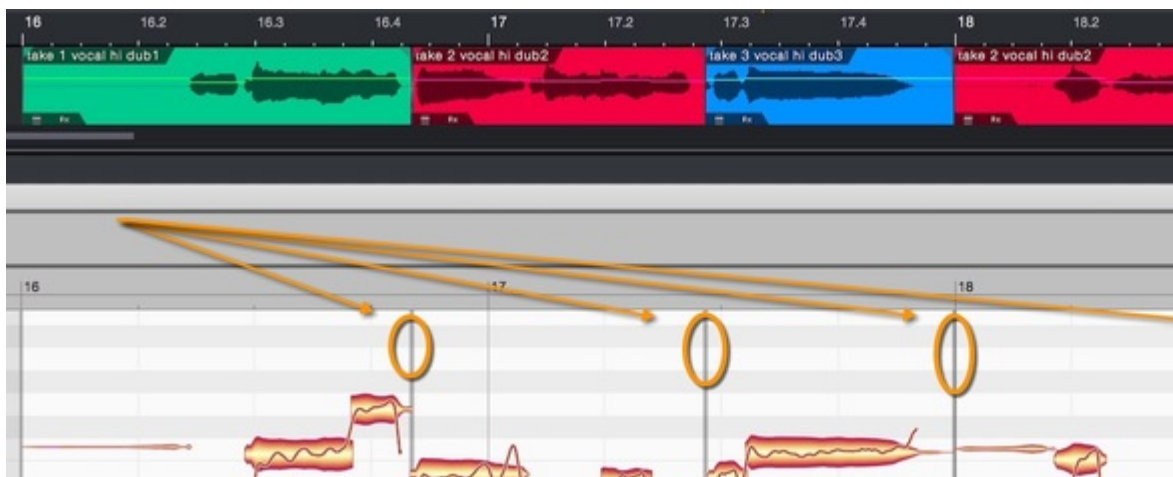


blob編集時にモニター

このオプションが選択された状態でノートエディター内でblobのピッチをシフトさせると、クリックされた位置のノートのサウンドが再生されます。このオプションはオンとオフを切り替えることができます。

クリップ境界を表示

このオプションは、ARA使用時のみ表示されます。希望に応じて、トラックモードのクリップ間に灰色の線を隠して、ノートエディター内の素材をより分かりやすく表示できます。操作中のトラックに多数のクリップが含まれており、ディスプレイを大幅にズームアウトしている場合、これは特に便利です。



環境設定とキーボードショートカット

[環境設定]ウィンドウでは、Melodyneの動作オプションおよびキーボードショートカットを設定できます。

ウィンドウと一般設定を開く

Melodyneプラグインでは、[設定]メニューから[環境設定]を開きます。Melodyneスタンドアロンでは、プログラムメニュー(macOS)またはファイルメニュー(Windows)から[環境設定]を選択します。スタンドアロンの設定オプションは、プラグインの設定オプションとは多少異なります。



以下のコマンドは、両方のMelodyneで選択可能です。いずれかのMelodyneで変更を行うと、どちらのMelodyneにも適用されます。

- 言語: ユーザーインターフェイスの言語を選択します。
- ピッチラベル: 音名に使用する表記を、英語式(C、B、Bbなど)、ドイツ式(C、H、Bなど)、ラテン式(Do、Si、Sibなど)に設定します。
- アピアランス: ここでは、ユーザーインターフェースに対するさまざまなコントラスト設定を選択できます。
- デフォルトチューニング: 基準音高A(中央Cの上のA)の周波数を設定します。
- 取り消しの最大回数: Melodyneでは最大100の編集操作を取り消しできます。デフォルト値は25です。必要に応じて、この値を上げることができます。値を上げるとより多くのRAMを消費し、下げるとRAMを節約できます。
- ツールチップを表示Melodyneの操作に慣れたら、ツールチップ(アイコンやユーザーインターフェイスの要素にカーソルを重ねると表示される説明文)を非表示にすることができます。

ショートカット

[環境設定]の[ショートカット]ページでは、さまざまな機能に対してMelodyneで使用するキーボードショートカットをカスタマイズできます。



カテゴリ左の三角形をクリックすると、使用可能なコマンドのリストが表示されます。

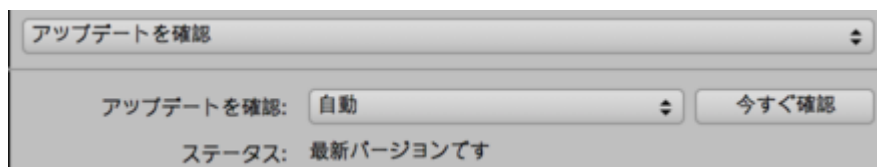
コマンドをクリックしてから、キーまたはキーの組み合わせを押してショートカットとして割り当てます。そのキーまたはキーの組み合わせが該当するコマンドに割り当てられます。必要に応じて、この手順を各コマンドに対して繰り返します。

不要なショートカットを削除するには、該当するコマンドを選択してから削除キーを押します。[リセット]ボタンをクリックすると、ファクトリーデフォルトを復元できます。このボタンをクリックすると警告メッセージが表示されます。

[エクスポート]と[インポート]のボタンでは、キーボードショートカットのセット1つをストレージデバイスに保存したり、保存したセットを再ロードしたりできます。こうすることで、スタジオからスタジオへと移動する場合も、ショートカット設定をUSBスティックに保存して持ち運ぶことができます。

アップデートを確認

このページでは、Melodyneがアップデートを自動的に確認するか、ユーザーが手動で確認する([今すぐ確認]ボタンを押したときのみ確認する)かを設定できます。



オーディオ特性とアルゴリズム

Melodyneは、さまざまな種類のオーディオ素材の表示と編集にさまざまなアルゴリズムを使用します。ここでは、選択可能なアルゴリズムと、各種オーディオ素材に対して使用されるアルゴリズムについて説明します。

検出処理

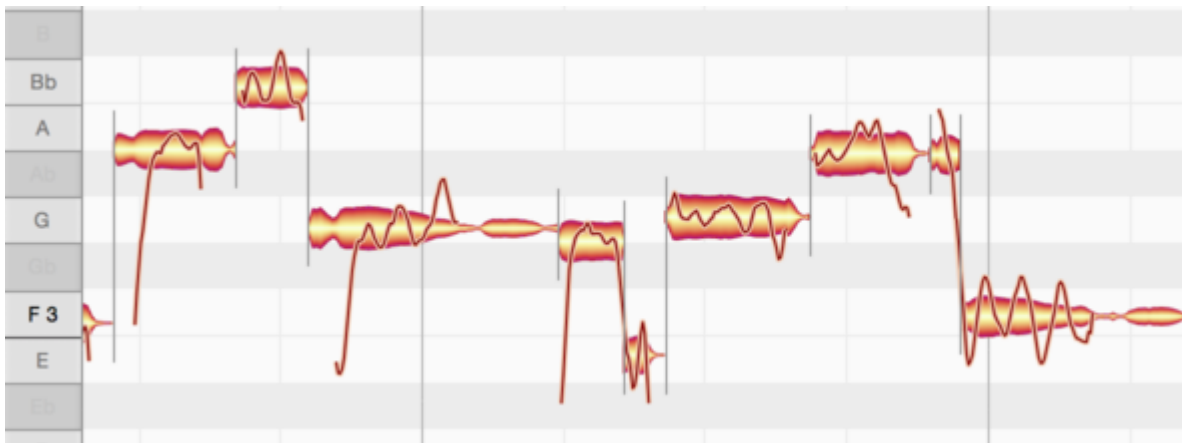
Melodyneは、オーディオ素材を分析し、含まれている音を見つけ出し、編集可能な状態にします。この処理を「検出」と呼びます。

検出処理により、Melodyneは対象となる素材の種類を判別し、ノートの表示と再生にどのアルゴリズムを適用すべきかを判断します。現在選択されているアルゴリズムには、[アルゴリズム]メニューとノートエディターのblobのオプションにチェックマークが表示されます。特にポリフォニックなオーディオ素材の場合、検出プロセスでは、変更不可能な原理に関連する理由により、完璧な結果をもたらすことはできません。録音素材を音楽的に正確に分析することは、効率に優れた編集と説得力のある結果を得るために最も重要なベースであるため、検出結果を系統的に確認し、必要な修正を行うことをおすすめします。

メロディック

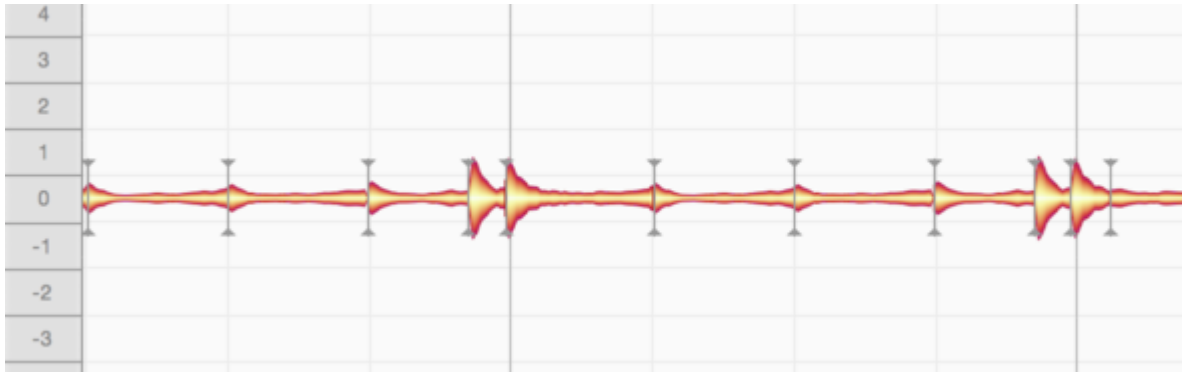
メロディック素材はモノフォニックです。つまり、1回に1つの音しか鳴っていません。モノフォニック素材であっても、反響によって音が重なり合い、一種のポリフォニーを形成することがあります。Melodyneを使用してメロディック素材を編集するつमりの場合、録音内容ができるだけクリーンかつ「ドライ」(反響のない)になるよう心がけてください。

メロディック素材内の音を示すblobは、さまざまなピッチで表示されます。blobが離れているかくっついているかは、演奏方法または発声方法により(スタッカートまたはレガート)異なります。



パーカッシブアルゴリズム

このカテゴリには、ドラムやその他のパーカッション楽器の録音だけでなく、Melodyneがピッチを検出できないノイズや効果音およびその他の素材も含まれます。パーカッシブアルゴリズムを選択すると、連続するドラムのストロークを識別することができますが、どれもすべて同じピッチとして表示されます。blobのピッチを上下に変更することはできますが、ピッチルーラーにはノート名が表示されず、半音単位での相対値のみ表示されます。音階機能は無効になります。



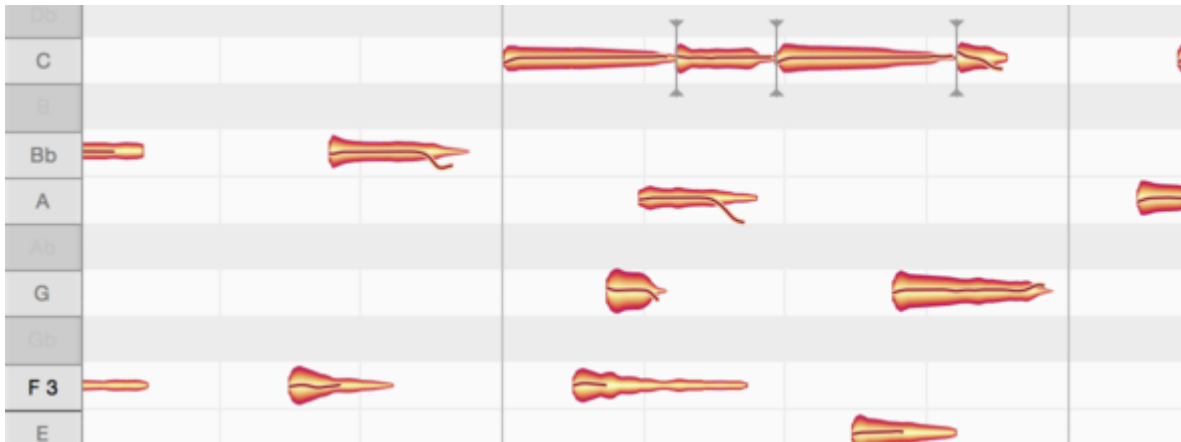
ポリフォニック(サステイン/ディケイ)アルゴリズム

Melodyneでは、DNA Direct Note Accessテクノロジーにより、ピアノやギターなどのポリフォニック素材に含まれる音、さらには和音を構成する各音を検出して編集することができます。ポリフォニックアルゴリズムが使用されている場合、blobはモノフォニック素材の場合とほぼ同じように表示されますが、和音または和声的音程のサウンドではblobが垂直方向に重ねられて表示されます。

2種類のポリフォニックアルゴリズムがあります。

- ポリフォニックサステインは、旧バージョンのMelodyneのユーザーにはおなじみのアルゴリズムで、幅広いポリフォニックなオーディオ素材に適しています。
- ポリフォニックディケイは、このアルゴリズムの1バリエーションで、非常にパーカッシブでありながら調性が識別可能な信号に特に適しています。

DNAは、単一のポリフォニック楽器(ギター、ピアノなど)のトラックに対して個別に使用するようにデザインされており、楽器ではなく音高に従って音を分割します。2つの楽器が同じ音を同じ拍で演奏している場合、両方の楽器の音を組み合わせた1音のみが編集可能となります。

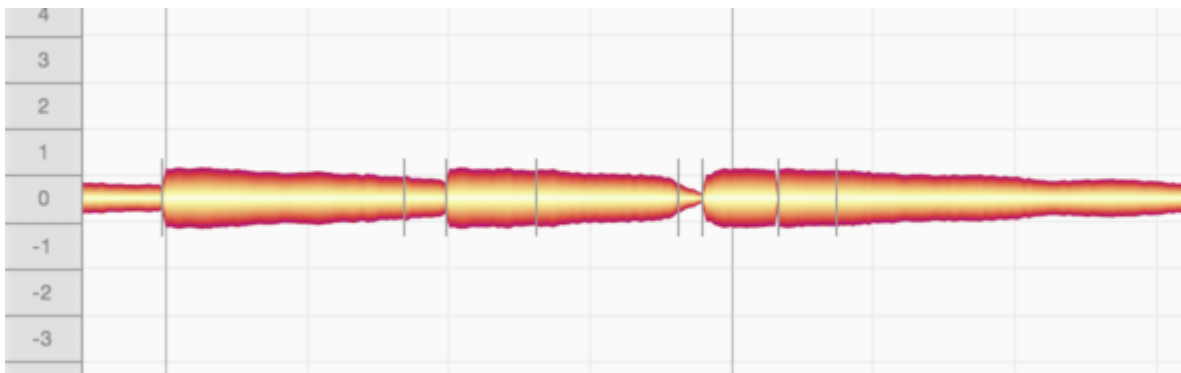


注:一部のオーディオ素材は、含まれている音要素が少ないため、ポリフォニックアルゴリズムを使用すると検出されない場合があります。このような素材で、デフォルトにいずれかのポリフォニックアルゴリズムを選択している場合(下参照)、ポリフォニック検出処理は中断され、より適したパーカッシブアルゴリズムを使用して新たに検出が行われます。このような場合、希望に応じてこの検出完了後にユニバーサルまたはメロディックに切り替えることができます。

ユニバーサルアルゴリズム

ユニバーサルアルゴリズムは、パーカッシブな要素と調性の要素の両方を含む複雑な信号に特に適しています。たとえば、音楽全体のピッチ、タイミング、テンポを変更したい場合、このアルゴリズムを使用すると最良のサウンドクオリティが得られます。

ユニバーサルアルゴリズムは、パーカッシブアルゴリズム同様、検出された音すべてを同じピッチで表示します。ピッチルーラーには階名は表示されず、単に半音の相対値のみ表示され、音階機能は無効になります。ユニバーサルアルゴリズムは検出プロセスを非常にすばやく完了し、ポリフォニックアルゴリズムに比べて消費するリソースが大幅に低くなります。スピードアップ、スローダウン、トランスポーズを行う予定のあらゆる種類の楽器を個別に録音する際に適しています。つまり、DNAやMelodyneの音階機能の必要のないトラックです。ユニバーサルアルゴリズムを使用して検出済みのファイルには、アタックスピードツールは使用できません。そのため、該当するblobにはアタックスピードハンドルが表示されず、ノートインスペクター内の[アタックスピード]フィールドは灰色表示となります。



アルゴリズムを切り替える

Melodyneで自動選択されているアルゴリズムは、いつでも別のアルゴリズムに切り替えることができます。たとえば、編集の目的にそぐわない形で素材が分析されている場合などに変更するとよいでしょう。これを行うには、再生を停止し、[アルゴリズム]メニューから任意のアルゴリズムを選択します。選択が反映され、表示が更新されます。注:この操作を行うと、アルゴリズムを切り替える前に行った編集は失われます。使用するアルゴリズムの選択は、編集を始める前に行いましょう。

注:この操作を行うと、ノートのコピーを含むアルゴリズムを切り替える前に行った 同トラックの 編集は失われます。(コピーされた他のトラック上のノートは残ります) 使用するアルゴリズムの選択は、編集を始める前に行いましょう。

Melodyneプラグインでは、転送ごとに個別のアルゴリズムを選択できます。Melodyneスタンドアロンでは、編集されるドキュメントのオーディオファイル(このような素材を「オーディオソース」と呼びます)ごとに選択できます。特定のオーディオソースにアルゴリズムを変更する前に、まずそれらに排他的に属する1つまたは複数のノートを選択する必要があります。ノートがひとつも選択されていない場合、または2つの異なるオーディオソースのノートが選択されている場合、[アルゴリズム]は灰色表示になります。このような場合は、単一のオーディオソースに属するノートだけを選択すると、アルゴリズムを切り替えることができます。

アルゴリズムを切り替えると新たな検出が実行され、Melodyneはオートストレッチスイッチの状態を確認します。オートストレッチ機能が有効な場合、新規検出が完了すると、ファイルのテンポも調整されます。オートストレッチが選択されていない場合、ファイルの元のテンポが維持されます。

自動または手動アルゴリズム

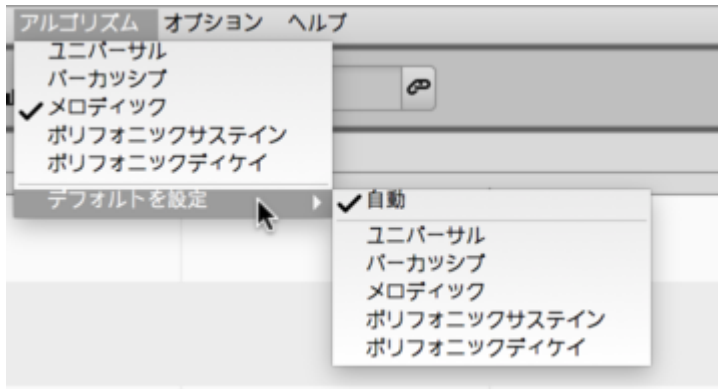
デフォルトでは、Melodyneはオーディオ素材の特性に合わせて最も適したアルゴリズムを自動選択します。しかし、Melodyneプラグインのインスタンス内またはスタンドアロン のトラック上 で素材が検出された場合、新しい素材がそのインスタンスに転送されたり、新しいファイルがスタンドアロン のトラック上 にドラッグされると、Melodyneは、たとえアルゴリズムに[自動]が選択されていても、その新しい素材に対して古い素材に使用されたものと同じのアルゴリズムを使用します。

この方法で[自動]設定を無効化すると、検出の一貫性が保たれ、ボーカルトラックからの転送が突然パークリップとして認識されるリスクを防ぎます。ただし、転送やファイルのアルゴリズムを手動で変更していた場合、オートメーションがのちに再び有効になり、すでに検出された素材への転送やファイルには注意が払われません。

このルールは、アルゴリズムに[自動]が選択されている場合にのみ適用されます。ただし、これはARAを搭載したMelodyneを使用している場合は適用されません。また、Melodyneスタンドアロンで、検出に適用された編集を含むMDDファイルがすでに存在している新しいファイルをドキュメントにドラッグした場合にも適用されません。

[アルゴリズム]メニューで別のデフォルトを設定しておくことで、検出処理に対するアルゴリズムが自動選択されるのを防ぐことができます。これは、パークリップアルゴリズムを使用して繰り返し編集したいのに、ファイ

ルを開くたびにポリフォニックアルゴリズムが選択されてしまうような場合に便利です。このような場合、パーカッシブアルゴリズムをあらかじめ選択しておけば、間違ったアルゴリズムで素材を分析した後に手動でアルゴリズムを切り替える時間と手間を省くことができます。



アルゴリズムをあらかじめ設定しておく必要がなくなったら、デフォルト設定に[自動]を選択し直しておきましょう。デフォルトのアルゴリズムの設定はプログラムを終了しても元に戻されないため、元に戻しておかないと、次回起動時に間違ったアルゴリズムで処理が行われてしまうことがあります。

ノートアサインメントモード

Melodyneで編集を行う前に、オーディオ素材の分析(「検出」と呼んでいます)を実行する必要があります。この分析のクオリティは、その後の素材の処理のスムーズさと、編集したサウンドの正確さに大きく関係します。そのため、Melodyneが素材内の音を検出したかどうかを確認し、必要に応じて間違いを修正することは重要です。Melodyneのノートアサインメントモードが便利に使用できるのはこのような場面です。

検出結果の編集の内容

ノートアサインメントモードで作業する場合、どんな変更も、ノート自体に可聴の影響を与えることはありません。ここで行う操作は、表示されているノートと実際に演奏されたり歌われた音を一致させるための処理です。つまり、表示と音を一致させる処理です。このプロセスでは、元のレコーディングが表示された状態で作業し、これがのちにMelodyneで行う変更の基盤となります。基盤がしっかりしていれば、編集後のサウンドのクオリティもよくなります。

検出の確認と編集は合理的かつ必要なプロセスですが、オーディオ素材の解釈は、一見面倒なものに思えるかもしれません。しかし、この作業は膨大な利点をもたらします。なぜなら、オーディオ素材の解釈は複数存在することもしばしばで、音響的および音楽的コンテキストにおいてどの解釈が正しいのかを決める必要があるためです。

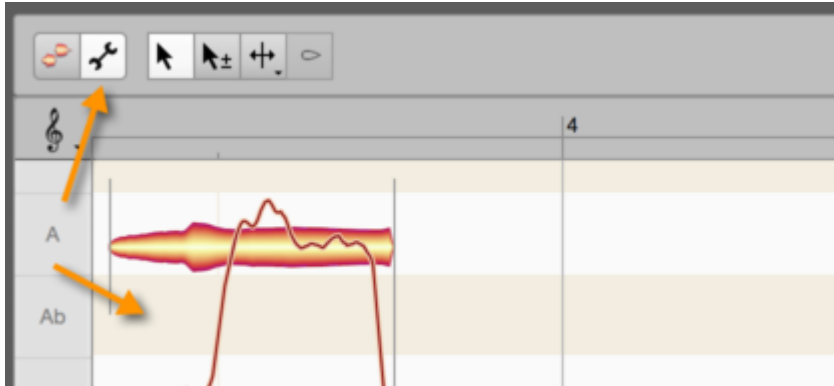
しかし心配はありません。Melodyneの検出プロセスは、主として自動で、最終結果と一貫するものです。このモードでの編集の必要度合いは、使用するアルゴリズムと対象となるオーディオ素材により異なります。ボーカリスト1名の未処理レコーディングを使用する場合、問題が生じることは非常にまれです。場合によっては、音が異なるオクターブで検出されることもあります。このような場合、後でトランスポートするとサウンドが不自然になります。このような場合の検出の修正は、簡単に行えます。これはパーカッシブな素材でも同様で、ほとんどの場合、必要なのはノート分割の追加や削除だけです。

編集を最も必要とするのは、ポリフォニックな素材の検出の場合です。この場合、他のアルゴリズムに比べてより複雑でさまざまな解釈が可能ですが、とはいえ、必要な編集の度合いは、主にオーディオ素材の特性に依存します。たとえば、クリアな上音構成を持つシロフォンの音は、ディストーションのかかったギタートラックの音に比べて検出がより簡単です。これは、後者の場合一連の上音がより複雑であり、これらの音を正しい音符に割り当てるのがより難しいためです。このような信号では、たとえば特に目立つ上音が、基音に属する要素としてではなく別個の音として解釈されることがあります。この間違いを修正せず、後ほど手動で基音はそのままで上音のピッチだけをずらすと、2つの要素が調和しなくなり、不自然なサウンドになります。

この例を見れば明らかです。多くの場合、Melodyneは実際に演奏された音を知ることができないため、検出結果の正誤を判断することができません。そのため、ノートアサインメントモードで表示されているノートが実際に演奏された音と一致しているかどうかを確認します。その利点は、編集を始めたときに分かります。こうしておけば、ノートエディターには正確なノートしか表示されず、最良のサウンドが得られます。

編集対象と場所

アルゴリズムの選択と同様、ノートアサインメントモードは、i)特定のオーディオファイル、ii)特定のレコーディング、iii)特定の転送されたセグメント(これらすべてを「オーディオソース」と呼びます)のいずれかのすべてのノートに同じように適用されます。ノートエディターに複数の異なるオーディオソースからのノートが含まれている場合、編集したい検出のソースに属するノートを選択することから始めます。

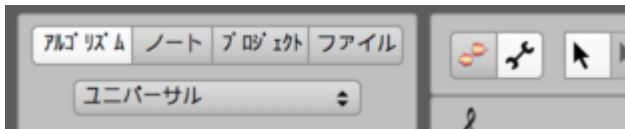


まず、ノートエディターのツールボックス横のスパナの形をしたアイコンをクリックし、ノートアサインメントモードを有効にします。ノートエディターの背景色が変化し、通常の編集モードからノートアサインメントモードに切り替わっていることが示されます。ノートアサインメントモードで見聞きするのは、常にオーディオソースのオリジナルの状態です。それ以前に行った編集はすべて一時的に無視されます。

blobアイコン(スパナの左)をクリックすると、ノートアサインメントモードが終了し、編集モードに戻ります。ノートアサインメントモードに切り替える前に行った編集結果を再び聞くことができますようになります。しかし、この動作はノートアサインモードでアルゴリズムを変更しなかった場合に限り行われますのでご注意ください。アルゴリズムを変更すると、新たに分析が実行され、新規分析が行われる(検出プロセスがリピートされる)と、それまでにノートに実行された編集は失われます。

アルゴリズムインスペクター

ノートアサインメントモードが有効な場合、アルゴリズムインスペクターが情報パネルに表示されます。

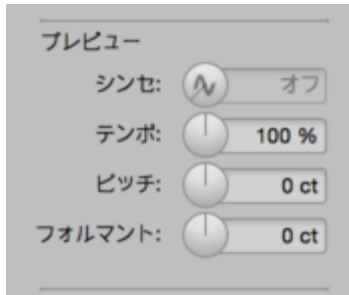


アルゴリズム: 一番上のポップアップボタンに現在のアルゴリズムが表示されます。メニューが表示された状態であれば、リストから別のアルゴリズムを選択できます。選択すると、新規分析が実行されます。警告:アルゴリズムを切り替えると、それ以前にオーディオソースになされた編集はすべて失われます。そのため、最適なアルゴリズムが選択されているかを確認すること、また最適なアルゴリズムが選択されていない場合、分析の修正やノートの編集を行う前に適切なアルゴリズムを選択することを習慣にしてください。

アドバイス: Melodyneをスタンドアロンで使用する場合、アルゴリズムを切り替える前にオーディオソースのアサインメントファイルを保存して(下記参照)、新規アルゴリズムが不満な場合、このファイルを再ロードできま

す。この場合、以前のアルゴリズム、および検出に加えた編集すべて(ただし、その検出に関するもののみ)が復元されます。編集モードでノートに行った通常編集は、この場合にもすべて失われます。これらは、アルゴリズムを切り替えるとき避けることのできない結果です。

プレビューセクションには、検出の編集とアルゴリズムパラメーターの微調整をアシストする以下のような重要なオプションがあります。



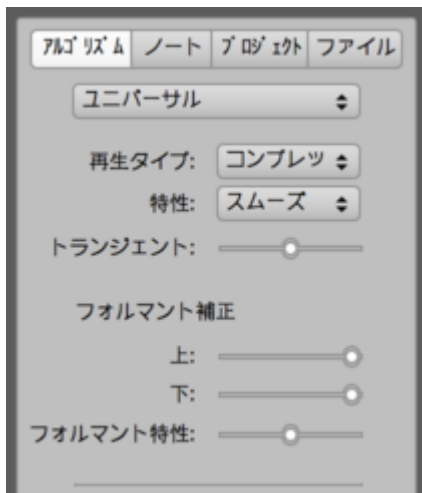
シンセ: ノートアサインメントモードでの目的は、表示されているノートが実際に演奏されたノートと一致しているかどうかを確認することです。しかし、ノートアサインメントモードでは編集しようとしているオーディオファイルのオリジナルのサウンドが聞こえ、blobの編集には可聴の影響はないため、検出結果の確認は視覚に頼るしかありません。モニタリングシンセが活躍するのはこのような場合です。シンセトーンジェネレーターを使用して、モニタリングシンセはblobを表示されているとおりに再生します。これにより、目と耳で確認できるようになります。シンセのオンとオフは、「Z」アイコンをクリックして切り替えられます。ボリュームをコントロールするには、上下にドラッグします。

モニタリングシンセは、アルゴリズムに[パーカッシブ]または[ユニバーサル]が選択されている場合には使用できません。

テンポ、ピッチ、フォルマント: これら3つのプレビューコントロールでは、これらのパラメーターに加えられた変更をシミュレートし、現在のアルゴリズム設定への効果を確認できます。たとえば、アルゴリズムインスペクターでフォルマント特性を変更したとします。この変更は、通常の編集モードでフォルマントをずらさない限り効果を持ちません。なぜなら、ノートアサインメントモードでは、オーディオファイルをオリジナルの状態で聞いているだけだからです。そのため、このような場合、ノートアサインメントモードを終了し、通常の編集モードでフォルマントをずらしてから、必要に応じて再びノートアサインメントモードに戻り、フォルマント特性を再び調整することになります。プレビューコントロールなら、この操作の必要がなくなります。ノートアサインメントモードを終了しなくても、フォルマントコントロールをオンにして、特性スライダーを操作してその効果を試すことができます。テンポとピッチの各コントロールもほぼ同様に動作します。これら3種のプレビューコントロールの値は一時的にのみ適用され、ノートアサインメントモードを終了するたびにリセットされます。

注: シンセが使用されている場合、ピッチとフォルマントのコントロールは同時使用できないため灰色表示となります。

アルゴリズムインスペクターの他のパラメーターはアルゴリズムの動作に関連しており、オーディオソース全体に対して微調整できます。



再生タイプ: * Melodyneはオーディオの再生に2つの異なる処理を適用します。[メロディック]アルゴリズムは再生タイプ[トータル]を、他のアルゴリズムは[コンプレックス]をそれぞれ標準で使用します。一般的にはこれらの選択肢が最も優れた結果をもたらしますが、希望に応じて変更することもできます。

違いは、タイムストレッチを実行する際(とノートを上に移す際)に最も顕著に表れます。ピッチがはっきりしている素材では、[トータル]オプションを選択する方が一般的には良好な結果が得られます。ノートのピッチがはっきりしておらず、ノイズ成分が多い素材の場合、[コンプレックス]オプションを選択する方が一般的には良好な結果が得られます。素材が上記2種類に当てはまらない場合、2種類の再生タイプ両方を試するのが一番です。テンポとピッチのプレビューコントロールを使用して、どちらの再生タイプがニーズに合っているかを確認します。[トータル]が選択されている場合、下で説明している[特性]、[トランジェント]、[フォルマント特性]パラメーターは使用できず、灰色表示にあります。

アドバイス:再生タイプ[トータル]には、バリエーションとして[トータル (高)]もあります。ソプラノや非常にピッチの高いメロディ楽器(ピッコロなど)を扱う場合、[トータル]の代わりに[トータル (高)]を選択すると、音質を向上させることができます。ただし、通常の音域の声や楽器には[トータル (高)]は向かないため、このような場合には選択しないことをおすすめします。

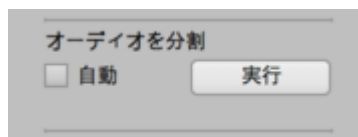
特性: このポップアップボタンでは、よりスムーズまたはよりクリスプな再生の間で選択できます。[クリスプ]を選択した場合、より小さなプロセッシング単位が使用され、信号内のすばやい音の動きをよりクリアに再現できます。この設定は、パーカッシブなサウンドや、すばやい音の変化が含まれる素材により適しています。ソフトでサステインするサウンドの場合、この設定だと落ち着いたサウンドになることがあります。これを防ぐには、[スムーズ]を選択します。より大きなプロセッシング単位が選択され、スムーズでゆっくりとした音の動きの再現に適しています。

トランジェント: このパラメーターは、[ユニバーサル]および[パーカッシブ]アルゴリズムの場合にのみ使用できます。再生中の信号のトランジェントの扱いを指定します。スライダーを右端([パーカッシブ]アルゴリズムの場合のデフォルト位置)に移動すると、トランジェントはよりクリアかつ正確になります。スライダーを左に動かすにつれて、トランジェントはソフトになります。デフォルトでは、[ユニバーサル]アルゴリズムが選択されており、スライダーは中央に置かれています。いろんな設定を試し、素材に合わせて最適な設定を見つけましょう。

フォルマント補正上/下: Melodyneでノートをトランスポートすると、フォルマントが自動修正され、たとえばボーカルの場合に生じがちな「ミッキーマウス効果」を防ぐことができます。ノートを1全音分上にトランスポートすると、Melodyneはフォルマントを修正し、オリジナルの音色を維持します。人間の声の場合、一般的にこれが望まれる結果ですが、アコースティックギターの場合、状況は異なるかもしれません。フォルマントが基音と並行してトランスポートされる方が、つまり、自動補正されない方が、魅力が加わることもあります。

そのような理由から、フォルマント上/下スライダーは、上向き/下向きのトランスポートに対して個別に自動フォルマント補正の度合いを設定できるよう用意されています。スライダーを完全右にすると、100%のフォルマント補正が適用されます。完全左にすると、自動フォルマント補正はまったく適用されません。通常の編集モードに戻ると、ノートエディターで1つまたは複数のノートのフォルマントをシフトするまたはシフトしていた場合にのみこれらのパラメーターの効果が聞こえます。この効果をノートアサインモードでシミュレートおよび検証するには、アルゴリズムインスペクターのプレビューセクションにあるピッチコントローラーを使用します。これに対する現在の値が正の場合、[上]スライダーの効果をプレビューできます。現在の値が負の場合、[下]スライダーの効果が聞こえます。

フォルマント特性: フォルマントがシフトしている場合、このスライダーは周波数範囲内の重み付けを変化させ、シフトしているフォルマントのサウンドを変化させます。さまざまな設定を試し、どの設定が素材に最も適しているかを確認します。このパラメーターには、ノートエディターでノートをトランスポートしたのでない限り、通常の編集モードに戻っても可聴の効果はありません。この効果をノートアサインモードでシミュレートおよび検証するには、アルゴリズムインスペクターのプレビューセクションにあるフォルマントコントローラーを使用します。



オーディオを分割: オーディオソースの検出結果を編集する際、Melodyneはその処理をバックグラウンドで実行し、かなりのボリュームのデータをキャッシュからやりとりします。[オーディオを分割]オプションでは、この動作をコントロールできます。[自動]ボックスにチェックマークを入れると、変更を行うたびに、Melodyneで必要な計算すべてがすぐさま実行されます。これには、次のようなメリットがあります。プレビューコントロールを使用してアルゴリズム設定をテストするとき、Melodyneは最新のデータにアクセスし、すべては通常の編集モードの場合と同じように聞こえます。しかし、次のようなデメリットもあります。Melodyneにより処理が中断され、進捗インジケーターが表示され、作業が一時的に中断されます。

プレビューコントロールは常に必要なわけではないので、[自動]チェックボックスのチェックをオフにして、このオプションでこの動作を変更できます。これ以降、さまざまな計算が実行されなくなり、[実行]ボタンをクリックしたときまたはノートアサインメントモードを終了したときのみ実行されます。このメリットは、ワークフローが中断されないことです。デメリットは、この場合、行った変更がプレビューコントロールに反映されないことがあることです。前回のデータと現在の状態の間に相違がある場合、[実行]ボタンが点滅して警告します。ボタンをクリックすると、Melodyneが未処理の計算すべてを実行し、データの総計を更新します。

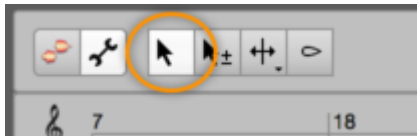
アサインメントファイル復元/保存(スタンドアロンのみ): Melodyneでは、必要に応じて、ソースに対してどのアルゴリズムが使用されたか、アルゴリズムパラメーターの状態、どのような編集が検出結果に適用されたかなどの情報を含むアサインメントファイルとしてオーディオソースを保存できます。こうすれば、Melodyneでこのファイルを開くたびに検出プロセスを繰り返す必要がありません。また、検出の編集とアルゴリズムパラメーターの設定を1度行えば、ファイルを開くたびに適用したすべての修正内容が自動的に復元されます。[保存]ボタンでは、このようなアサインメントファイルを編集したオーディオファイルと一緒に保存できます。[ロード]ボタンでは、ファイルを再び開き、たとえばアルゴリズムを誤って変更してしまった後に元の状態に戻すことができます。

ノートアサインメントモードのメインツール

ノートアサインメントモードでは、ツールボックスには通常の編集モードで使用する機能以外のツールがあります。最も重要な違いは次のとおりです。ノートアサインメントモードでは、ツールはノートのサウンドに直接または即時の影響は与えず、むしろ、検出され表示されたノートを実際の音楽にできるだけ合致するよう動きます。これにより、素材をその後より効率良く編集でき、最適な結果を得られるようにします。

使用できるツールは、アルゴリズムにより異なります。

ノートアサインメントモードのメインツールには他のツールの重要な機能が組み合わせられており、通常の編集モードの場合同様、ツールを変更することなくさまざまな一般的なタスクを実行できます。

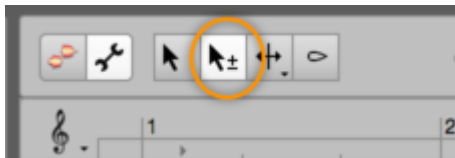


- blob 下側では、メインツールは_アクティベーション_ツールとして機能します。
- blob 上側では、メインツールは_ノート分割_ツールとして機能します。

それぞれ順に説明します。

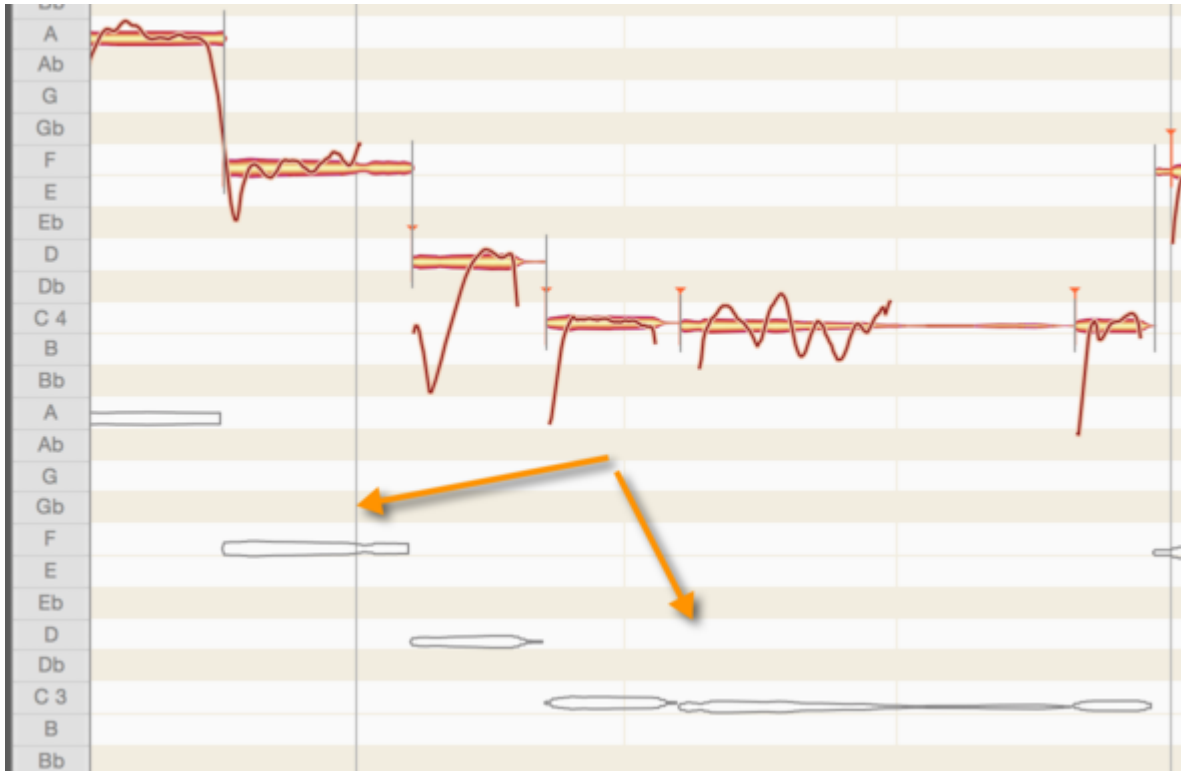
アクティベーションツール

アルゴリズムに[パーカッシブ]または[ユニバーサル]が選択されている場合、アクティベーションツールに機能はありません。



アクティベーションツールでノートをクリックすると、編集エリア背景にその上音が表示されます。これにより、表示されているノートのオクターブと他の倍音の比を一目で確認できます。

メロディックアルゴリズム: blobをダブルクリックすると、該当するノートが最も妥当と思われるピッチに移動されます。特に妥当と思われる別のピッチは空のblob(潜在的な音)で示され、オリジナルのblobのオクターブ上または下に来ることが多いです。これらの潜在的な音を直接ダブルクリックして、オリジナルのblobを有効化または無効化することもできます。ダブルクリックしたblobに対する妥当と思われる別のピッチが見つからない場合、その場に留まります。



このツールでblobを垂直にドラッグしてもほぼ同様の効果が得られます。別のピッチを探してさらに上または下が検索されます。妥当と思われるピッチが指示された方向に見つかった場合、blobがそれにスナップします。それ以外の場合、元の位置に戻ります。このダブルクリックまたはドラッグを使用することで、検出のオクターブエラーを修正できます。**ポリフォニックサステインとポリフォニックディケイのアルゴリズム:** ポリフォニックアルゴリズムの場合、潜在的な音は特に重要な役割を果たします。たとえば、ある音に突出した上音があると、別の音として扱われ、独自のblobが割り当てられることがあります。極端な例では、空洞でないblobが該当の上音_だけ_に適用され、基音自体には適用されない場合があります。基音が潜在的なノートの状態になっているため、空洞のblobで示されています。

空洞でないblobをアクティベーションツールでダブルクリックすると、対応するノートが無効になります。

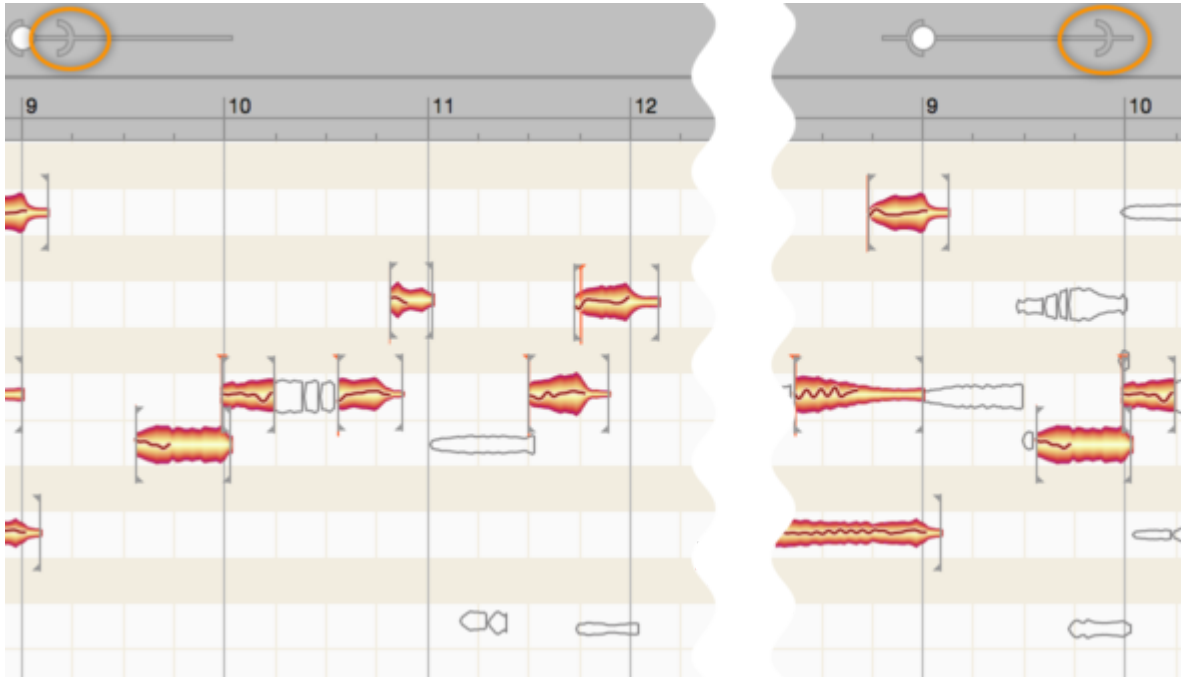
Melodyneがこのノートの属性と考えるスペクトルのエネルギーは、その後、同時に鳴る他のノートに自動的に再分配されます。基音の状態を誤って仮定された上音は、無効になると、その基音に再び割り当てられます。潜在的なノートをダブルクリックすると、そのノートが有効化されます。この場合、スペクトルエネルギーは同時に鳴る他のノートから「差し押さえ」られ、新しく有効化されたノートに与えられます。

blobを上下にドラッグすると、メロディックアルゴリズムの場合と同様の効果が得られます。Melodyneは対応する方向で検索し、基音がそこに存在し得るかどうかを確認します。基音のものとして妥当と考えられるピッチが

見つかった場合、潜在的なノートがすでにそこに検出されている可能性は濃厚です。その場合、このノートが有効化され、以前のノートは無効化されます。

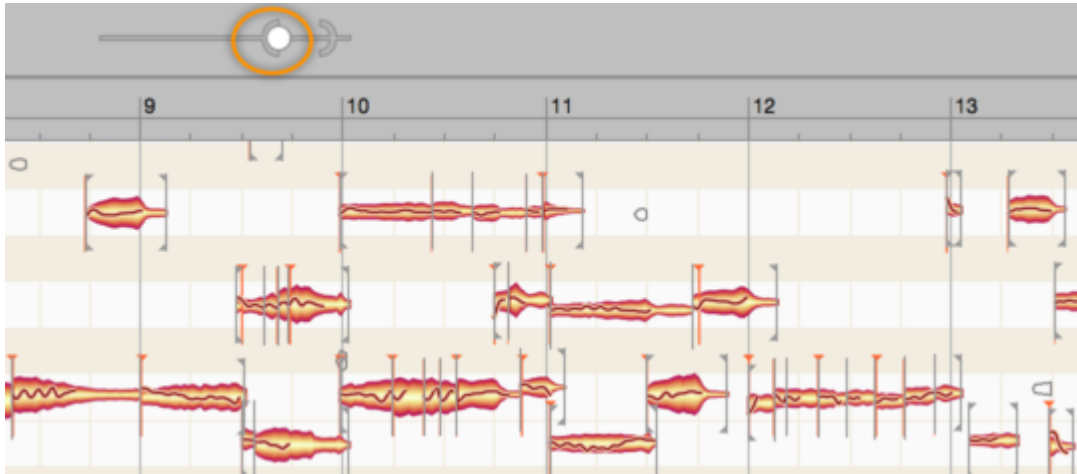
スライダーと「エネルギーイメージ」

ポリフォニックなオーディオ素材の検出結果を編集、メインまたはアクティベーションツールを選択している場合、ツールボックスの隣にスライダーが表示されます。このスライダーでは、潜在的なノートの表示数と、潜在的なノートから生じる実際のノートの数を設定できます。



スライダーの右側のインジケーター(丸括弧)を左へ動かすと、表示される潜在的なノートの数が減ります。右へドラッグすると、表示される潜在的な音の数が増えます。編集を行いたいノートがすべて表示され、有効なノートに切り替わるように設定を調整します。こうすることで、素材の概要がよりつかみやすくなります。

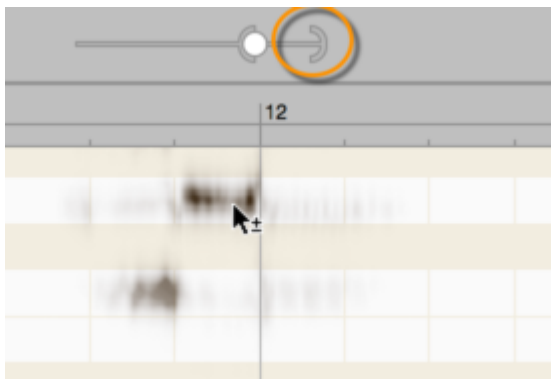
次に、左側のインジケーター(球)を一方から他方へドラッグします。左へドラッグすると、表示されている潜在的なノートが有効なノートへと変化する確率が下がり、結果として有効なノートの数が減ります。右へドラッグすると、確率が上がり、結果として有効なノートの数が増えます。



潜在的なノートの数以上に有効なノートを増やすことはできませんので、球を丸括弧を越えて右へと動かすことはできません。球と丸括弧がくっついた状態で右へと動かすと、表示される潜在的なノートと有効なノートへと変化する潜在的なノートの両方が同時に増えます。有効なノートの数と実際に演奏されたノートの数とが一致するよう、2つのインジケーターを調整します。その後、ノートを手動で個別に修正していきます。

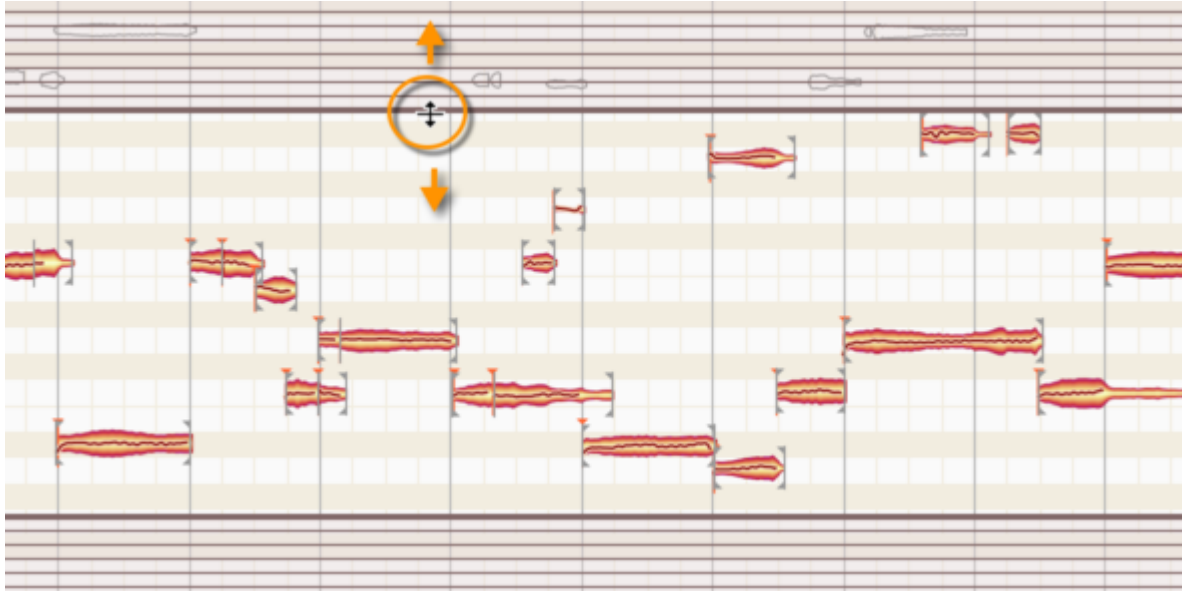
アドバイス:インジケーターを遠くに動かすと、Melodyneが行うべき処理量が増え、結果を表示するのに時間がかかります。[表示]メニューの[ノートエディターオプション]サブメニューで[オーディオ信号を今すぐ更新]オプションにチェックマークを入れると、この遅延を低減できますが、その分CPU負荷は一時的に増加します。

場合によっては、素材では聞こえているのに、その音が有効なノートとして検出されておらず、丸括弧を右端まで動かしても、その音が潜在的なノートとしても表示されないことがあります。このような場合、丸括弧を右端まで動かし(最大値に設定し)てから、足りないノートがあると思われるノートエディター上の位置へマウスポインタを置きます。すると、有効なノートとしても潜在的なノートとしても検出されなかった音が、マウスポインタのまわりに黒い影のような「エネルギーイメージ」として表示されます。この方法で足りない音を見つけたら、ダブルクリックして有効なノートへと変化させます。その後、さらにダブルクリックして、「潜在的な」ノートと「有効な」ノートとの間で状態を切り替えることができます。



ブラインド

特に、倍音を多く生成する楽器では、実際に再生した音よりもずっと高い(またはずっと低い)音が広帯域にわたって検出されることがあります。このような場合、「ブラインド」を使うと便利です。ブラインドは編集エリアの一番上と一番下に表示されます。表示されていない場合は、編集エリアを上下にスクロールすると表示されます。



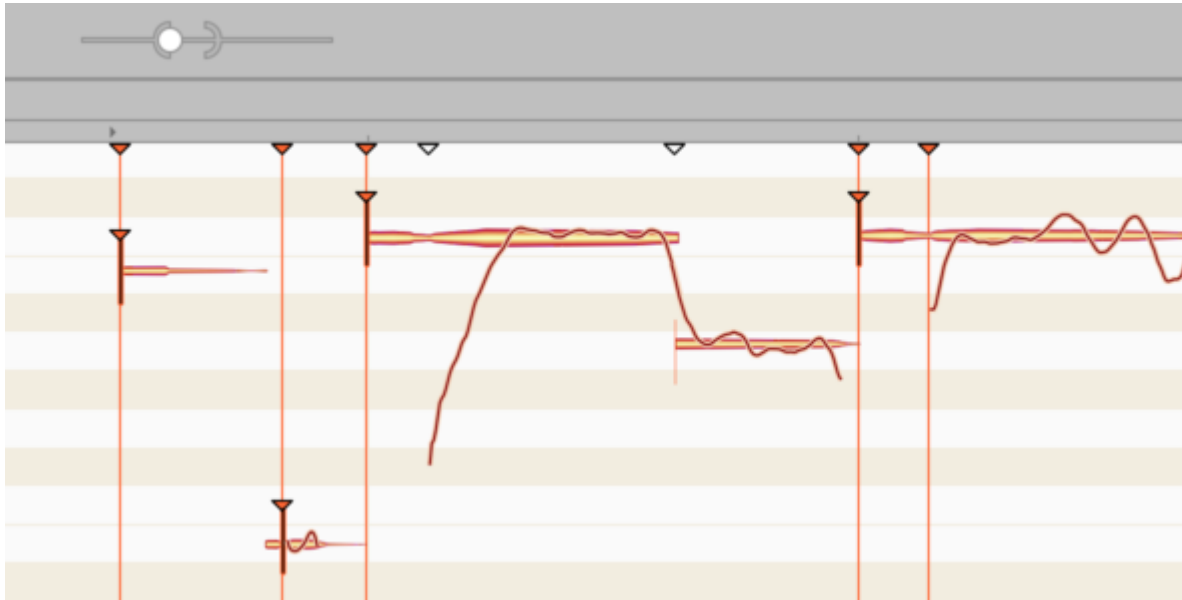
上側のブラインドは、下端をドラッグして上げ下げします。下側のブラインドは、上端をドラッグして上げ下げします。こうして、Melodyneがノートを配置する範囲を定めることができます。ブラインドの下に隠れているノートは、事前に手動で有効化しない限り、すべて自動的に無効化されます。しかし、ブラインドの下に隠れているノートも、「ブラインド越しに」オンとオフを切り替えることができます。ブラインドを範囲の目安として使用し、その後ノートの有効と無効を手動で切り替えて修正するとよいでしょう。

スタート位置ラインと指定のスタート位置

ノートアサインメントモードでいずれかの分割ツールを選択すると、ノートエディターに垂直の線が表示されます。同時に、2つのインジケーターの付いたスライダーがツールボックス横に表示されます。

この垂直の線を「スタート位置ライン」と呼びます。それぞれのblobからタイムルーラーへと並行に伸びるこの線は、Melodyneにより識別されたオーディオファイル内の音楽上のスタート位置を示しています。「指定のスタート位置」は、一番上に反転した三角形が付いた短い垂直の線で示され、常にblobの先頭付近(だが必ずしも左端ではない)に表示されます。有効な場合、ノートの有効な音楽上のスタート位置であるとMelodyneが判断したものを示しています。音楽上のスタート位置は、ノート先頭の分離記号に一致する可能性があります。必ずしも一致する必要はありません。たとえば金管楽器では、各音は、息を吹き込んだ時の雑音の後に聞こえてきます。この雑音も音の一部であるため、ノート分割の右に表示されます。しかし、タイミングの観点から見れば(クオンタイズでも同様)、本来の音が発せられ、希望の音高に達した瞬間こそが重要になります。Melodyneが音の音楽上のスタート位置を正確に示すことができない場合、スタート位置の線は表示され

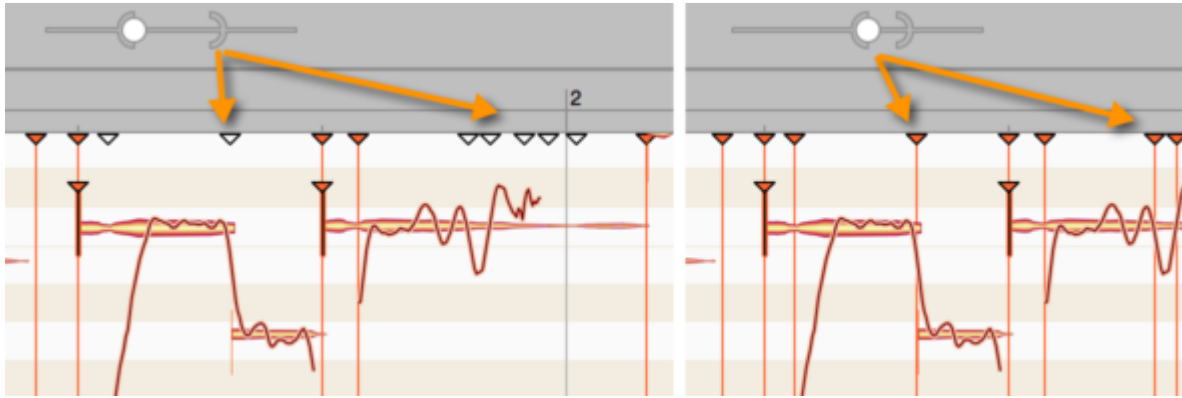
ず、ノートには指定のスタート位置はありません。その場合、クオンタイズ目的で、ノートの左端がスタート位置として扱われます。



長いスタート位置の各線の端にも反転した三角形のインジケーターが現れ、タイムルーラーのすぐ下に表示されます。このインジケーターが空洞でない場合、対応するスタート位置ラインが表示されており、アクティブ状態になっています。空洞の場合、ラインは非表示で、これを「潜在的な」または「アクティブでない」スタート位置ラインと呼びます。アクティブでないスタート位置ラインは、常にノートの先頭と一致します。ただし、該当のノートに対して、Melodyneが音楽上意味のあるスタート位置を確実に識別できていない状態です。スタート位置ラインが潜在的なものでしかなく、垂直線(指定のスタート位置インジケーター)がblobに表示されていないのはそのためです。

丸括弧と球の2つのスライダーインジケーターはそれぞれ、潜在的なスタート位置に対するMelodyneの識別感度と、Melodyneがスタート位置をアクティブ状態に指定する見込みの度合いを設定します。設定は、結果として表示される三角形の総数と、赤で埋められた三角形のパーセンテージに反映されます。丸括弧をゆっくり右に動かすと、タイムルーラー下に表示される空洞の三角形(「潜在的な」スタート位置を示す)の数が増えていきます。これは、素材内のスタート位置の存在の「可能性」を推測するMelodyneの感度が上がっていることを反映しています。「可能性」なのは、追加されるラインは非表示のままであり、今のところblobに影響を与えていないためです。

ただし、これはスライダーの2つ目のインジケーターである球を使用して変更できます。球を右に動かすと、それまで非表示だった「潜在的な」スタート位置ラインがアクティブになり、すぐ下のblobにスタート位置が表示されます。



タイムルーラー下の空洞の三角形のインジケーターをダブルクリックすると、潜在的なスタート位置ラインをアクティブに変更できます。また逆に、該当する空洞でない三角形をダブルクリックすると、アクティブなラインを無効にできます。ルーラー内の空の場所をダブルクリックすると、新しいスタート位置ラインが生成されます。

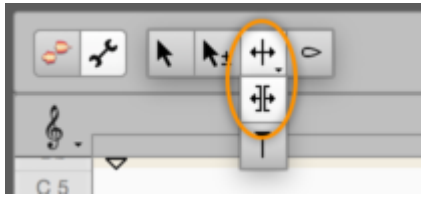
このインジケーターをドラッグして、スタート位置ラインを時間軸上で前後に移動できますが、Melodyneではほとんどの場合最適な位置が認識されるため、この操作が必要になることはほとんどありません。ただし、微調整が必要になる場合があります。試しにスタート位置ラインを左から右へ動かすとき、blobの先頭を超えると、(指定のスタート位置の存在を示す)逆三角形の付いた垂直線が表示されます。三角形はしばらくの間ラインを追いつき、ノートの減衰が始まると、音楽上のスタート位置の表示が意味をなさなくなるため消えます。



スタート位置ラインには「磁石」のような特性があり、この特性はラインを動かすときだけでなく、ノートを分割するときやスタート位置を手動で指定するときにもみられます。

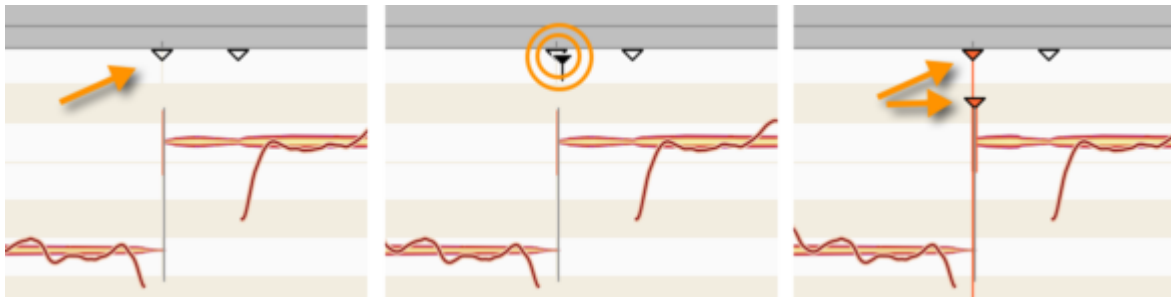
ノート分割ツールと分割タイプツール

ノート分割ツールと分割タイプツール(ツールバー内のすぐ下)は、すべてのアルゴリズムで使用でき、編集モードの場合と同じように機能します。ノート分割はダブルクリックして設定または削除することができ、時間軸に沿って動かすこともできます。分割タイプツールでは、ハード分割とソフト分割の間で切り替えることができます。



ただし、通常の編集モードと異なり、ノートアサインメントモードでは、分割ツールは音楽の再成形ではなく分析（検出）の編集に使用されます。ここでの目的は、blobが実際の音をできるだけ正確に反映するようにすることです。また、ノートアサインメントモードで和音に実行した編集は、スタート位置ラインの磁石のような吸着特性により、サンプル精度で適用されます。通常の編集モードではこれは不可能です。アドバイス:ソフトな分割でピッチが異なる2つ以上のノートを得るには、コンテキストメニューで[選択範囲を連続シーケンスに変換]を選択します(下参照)。

ノート分割の配置とスタート位置の編集は連動しており、ノート分割ツールでスタート位置を編集することもできます。タイムルーラー近くの三角形のスタート位置マーカーのそばにポインターを動かすと、形が変化してスタート位置ツールに似た形状になります。



指定のスタート位置はいつでも無効に(指定を解除)できます。新しいスタート位置は、有効なスタート位置ラインがblobの妥当と思われる前方(blobの左端)にある場合にのみ指定できます。タイムルーラー下のスタート位置インジケーターを見てみましょう。関連する位置に、空洞の三角形(潜在的なスタート位置の存在を示す)が表示されています。この三角形をダブルクリックすると、このスタート位置ラインが有効になります。

潜在的なスタート位置ラインが予期される位置に検出されていない場合、ツールボックスそばのスライダーを使用して、潜在的なスタート位置ラインを表示させることができます。これを行うには、右側のコントロール要素(丸括弧)を右方向に動かします。

別の方法として、スタート位置マーカーのルーラーの空のエリアをダブルクリックして新規のスタート位置ラインを作成し、マウスで任意の位置にドラッグすることもできます。ポリフォニックな素材の場合、対応する位置に和音があると、この操作は和音を構成するすべての音に影響します。[メロディック]、[パーカッシブ]、[ユニバーサル]のいずれかのアルゴリズムが選択されている場合、スタート位置ラインを有効にするか、新しいスタート位置ラインを作成すると、問題となる位置の近くにノート分割が自動挿入されます。

アドバイス: スタート位置ラインを編集する際、ノートのスタート位置はどこかにあるような気がするのに潜在的なスタート位置ラインとしても表示されていない場合、関連するエリアをスクラブすることで正確な位置を見つけることができます。その位置では、かなりのノイズ成分が聞こえます。このノイズが最も大音量になるところで、マウスボタンから指を離して、ダブルクリックしてスタート位置ラインを配置します。

コンテキストメニュー: いずれかの分割ツールを選択すると、ノートエディターにコンテキストメニューが表示され、次のコマンドが表示されます。

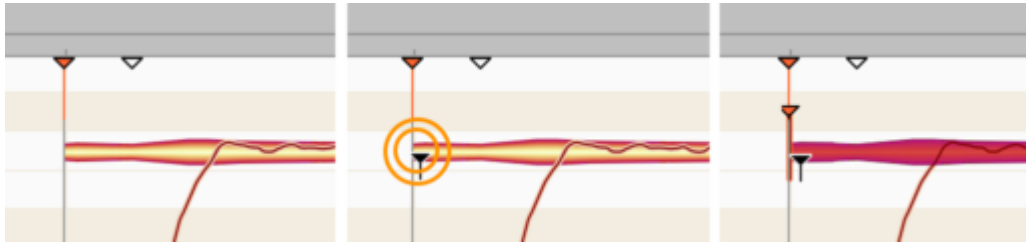
- **選択範囲を連続シーケンスに変換:** このコマンドでは、ハードな分割の間にある2つ以上の連続するノートから構成される選択範囲を、ソフトな分割の連続するシーケンスに変換できます。この操作はピッチの異なるノートでも可能で、メロディラインを集めてよりまとまりのある分かりやすい編集が行えます。
- **ノートの分割:** このコマンドは、Melodyneで指定されている位置でノートを自動分割します。ツールを使用して編集する前に歯擦音や息継ぎのノイズを分離するためにボーカルのパッセージで正確なカットを行う必要がある場合に便利です。
- **スタート位置ラインでノートを再分割:** このコマンドは、選択されているノートを、アクティブなスタート位置ラインの位置で分割します。同時に複数のノート内の同じ位置に分割を挿入し、他の場所に見つかった不要な分割を削除できます。
- **選択されているグリッドを基に分割をリセット:** このコマンドは、スタート位置と、選択されているタイムグリッド上の適切な位置でノートを分割します。このコマンドは、[メロディック]、[パーカッシブ]、[ユニバーサル]アルゴリズムで使用できます。

スタート位置ツール

スタート位置ツールは、ノート分割ツールのサブツールです。



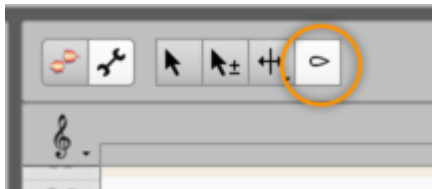
すべてのアルゴリズムで使用でき、ダブルクリックしてスタート位置を手動で指定または指定解除できます。このツール機能は、ノートインスペクターのオプションをチェックすることで、ノートアサインメントモードでも使用できます。指定されたスタート位置は、赤い三角形が一番上についた短い垂直線で示され、blobの最左端またはそこに近い場所に表示されます。



タイムルーラー下のスタート位置マーカのリージョン内でスタート位置ツールを動かすことで、スタート位置ツールでこれらを編集できます。ただし、一般的にはこの目的には上記のノート分割ツールを使用します。

エネルギー分配ツール

このツールは、ポリフォニックサステインとポリフォニックディケイのアルゴリズムでのみ使用できます。同時に鳴っている複数の音の間での特定のサウンド要素の分配を調整します。

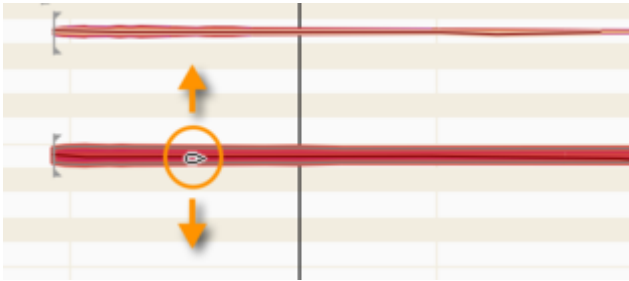


和音や特定の音程(オクターブなど)の場合、2つ以上の基音が同一の上音を共有していることがあるため、Melodyneは、該当するノート間でこれを共有せざるを得ません。そのため、結果の分配が好ましいものにならない場合がありますが、その場合次のような操作で影響を与えることができます。(他の基音のエネルギーを代償に)ある基音により多くのエネルギーを割り当てることで、その基音の倍音成分を補強し、より明るく突出したサウンドにすることができます。逆に、(他の基音に適用するために)ある基音からエネルギーの一部を奪うこともできます。この方法で、さまざまな音の音色を調整し、最適なバランスを実現することができます。

このツールは、その性質上、同時に鳴っている2つ以上の音がポリフォニックな素材内で検出されており、そのいずれかが編集されている場合にのみ効果を持ちます。また、分配可能なエネルギーは問題となる位置に存在しており、問題となるblobに対して使用できます。このツールで、ある程度まで希望の値を入力します。達成の方法と程度は、オーディオ素材により異なります。

極端なケースでは、このツールは何の効果ももたらしません。たとえば、同時に鳴る2つの音があり、高い方の音が低い方の音の上音内に表示されない場合(この例が該当するかどうかは、アクティベーションツールを使用して上音を表示させると分かります)、これら2つの音には共通のエネルギーがないため、分配ツールを使用して再配置することができません。このような場合、このツールは視覚的にも音的にも効果をもたらしません。

このツールを使用してblobをクリックして上にドラッグするとエネルギーの分配量が増え、下にドラッグすると分配量が減ります。



ノートインスペクター

通常の編集モードの場合同様、ノートアサインメントモードのノートインスペクターは選択されているノート进行调整しますが、表示されるパラメーターが異なります。



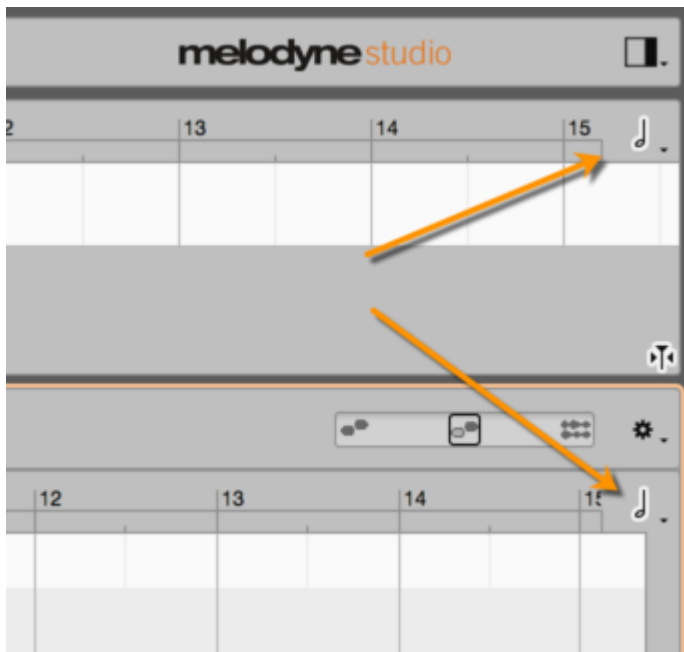
ピッチ: 3つのフィールドは編集モードのフィールドに対応しており、i)最も近い半音階音、ii)そこからの変差(セント単位)、iii)相当する周波数(ヘルツ単位)を表示します。これらのフィールドに値を入力することはできませんが、blobが別のピッチに割り当てられる(オクターブエラーを修正するなど)とフィールドの内容が更新されます。**エネルギー分配:** インспекターフィールドには、エネルギー分配ツールで行った変更が反映されるほか、値を直接入力することもできます。**ハードな分割:** このフィールドの状態は、分割タイプツールで行った変更またはボックスにチェックマークを入れるかチェックマークを消すことで決まります。このボックスは、選択されているノートと隣り合うノートの間にソフトな分割が存在している場合にのみチェックマークを入れることができます。

スタート位置: このフィールドの状態は、スタート位置ツールで行った変更またはボックスにチェックマークを入れるかチェックマークを消すことで決まります。対応するツール同様、選択されているノートをスタート位置ラインにくっつけたり離したりできます。

タイムグリッド

タイムグリッドは、時間軸を一定間隔で分割し、より分かりやすい一時表示を提供します。グリッドを使用すると、音が最も近いグリッド線にスナップするため、拍に合わせるのが簡単になります。グリッドの間隔(隣り合うグリッド線の間の隔たり)には、秒または音価(2分音符、4分音符など)を選択できます。

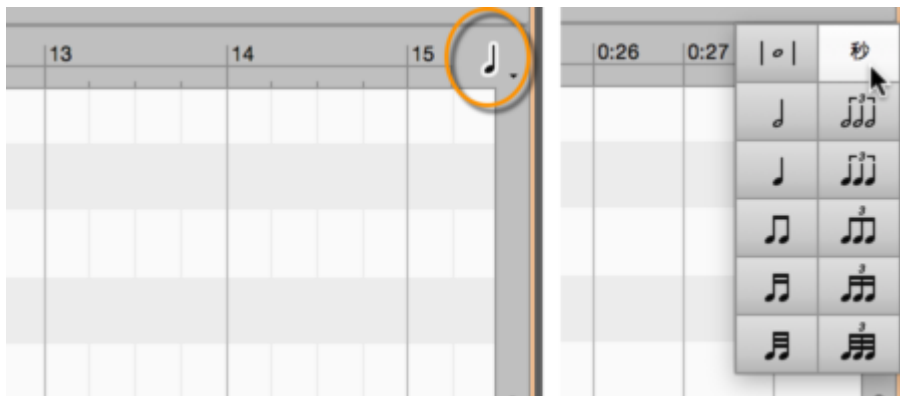
タイムグリッドを有効にする、設定する



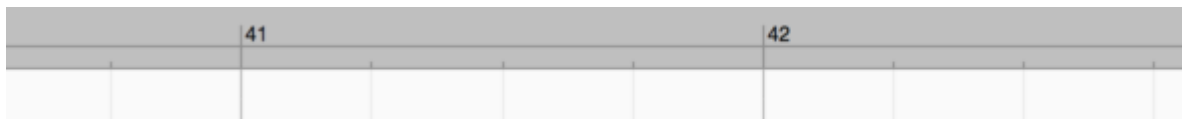
タイムグリッドを調整するには、メインメニューの[オプション] > [タイムグリッド設定]を選択するか、(ノートエディター右上の)音符アイコンをクリックしてここに表示されているポップアップメニューを開きます。

音符アイコンをクリックすると、グリッドの有効と無効が切り替わります。[環境設定]ダイアログの[ショートカット]ページからこのコマンドに対するキーボードショートカットを定義することもできます。音価またはその隣の小さな矢印のシンボルをクリックし、マウスボタンを押したままにすると、グリッドメニューが開きます。

このメニューでは、さまざまな音価単位または秒単位でグリッド線の間隔を設定できます。

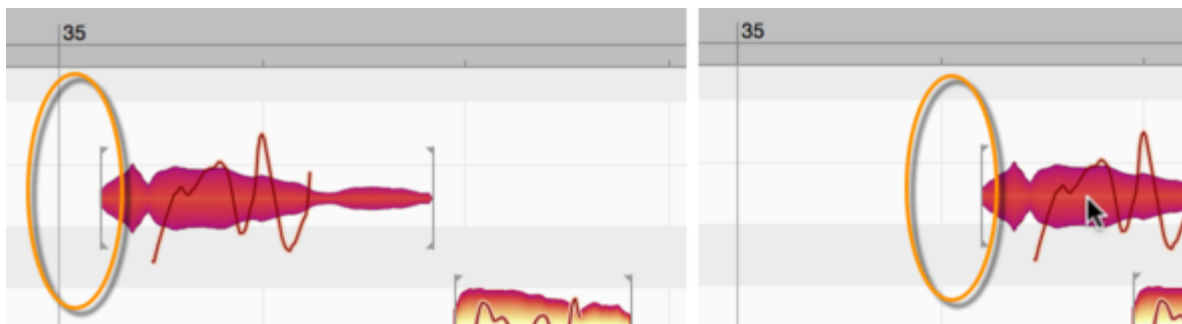


時間軸は選択されている音価と同じ間隔で分割されます。音価(1/16など)を選択している場合にディスプレイをズームアウトすると、ある程度でグリッド線が表示されなくなりますが、選択されているグリッド値は有効なままです。



グリッドが有効な場合にノートを移動する

[タイムグリッド]がオンであり[秒]が選択されていない場合、ある拍から別の拍へとノートを動かすと、前の位置での拍とノートのオフセットが維持されます。つまり、ノートの配置はグリッドに依存しますが、そのノートがもともグリッドライン上に正確に合わせられているのではない場合、移動先でもノートはグリッドライン上に合わせられません。たとえば下図のノートは、小節の第1拍から少し遅れたところで鳴っています。タイミングツールを選択すると、ノートの先頭部分にポジションアンカーが表示されます。



グリッドがオンの場合にこのノートを第2拍に移動すると、そこでも拍からのノートのオフセットが維持され、拍から少し遅れたところで鳴ります。

グリッドがオンの場合も、Altキーを押したまま操作すれば、グリッドを無視してノートを動かすことができます。

ピッチグリッドと音階

Melodyneでは、連続またはグリッドを使用して段階的にノートのピッチをずらすことができます。グリッドが有効の場合、ノートはグリッドにより可能なピッチにのみ移動することができます。このような場合、半音階または他の音階のいずれかに相当します。

ピッチルーラーの機能とピッチグリッドへのアクセス

Melodyneでは、さまざまな音階を選択したり、音階の編集や作成を可能にする広範な機能を使用することができます。「音階検出」機能を使用してある録音内の音階を検出し別の録音に適用することもできます。

これらの機能とオプションはすべて、ノートエディター左のピッチルーラーから選択できます。機能とオプションは、現在のタスクに必要なパラメーターのみ表示されるようになっています。引き出しのようなものを想像するといいいでしょう。少しだけ開くこともできるし、完全に開いて中身を確認することもできます。このツアーでは、音階の選択と使用についてを扱っていますので、説明するのは一部のみです。

ピッチグリッドに関連するオプションは、メインメニューの[オプション]のサブメニューから、またはピッチルーラーのト音記号アイコンをクリックして変更できます。



ピッチグリッドをオンにして表示オプションを選択する

ト音記号のアイコンを1回クリックするとピッチグリッドの有効と無効が切り替わり、スナップ機能のオンとオフが切り替わります。グリッドが無効の場合、ノートを自由に移動できます。半音階の各音の間の周波数にも配置できます。この場合、ピッチルーラーはノート間に細い線で表示され、ガイドラインとしてのみ機能します。

ト音記号のアイコンまたはその隣の小さな矢印のシンボルをクリックし、マウスボタンを押したまま下にドラッグすると、スナップ、背景、ルーラーオプションを表示するドロップダウンメニューが開きます。

スナップ

- スナップなし:グリッドは無効です。半音階の度に一致するかどうかに関係なく任意のピッチにノートを移動できます。
- 半音階スナップ:ルーターのラインがよりはっきりとした線で表示され、半音階の最も近い度にノートがスナップします。
- 音階スナップ:この場合、Melodyneによるオーディオ素材の分析結果に基づき、最も適切と思われる長音階または短音階が選択されます。主音がピッチルーター内で強調表示されます。もちろん、音階と主音は変更することができます。それについては後で説明します。まずはこのメニューの他のオプションを見ていきましょう。

背景

ここでは、ノートエディターの背景を選択できます。

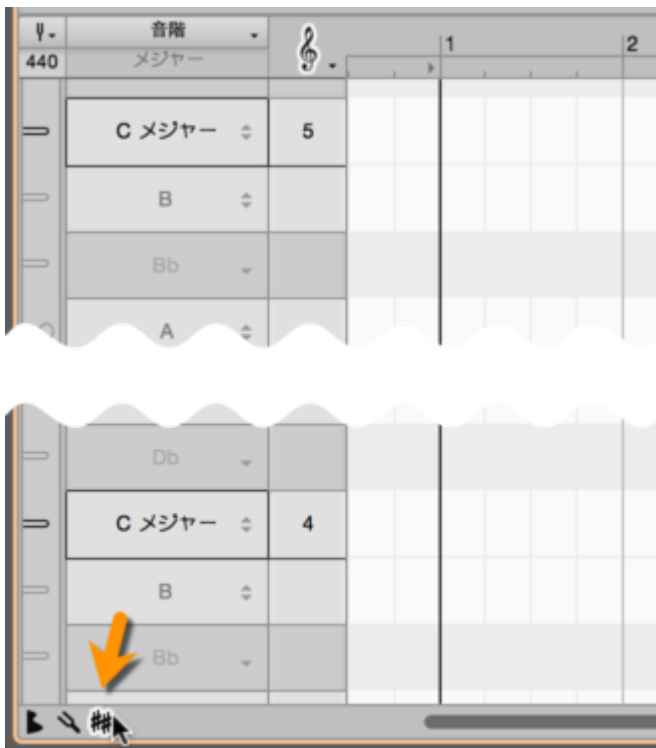
- 鍵盤: ノートエディターの黒い横線はピアノ鍵盤の黒鍵を、白い横線は白鍵を示しています。MIDIエディターをご使用の方ならおなじみのレイアウトです。
- 音階音: 明るい色の横線は音階に含まれるノートに、暗い色の横線は音階に含まれないノートに割り当てられます。[音階スナップ]が選択されている場合、ノートは一定の割合で明るい色の横線に割り当てられます。
- ピッチライン: 音階の度は、横線ではなく太線で示されます。細い線は音階に含まれないノートを示します。この線は音階の各度の正確なピッチを示しているため、ピッチが正しくない場合に便利に使用できます。

ルーター

ここでは、ピッチルーターにノート名または音階の度名のどちらを表示するかを選択できます。

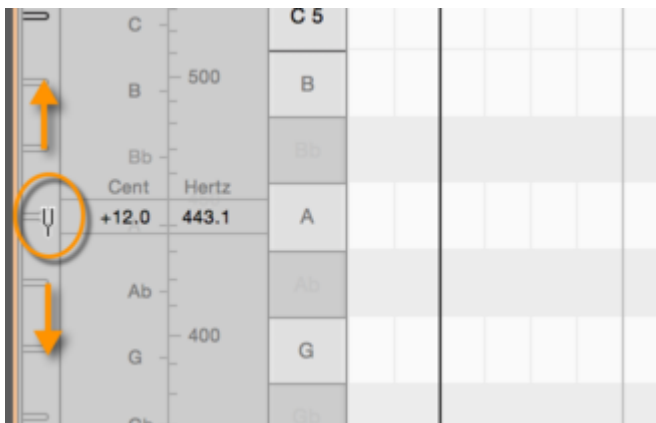
音階ルーターと基準音高ルーター

主音と音階を任意に選択するまたは他の設定を変更するには、ピッチルーターの下の一列目の矢印をクリックして、先に説明した「引き出し」をもう少し大きく開きます。左に、2つの新しい列が表示されます。

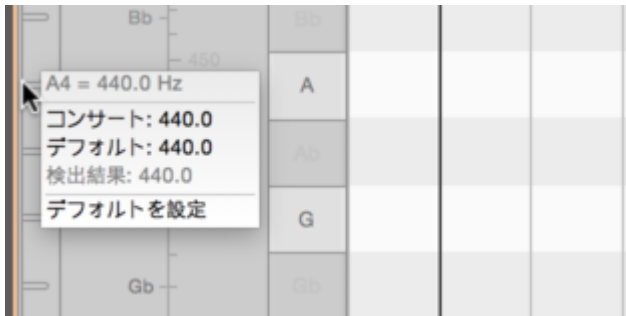


マスターチューニングを調整する

一番左の細い列は、基準音高ルーラーです。任意のノート(たとえばA4)のマークに向かってドラッグすると周波数ルーラーが表示されます。周波数ルーラーは、対象となるノート、および音階の他のすべてのノートを微調整する際のガイドとして機能します。ここでの操作は、ピッチグリッド全体のマスターチューニングを調整していることになります。水平ズームのズーム倍数を上げておくと、値が分かりやすくなります。

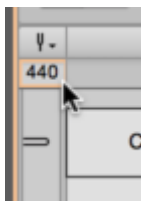


ルーラーのいずれかのマークを右クリックすると、小さなコンテキストメニューが開きます。いくつかのポインタが表示され、特定のチューニングにピッチグリッドをすばやく合わせることができます。



- 一番上には、選択されているノートの現在の周波数が表示されます。
- コンサート: 現代標準のコンサートピッチ(A = 440 Hz)に合わせたチューニングです。
- デフォルト: [環境設定]ダイアログで設定されているAの周波数に合わせたチューニングです。
- 検出結果: Melodyneによる音楽の分析結果に基づくオリジナルのチューニングです。
- デフォルトとして設定: 現在の値を新規ドキュメントのデフォルトのチューニングとして使用するように設定し、[環境設定]ダイアログの値を調整します。

A4の設定は、基準音高ルーラーの一番上のアイコンをクリックすることですばやく選択することができます。このアイコンのすぐ下のボックスにAの値を直接タイプ入力することもできます。



主音と音階を選択する

基準音高ルーラーの隣のより幅広いルーラーは音階ルーラーです。ここでは、音階の「主音」(第1音)および旋法を選択することができます。まず主音として使用したいノートをクリックします。次のメニューが開きます。



関連する音階: メニューの一番上には、名前の前に「=」のマークが付いたいくつかの音階が表示されます。これらは、現在の音階に一致するが名称が異なる音階です。

このメニューから関連する音階を選択すると、問題となる旋法の主な構造だけが適用されます。音階には新しい名前が付けられ、場合によって新しい主音を与えられます。問題となる音階を厳密に定義するはさらに微調整を加える必要がある場合もあります。その場合、[音階]ドロップダウンメニューから[音階を開く]を選択します。

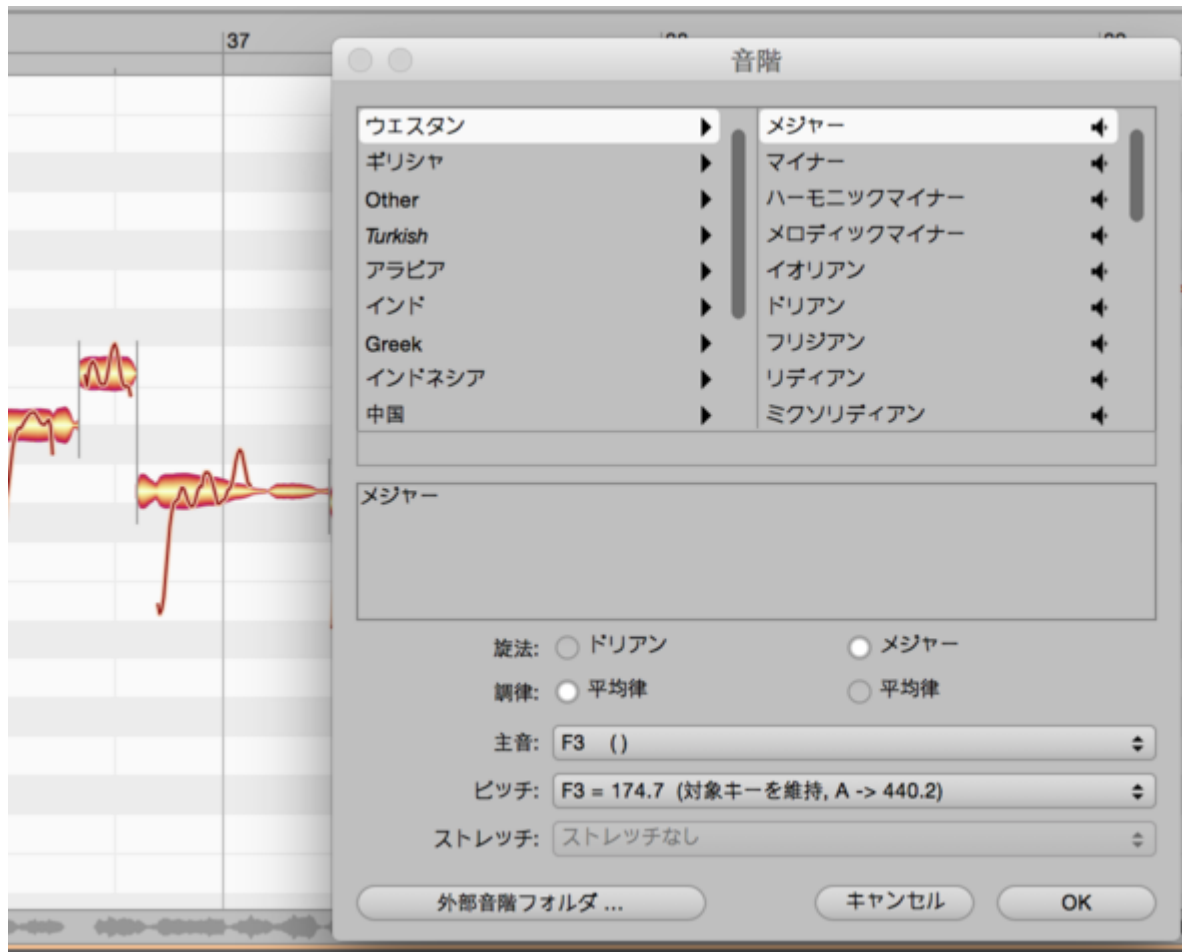
- 現在の音階: サブメニューの中央の灰色表示部分には、クリックしたノートの名前が表示されます。このノートを主音にすることができます。
- メジャー/マイナー: 主音として選択されているノートを持つ長音階(メジャー)または短音階(マイナー)を選択できます。Cメジャーを選択するには、ルーラーで[C]を選択し、サブメニューで[Cメジャー]を選択します。
- 音階を開く...: Melodyneの音階ウィンドウが開きます。ウィンドウでは、さまざまな音階にアクセスできます。このウィンドウについて次のセクションで説明します。
- 分析済: Melodyneの素材分析により生じる次の2つのオプションにアクセスできます。最も近い長音階または短音階と正確な微分音音階です。
- ノートに音階の変更を反映: 普通は、音階を変更するとピッチグリッドが調整されますが、ノート自体は先にノートをダブルクリックしておかない限り変更されません。このオプションがオンの場合、ノートがグリッドにスナップします。音階を変更するとノートが自動的に調整されるようにするには、[調律]または[調律と旋法]を選択します。こうすると、変更がすぐに反映され、再生時に聞こえます。
- 音階を再生: 現在の音階を再生します。この機能が有効な場合、音階ルーラーの上にスピーカーアイコンが表示されます。このアイコンをクリックすると、メニューを開くことなくこの機能を無効にできます。* 純正調律を適用: 選択されているノートを微調整して純正律の原則を適用します。
- ダイナミック純正律*: 微妙な不協和音を排除し、平均律のノート間の干渉を防ぎます。これにより、リアルなオーケストラのようなよりスムーズなサウンドが得られます。「ダイナミック」純正律というのは、音程が純正なだけでなく、純正律により最も影響を受けているコードのノートが平均律のコードのノートのピッチにできるだけ近づくようピッチが微細にシフトするためです。たとえば、Melodyneは正しく調律されたCメジャーのコード(C \pm 0 ct、E - 13 ct、G +2 ct)を6セント上に上げ、Eが平均律のコードから離れすぎないようにします。さらに、このノートの微調整は静的ではありませんが、現在の倍音内容により制御されます。そのため、時間領域でも、最適なチューニングが得られるよう動的になります。ダイナミック純正律は、複数(または全ての)トラックでノートを選択して純正律を適用する場合のように、マルチトラックの場合に特に効果的かつ耳に心地良いものになります。

ヒント: 転送/ロード前に調を初期化: モノフォニックまたはポリフォニックなオーディオ素材では、Melodyneは調も検出します。しかし、短いメロディフレーズの場合、正しい検出を行うために必要な音符が足りず、検出される調が実際の調とは異なる場合があります。これを防ぐには、オーディオファイルを転送またはロードする前に、Melodyneプラグインの空のインスタンスまたは(スタンドアロンでご使用の場合)空のドキュメントに音階ルーラーを使用して調を設定します。これを行うには、音階ルーラー内で希望の主音をクリックし、コンテキストメニューから希望の音階を選択します。これで、Melodyneはこれ以降の分析結果に関係なく、この初期化された値を維持します。

音階ウィンドウ

Melodyneの音階ウィンドウでは幅広い音階を選択、試聴、使用できます。このウィンドウを開くには、音階ルーラーのコンテキストメニューから[音階を開く]を選択します。

選択した音階は、Melodyneプラグインのすべてのインスタンスにのみ適用されます。Melodyne studioスタンドアロンでは、現在のドキュメントのすべてのトラックにも適用されます。



音階ウィンドウを開くには、音階ルーラーのコンテキストメニューから[音階を開く]を選択します。

左側の枠からカテゴリを選択し、右の枠から音階を選択します。各エントリの右にあるスピーカーの形をしたアイコンをクリックすると、選択されている音階を試聴することができます。

[ノートに音階の変更を反映]オプションがオンの場合、再生中、選択した音階がオーディオ素材に適用された際の効果をすぐに聞くことができます。このウィンドウでは、異なる音階をすばやく簡単に試聴することができます。変更を適用させるには、[OK]をクリックしてウィンドウを閉じます。適用しない場合は[キャンセル]をクリックします。

ウィンドウの下側の枠では、現在の音階のパラメータと、音階ウィンドウで選択されている音階のパラメータのいずれかを選択することができます。

- 旋法と調律: 現在の音階のパラメータ(左)または音階ウィンドウで現在選択されている音階のパラメータ(右)のいずれかを適用させることができます。
- 主音: 選択されている主音またはプリセットの主音のいずれかを選択することができます。
- ピッチ: 現在の調律、プリセットのピッチ、または一般的な調律のいずれかを選択することができます。
- ストレッチ: 音階にストレッチチューニングを適用するかどうかを選択することができます。
- 外部音階フォルダ...: このボタンでは、Scalaフォーマット(拡張子が「.scl」のファイル)の音階の定義を含むフォルダを開くことができます。このフォルダは音階ウィンドウには追加カテゴリとして表示されます。

インターネットでは、<http://www.huygens-fokker.org/microtonality/scales.html> で4,000を超えるScalaファイルのコレクションを入手できます。ハードディスクにコピーし、Melodyne editorを使用して試聴することができます。

このボタンで、Melodyne studioで作成された音階定義(拡張子が「.mts」のファイル)をロードすることもできます。

音階を保存する

音階ウィンドウでは、多数の音階をすばやく簡単に試したり、既存の音階の要素と音階ウィンドウ内のプリセットの要素を組み合わせることができます。面白い組み合わせが見つかったら、保存して後から使用したいと思うかもしれません。その場合、[音階を別名で保存...]コマンドを使用します。独自の音階プリセットを保存し、音階ウィンドウで後からアクセスすることができます。音階ウィンドウによく似たウィンドウが開き、以下のオプションを設定できます。

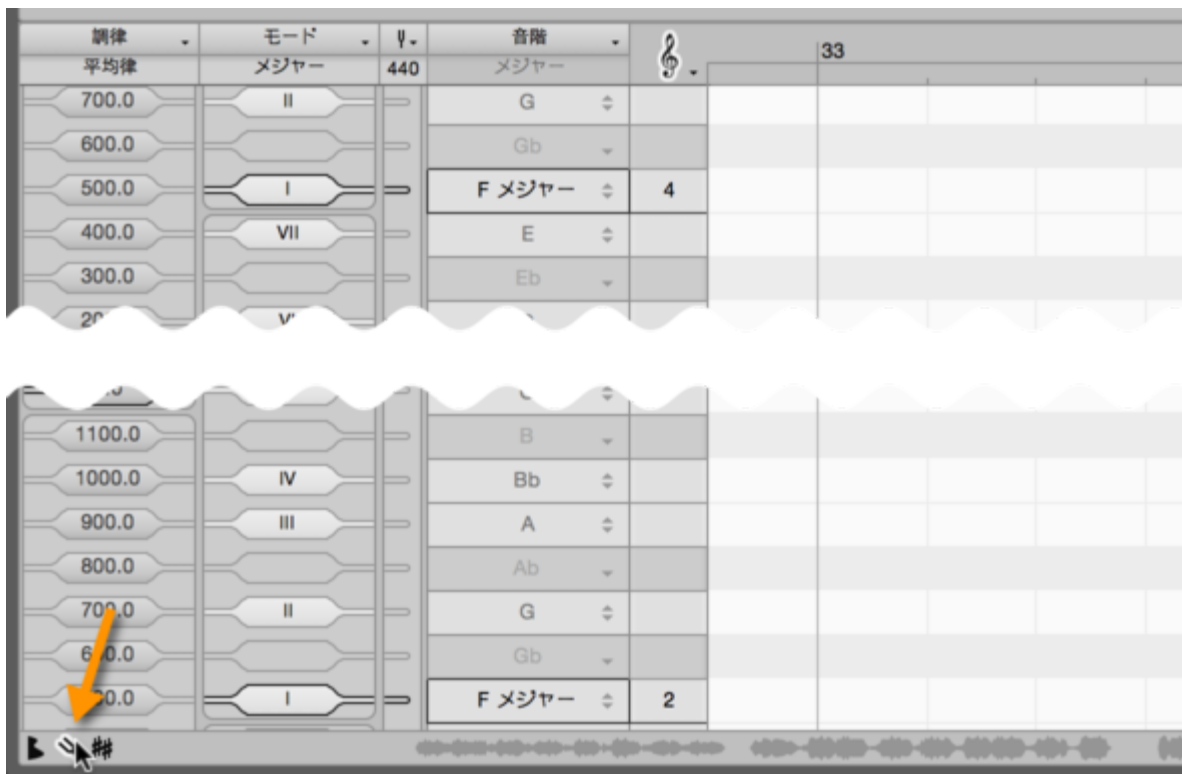
- 名前: 音階の名前を入力できます。
- カテゴリ: 音階が属するカテゴリを選択します。新規カテゴリを作成するには、[新規フォルダ]をクリックします。
- 下のテキストフィールドでは、音階とともに保存されるコメントを入力することができます。
- ウィンドウの下部分では、旋法と調律に名前を割り当てることができます。音階のすべての要素が常に音階と共に保存されます。ここにチェックマークを入れると、それ以降音階を開く際に音階のどの要素が関連するものと考えられるべきかを指定することができます。

音階を編集する

ピッチルーラーの隣に開く音階の拡張機能エリアには、音階の編集と新しい音階の作成の機能を使用できます。

音階の拡張機能を表示する

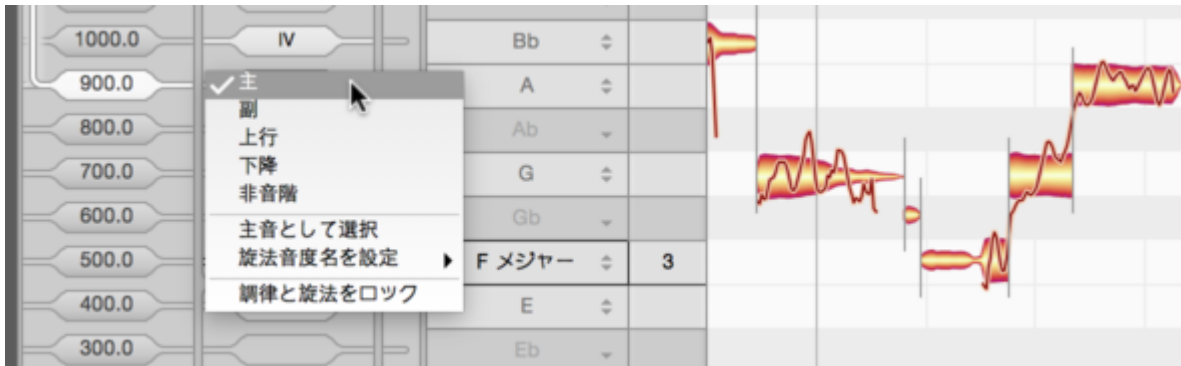
ピッチルーラー下の音叉アイコンをクリックし、拡張機能エリアを開きます。音階ルーラーと基準ピッチルーラーの左に、旋法と調律の2つのルーラーが表示されます。



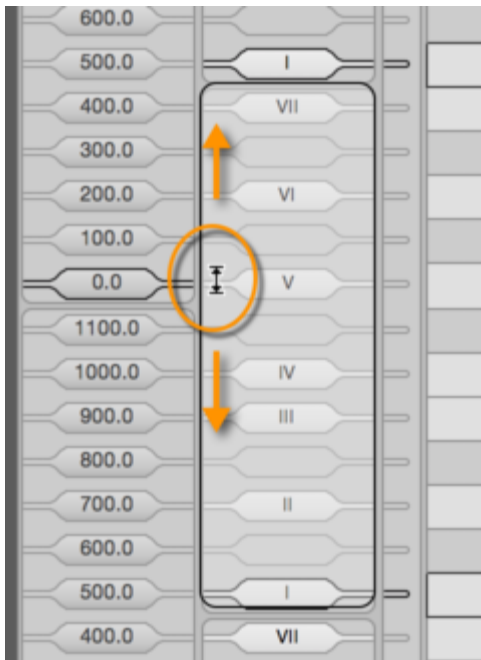
旋法を編集する

このルーラーでは、音度とその使用について定義することができます。

旋法ルーラーで音度を右クリックするとコンテキストメニューが表示され、以下の度に割り当てることができます。

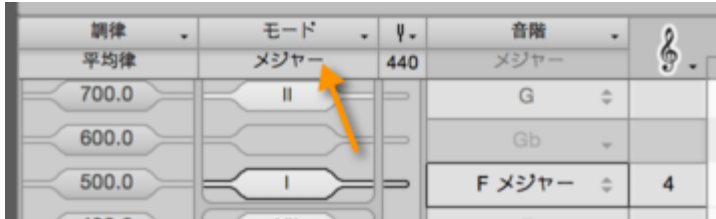


- 主: 音階で常に使用される度です。
- 副: 必ずしもではありませんが音階で使用される可能性のある度です。
- 上行: 音階の上行形でのみ使用される度です。
- 下行: 音階の下行形でのみ使用される度です。上行と下行で異なるノートが使用される音階の最もわかりやすい例はメロディックマイナーです。
- 非音階: 音律により使用可能となってはいるものの音階では使用されない度です。非音階の度はルーラーでは灰色表示となります。
- 主音として設定: 選択されているノートが音階の主音(第1音)になります。主音は黒い縁取り線で示されます。
- 旋法音度名を設定: 音階の度の表記方法を、ローマ数字、階名、スヴァラ(インド音名)から選択できます。いずれかの度をダブルクリックしてからタイプ入力することもできます。
- 調律と旋法をロック: マウスポインタをインジケータに置いて上下にドラッグすると、旋法を移調することができます。通常、移調は旋法の調律を考慮せず実行されます。



非平均律の音階(隣り合う度同士の間隔が一定ではなく異なる)の場合、旋法を慎重に移調しないと音階の度の比が崩れます。このようなことが予測される場合、[調律と旋法をロック]が自動的にオンになり、音階の度がまとまりとして動かされ、度同士の間隔が維持されます。この機能は、手動でオンとオフを切り替えることができます。

ルーラーの一番上のテキストボックス(「モード」の下)では、音階に名前を付けることができます。



音程を編集する

音階の度は音律で定義されます。それにより、各度の主音からの隔たりが決まります。この隔たりのことを「音程」と呼びます。絶対音高とは関係なく、音階内の度の隔たりの比を意味しています。

ルーラーには音程がセント単位で表示され、編集することができます。マウスを使って音程を上下にドラッグし変更することができます。



周波数比として表示される音程

また、音程を周波数比として定義することもできます。たとえば、1オクターブの音程は1:2となっています。これがこのルーラーの機能です。音程をクリックすると、画面の一番下に表示されます。ここには、最も関連性の高い(選択されている音程に最も近い)周波数比が表示されます。



強調表示の色が明るいほど、選択されている音程に近い比となっています。表示された比のいずれかをダブルクリックすると、ルーラーがオンになり、対象の音程のセント表示が選択に合わせて更新されます。

ルーラーの上半分をドラッグすると、比を任意の値に設定できます。ルーラー自体を移動するには、下半分をドラッグします。ルーラーの[すべて]にチェックマークを入れると、比があらかじめ選択されなくなり、現在の音程に近いすべての比が表示されます。

音程を定義する

ルーラー内の音程を右クリックすると、次のコンテキストメニューが表示されます。



- 選択範囲の上に音程を挿入: 選択されている音程の上に音程を挿入します。
- 音程を削除: 選択されている音程を削除します。
- 半音階的音程を挿入: 既存の音程に半音階的音程を追加します。
- 非音階的音程を削除: 音階に含まれない音程を削除します。
- 主音として設定: 選択されている音程を音階の主音に設定します。
- 割り当てられた階名: 新規の音程には、最も近い音の名前が付けられます。しかし、音楽的にはその上または下の音の名前を割り当てる方が都合がよい場合もあります。その場合、このエントリから別の名前を選択します。
- 調律を平均律に切り上げ/下げる: 平均律に合わせてすべての音程を調整します。
- ストレッチチューニング: 音階にストレッチチューニングを適用するためのウィンドウを開きます(詳しくは下をご覧ください)。
- ...に基づく新規音階を作成...: 新しい音階をいちから作成するためのウィンドウを開きます(詳しくは下をご覧ください)。
- 音程ディスプレイ: 選択されている音程を参照として表示し、循環ディスプレイを無効にし、ディスプレイ単位をセント、ヘルツ、トルココンマ(=1/53オクターブ)から選択します。これらのオプションは、音程のディスプレイにのみ影響します。
- 音程モニタリング: このオプションがオンの場合、音程を変更すると同時に結果を聞くことができます。

ルーラーの一番上のテキストボックスでは、音階の音律に名前を付けることができます。



Shiftキーを押したまま2つの音程間をクリックすると、マウスカーソルの位置に新しい音程を挿入できます。
Shiftキーを押したまま既存の音程をダブルクリックすると削除できます。

独自の音階を作成する

音階をいちから作成するには、ルーラーの音程を右クリックしてからコンテキストメニューから「...に基づく新規音階を作成」を選択します。新しいウィンドウが開き、循環音階と被循環音階の間で選択できます。

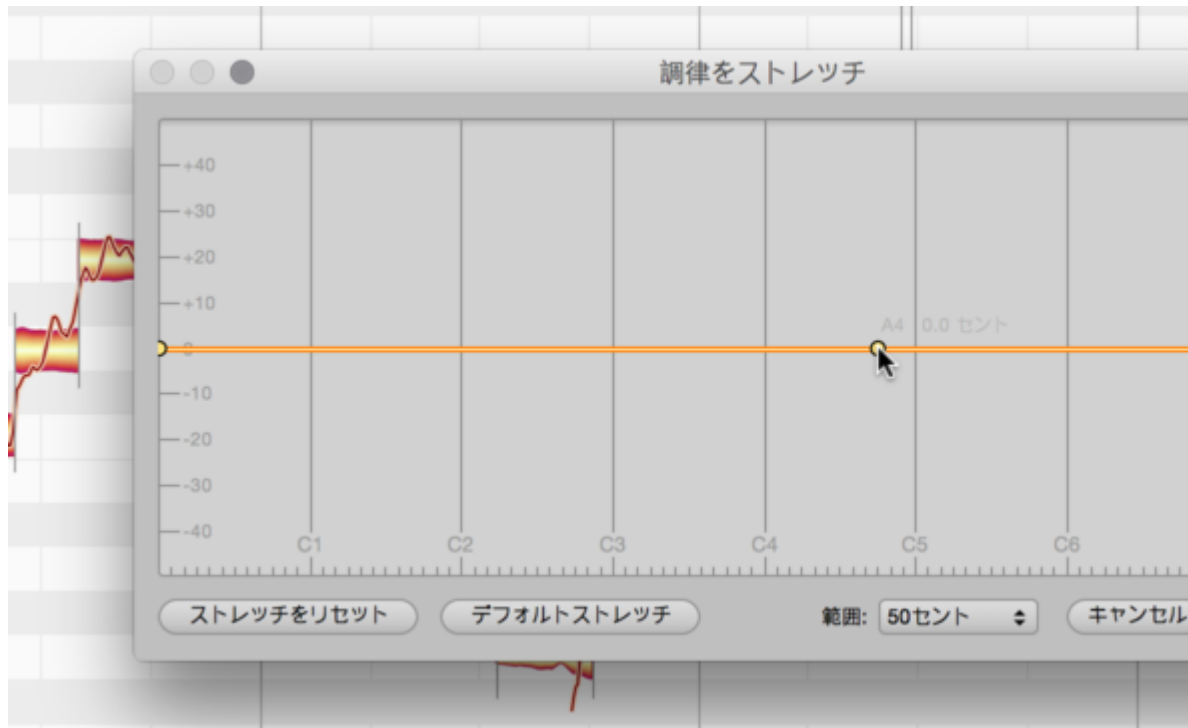


循環音階: 循環音階の場合、セント単位で循環のサイズを指定し、含まれる度の数を指定することができます。たとえば、オクターブごとに繰り返す音階では、循環サイズが1,200セントになります。循環サイズは「2/1」などの比として入力することもできます。

- 非循環音階: 隣り合うノートの間の音程のサイズと、選択されている主音の上下の度の数を入力します。
- 音階名: テキストボックスに音階の名前を入力します。
- [OK]をクリックして終了すると、設定に従って音階が生成され、この音階が現在のドキュメントに対するグリッドに適用されます。現在の音階に戻るには、[キャンセル]をクリックして終了します。

ストレッチチューニングを使用する

アップライトピアノやグランドピアノでは、高音と低音の音程が強調されています。これを「ストレッチチューニング」といいます。Melodyneで平均律で作業をすると、ストレッチチューニングが失われてしまいます。これを防ぐには、ルーラーのコンテキストメニューから[ストレッチチューニング...]を選択してウィンドウを開き、ストレッチカーブを定義します。



グラフをダブルクリックするとハンドルが表示されます。このハンドルをドラッグしてカーブを調節します。ハンドルはダブルクリックすると削除されます。

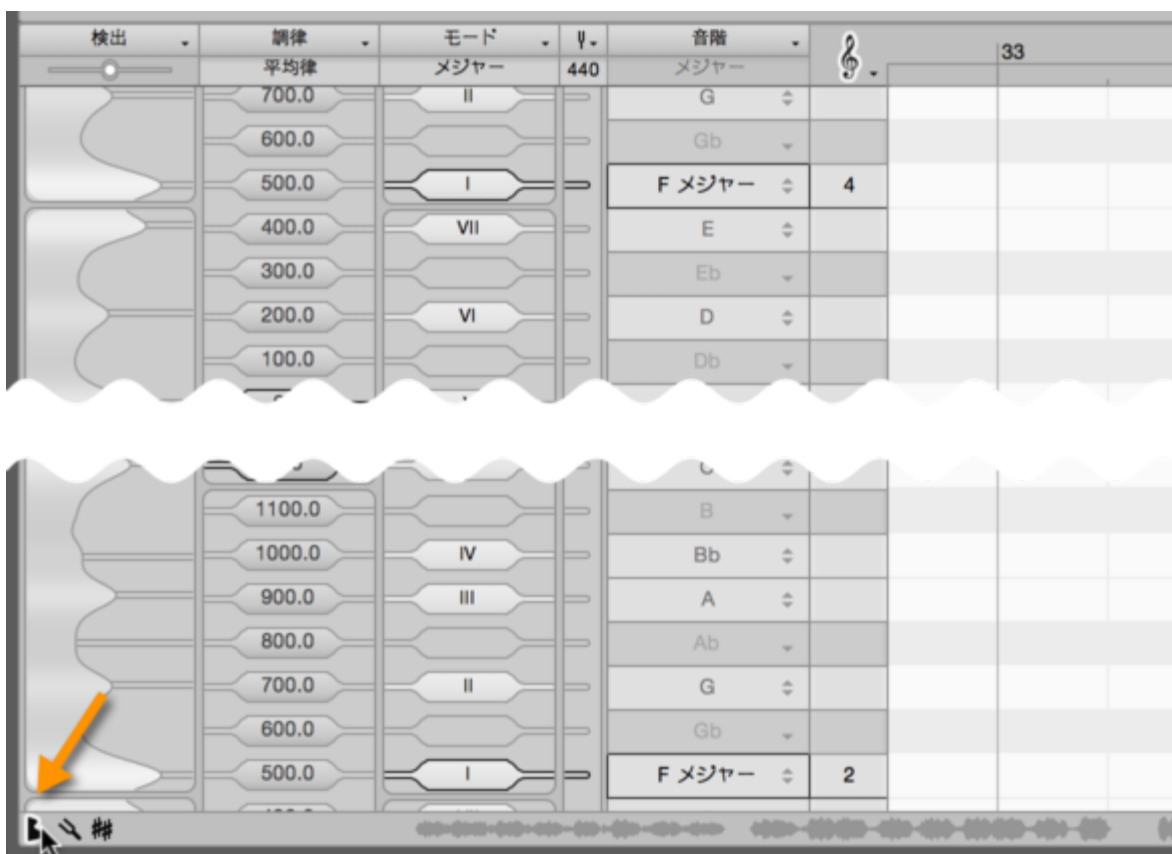
- 標準ストレッチ: このボタンをクリックすると、一般的なストレッチカーブが生成されます。カーブにはその後調整を加えることができます。
- ストレッチをリセット: カーブを元の形に戻します。
- ピッチ範囲: 最大偏差を設定し、カーブの垂直方向の範囲を設定します。
- [OK]で終了すると設定内容をカーブに適用し、[キャンセル]で終了すると変更が取り消されます。

音階を識別する

音階検出機能は、オーディオ素材に含まれる音程と音階の内容を分析します。分析結果が音階グリッドとして反映されます。抽出した音階は、編集、保存、および、別の素材に適用してある録音素材の特性を別の素材に移すことができます。

音階検出機能を表示して感度を調整する

ピッチルーラー下の3つの矢印のうち一番左のアイコンをクリックします。ピッチルーラーの左の「引き出し」が完全に開きます。



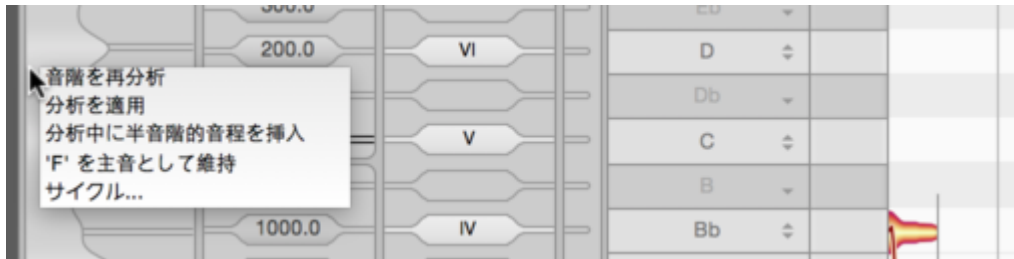
画面の左端に「検出」というヘッダーが付いた新しい列が表示され、分析結果が表示されます。音階検出の両側にある「山」は、検出された音程を示しています。山が高いほど、音階内の音程の重要度が高いとMelodyneにより判断されています。

音階検出の一番上のスライダーでは、分析の感度と、検出され表示された音程の数を設定します。表示される音程は、実際に演奏された音程とできるだけ一致する必要があります。画面内に含まれる音階と同じ数の音程が表示されるよう、感度を調整します。

分析は選択されているノートにのみ適用されます。ノートが1つも選択されていない場合は、すべてのノートに適用されます。

音階検出オプション

音階検出を右クリックすると、次のコンテキストメニューが表示されます。



- 音階を再分析: 音階検出に音階を再分析させます。分析は選択されているノートにのみ適用されます。ノートが1つも選択されていない場合は、すべてのノートに適用されます。
- 分析を適用: このオプションが選択されている場合、分析結果が現在の音階グリッドにすぐに適用されます。
- 分析により半音階的音程を挿入: このオプションが選択されている場合、分析された音程に半音階的音程が追加されます。これらは音階に含まれない音程(非音階の音程)として扱われます。
- 主音として維持: 音階検出を垂直方向にクリック&ドラッグすると、オーディオ素材の分析のベースとなる主音を変更することができます。その際、このオプションが自動的に選択されます。これで、次の分析は、Melodyneの現在の分析結果により推奨された主音ではなく、選択した主音をベースに行われます。
- 音階循環: ダイアログボックスが開き、循環または非循環のいずれかを選択できます。



- 循環音階: 循環の音階分析が選択されます。循環サイズはセント単位または「2/1」などの比として入力することもできます。

- 非循環音階: 非循環の音階分析が選択されます。分析の上限と下限はヘルツ単位で自由に選択できます。この場合、分析には範囲内のノートのみが考慮されます。
- [OK]をクリックして音階循環のダイアログを終了すると、新しい設定をもとに素材が再分析されます。一方[キャンセル]を選択して終了すると、既存の分析に戻ります。

検出された音階を適用する

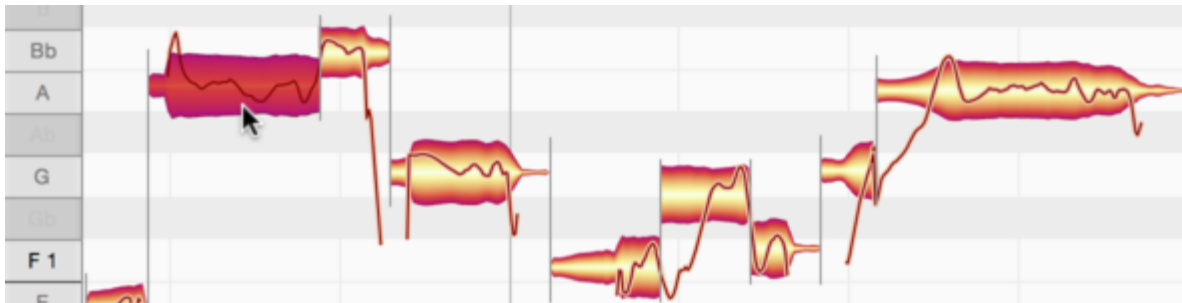
検出された音階を現在の音階グリッドに適用するには、音階検出のコンテキストメニューの[分析を適用]オプションにチェックマークを入れます。他の音階同様、この音階は編集・保存したり別の素材に適用したりできます。

ノートを選択する

このツアーでは、Melodyneでのノートの選択方法について説明します。

一般的な選択方法

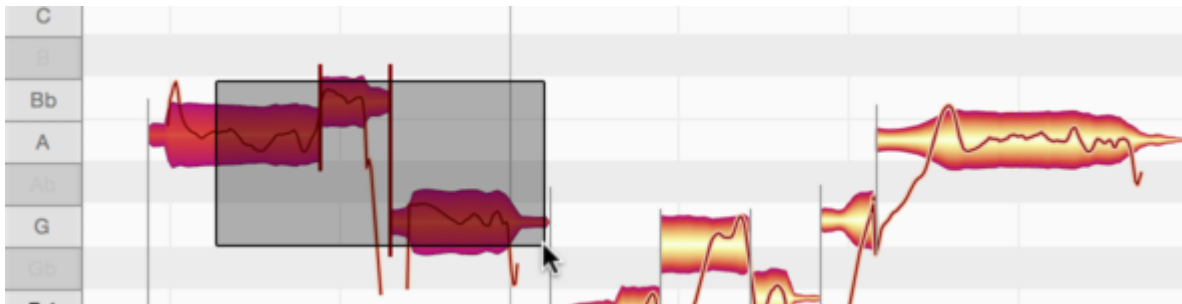
ノートを選択するには、ノートエディターのノートをクリックします。選択されたノートは、濃い色で表示されます。



選択範囲にノートを追加するには、Command+クリックします。

選択範囲からノートを取り除くには、ノートをCommand+クリックします。

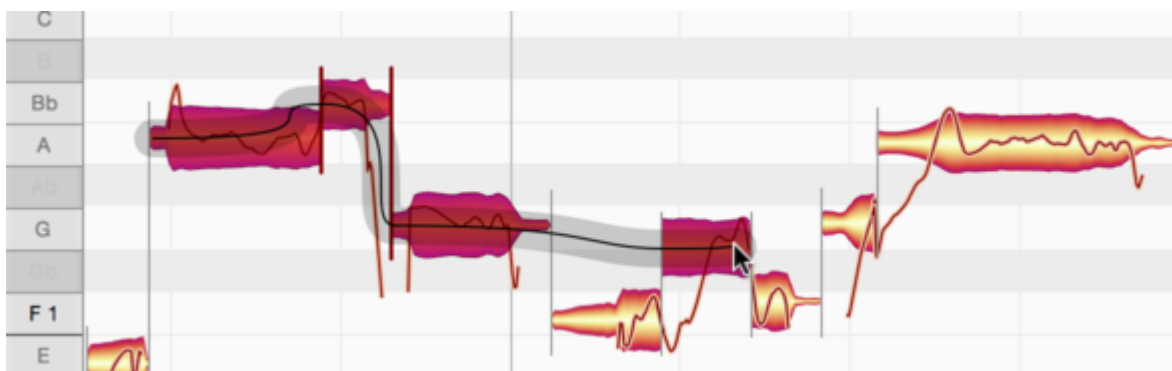
投げ縄選択で複数のblobを選択することもできます。背景をクリックしてから、ポインタをドラッグして範囲を選択します。このような選択方法は、「ラバーバンド選択」とも呼ばれます。Commandキーを押したまま操作すると、既存の選択対象にラバーバンド選択を追加できます。Command+クリックで、個別のノートを選択対象に追加(または選択対象から削除)することもできます。



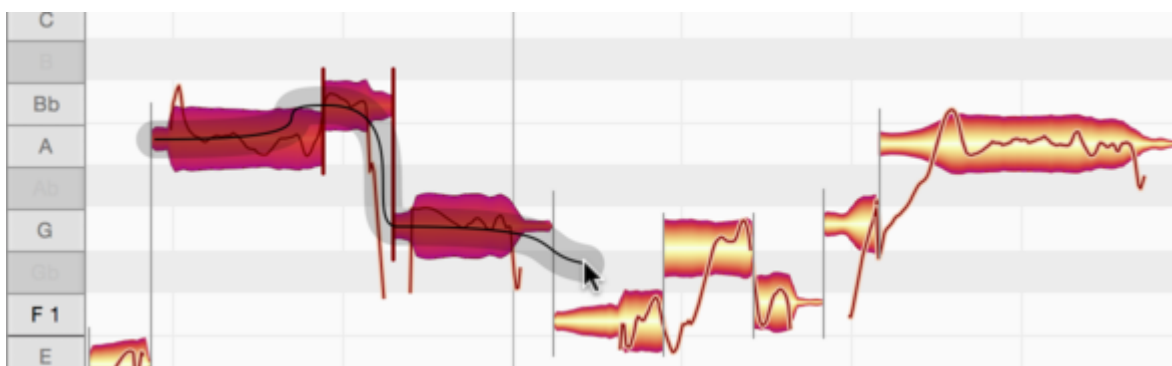
パッセージ(一連のノート)を選択するには、パッセージの最初のノートをクリックしてから最後のノートをShift+クリック(またはその逆)します。

スネーク選択

Shiftキーを押したままノートをクリックし、そのまま次のノートへとドラッグすると、Melodyneのスネーク選択モードがオンになります。ノートを次々に選択していき、選択範囲にノートを追加することができます。

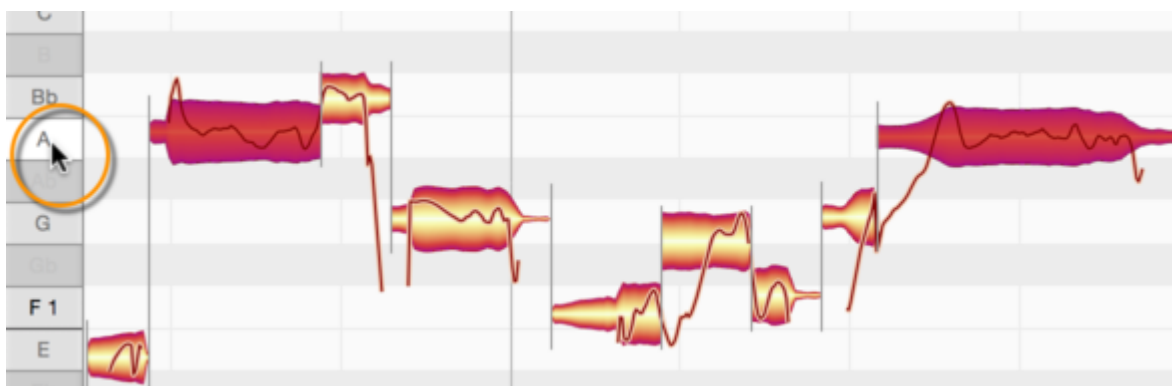


マウスを逆方向に動かすと、前に選択されたノートが選択範囲から取り除かれます。



ピッチルーラーを使って選択する

音名に従ってノートを選択するには、ピッチルーラーの音名を選択します。

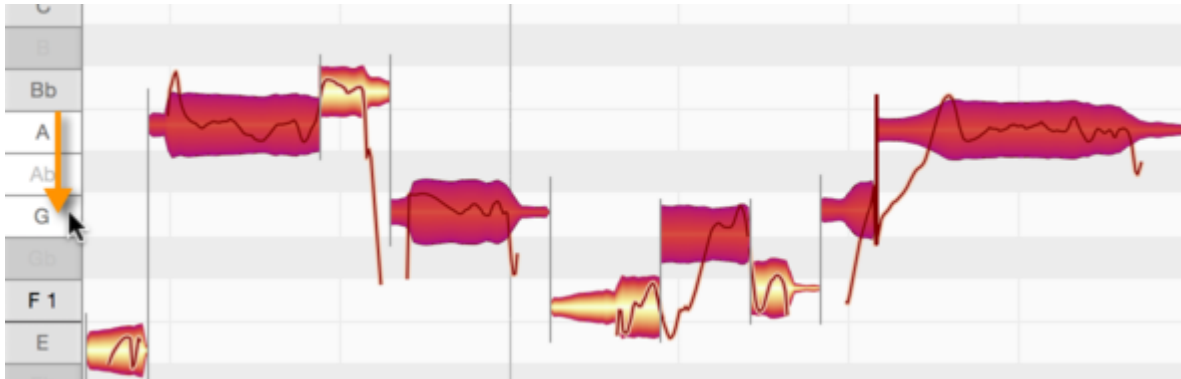


サイクルモードがオンの場合、サイクルゾーン内のノートのみ選択されます。

ピッチルーラーの他の音名をCommand+クリックし、選択範囲に追加したり削除したりすることができます。

ピッチルーラーの音名をダブルクリックすると、クリックした音名のノートだけでなく、同じ音名のノートをすべてのオクターブにわたって選択することができます。

一定範囲のノートを選択するには、ピッチルーラー内をクリック&ドラッグします。



Commandキーを押したままピッチルーラーを選択すると、一定範囲のノートまたはある音名のノートを選択範囲から取り除くことができます。ここでも、サイクルモードがオンの場合、サイクルゾーン内のノートのみ選択されます。

メニューのコマンドを使って選択する

[編集]メニューおよびノートエディターのコンテキストメニューでは、[すべてを選択]コマンドや、追加の選択コマンドを含む[特別選択]サブメニューを選択できます。

[前の選択に戻す]コマンドでは、最後の選択動作を無効にし、前に有効だった選択範囲に戻すことができます。これは、複雑な選択を行っている場合、誤って選択範囲が消えてしまった場合などに便利です。[前の選択に戻す]をクリックすると、消える前の状態に戻すことができます。

[ノート選択を反転]コマンドでは、選択されているすべてのノートの選択を解除し、選択されていないノートすべてを選択します。以降のコマンドも、コマンド名からその動作を簡単に推測できます。それぞれ、そのノート以降にあるノート、同じ音名のノート、すべてのオクターブにわたる同じ音名のノートを選択できます。[すべてのオクターブにわたって上下5度を選択]コマンドを選択すると、選択されているノートの上下5度のノートがすべてのオクターブにわたって選択されます。このメニューに含まれるすべての[選択]コマンドは、サイクルモードがオンの場合、サイクルゾーン内のノートにのみ影響します。

また、[全小節で同じ拍を選択]や[ロケーター間のノートを選択]も選択できます。[非表示のノートを順に選択]コマンドでは、重なり合っているノートを順に選択できます。選択するたびに重なり合っているノートがレイヤーごとに表示されます。レイヤーが切り替わりノートが表示されたら、確認してドラッグすることができます。

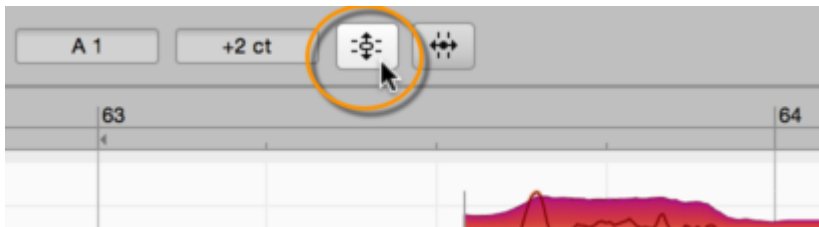
ピッチ修正マクロ

ピッチ修正マクロは、イントネーションを補正し、ピッチの過度の揺れを抑制するのに使用します。

マクロを開いて使用する

編集したいノートを選択します。ノートを1つも選択しない場合、デフォルトではマクロ編集がすべてのノートに適用されます。

マクロを開くには、[編集] > [クオンタイゼーションマクロ] > [ピッチを補正]を選択するか、ノートエディターの一番上のこのボタンをクリックします。

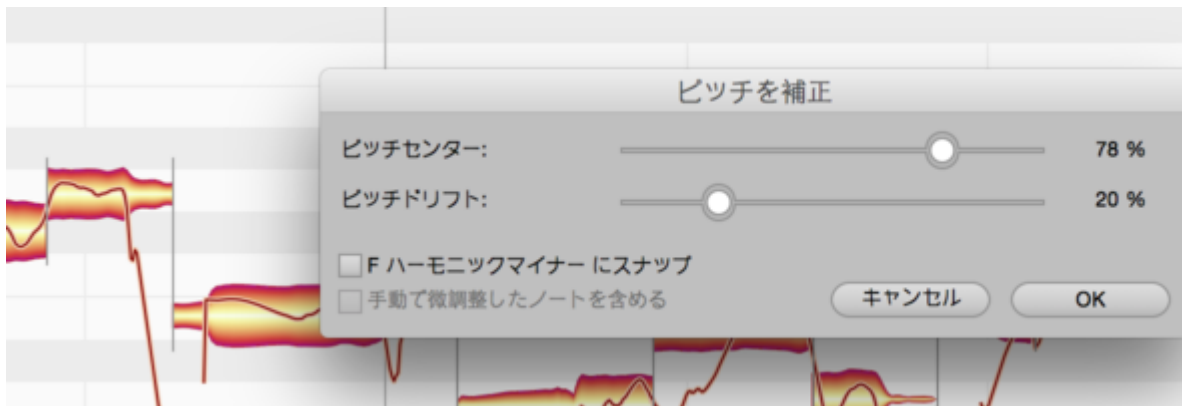


上のスライダーでは、選択されている1つまたは複数のノートのピッチセンターを、0%(影響なし)から100%(フル)の範囲で動かすことができます。デフォルトではノートは最も近い半音に(またはその方向へと)移動しますが、(選択されている音階へ)[スナップ]のオプションをオンにすると、その音階とは異なるノートは無視され、強度スライダーの設定に応じてノートが一定の間隔または最も近い音階内の度へと移動します。

ノートの音高にはわずかな揺れがあることがほとんどです。そのため、ノートの位置はMelodyneが計算した平均音高に基づいています。この値は「ピッチセンター」と呼ばれ、ピッチ補正の基準となります。音高に揺れがあるときは、100%の補正を適用しても、新しい音高でサウンドが「正しく」聞こえるとは限りません。「正確な音高」とは絶対的なものではなく、音楽の内容に常に左右されるものだからです。

マクロは音楽的にインテリジェントに機能します。低めの値を設定すると、大きく外れた音だけに影響し、意図されるピッチに近い音には影響しません。スライダーをさらに右に動かすと、意図されるピッチに近い音にも影響を与えるようになり、100%になると選択されている音すべてのピッチが正確に合わせられます。

このマクロが自動的に調整するピッチセンターは、ピッチツールを使用した手動のピッチ修正を実行する際に変更されるパラメーターと同じです。



下のスライダーでは、ノートのピッチドリフトを段階的に削減することができます。「ピッチドリフト」とは、演奏技術が未熟な場合に生じる、音高のゆっくりとしたうねりのことをいいます。ピッチモジュレーションやビブラートなどのよりスピードの速いピッチの揺れには適用されません。

ピッチ補正のパラメータは、どちらもオーディオの再生中にリアルタイムで変更することができます。設定を変更することで、どのように聞こえるのか、そして表示がどのように変わるのか(ノートエディターのblobがどのように移動するのか)確認してみましょう。

ピッチツールを使ってノートを微調整済みである場合、Melodyneはそれらのノートには変更を加えません。デフォルトでは、ノートを1つも選択しないで[ピッチを補正]マクロを開き、パラメータの変更を行うと、変更内容がその他のノートのみに適用されます。つまりデフォルトでは、手動で調整済みのノートには、マクロは適用されません。手動で調整済みのノートにもマクロを適用させたい場合、[手動で編集したノートを含める]のチェックボックスを選択します。微調整がなされておらず、このオプションが選択不可の場合は灰色表示されます。

再開時にマクロと補正值を閉じる

[OK]で変更内容を維持し、[キャンセル]で取り消します。[ピッチを補正]マクロを使用したあとで、手動でノートの微調整を行ってもかまいません。

マクロを使って編集したノートを選択し、再びマクロを開くと、前回適用された設定が表示されます。つまり、マクロは、各ノートに以前適用されたパラメータを記録しています。適用されたパラメータが異なっている複数のノートが現在の選択範囲に含まれている場合、パラメータを開くと、各パラメータの最小値および最大値が表示されます。

[OK]で終了したあとも、[取り消す]機能を使ってマクロ編集を取り消すことができます。

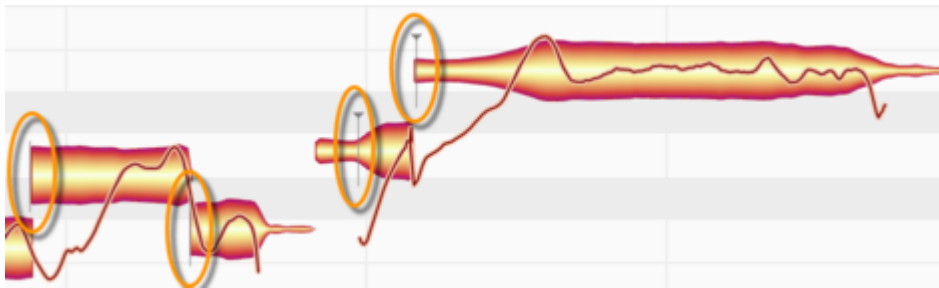
[タイムをクオンタイズ]マクロ

このツアーでは、[タイムをクオンタイズ]マクロを使ってすばやく簡単にノートのタイミングを修正する方法について説明します。

クオンタイズのタイミング: 何がどこに移動するのか

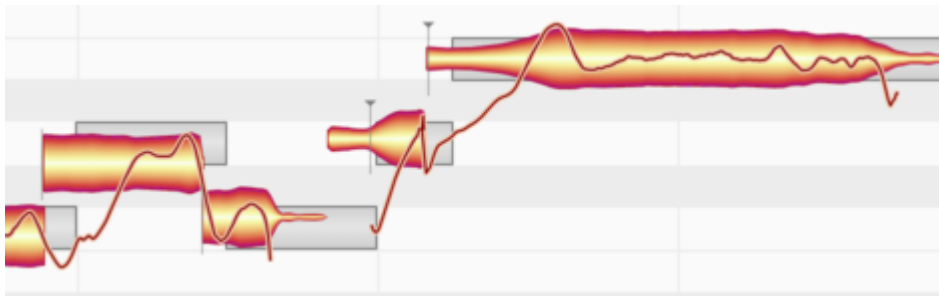
[タイムをクオンタイズ]マクロの操作を詳しく見ていく前に、いくつか基本的なことについて説明しましょう。

これらを分かりやすく説明するために、まずタイムツールを選択しましょう。有効な場合、ノート分割(垂直線で示される)またはノートの音楽上の起点(三角形の付いた垂直線で示される)が各blobの先頭付近に表示されます。



ここで、[オプション]>[ノートエディター]サブメニューの[対象ノートを表示]オプションにチェックを入れます。このオプションには、ノートエディターの右上隅の歯車アイコンからもアクセスできます。

各blobの背後に灰色の四角形が表示されました。



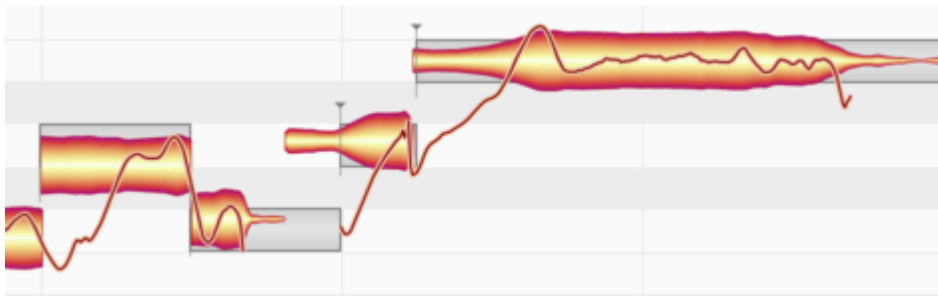
素材を初めて分析すると、Melodyneにより、タイミング補正処理に関連する2つのパラメータが各ノートに対して算出されます。

まずは、ノートの意図された音楽上の拍です。灰色の四角形がその拍を示しています。四角形の左端は、グリッドラインに合わせられています。

次は、ノートの先頭または音楽上の起点が、それぞれノート分割または三角形の付いた垂直線で示されます。これは、必ずしもblobの左端と一致していません。たとえば金管楽器では、実際の音は、息を吹き込んだ時の雑音の後に聞こえてきます。もちろん、この息もノートの一部ですが、タイミングの観点から見れば、本来の音が発せられ、希望の音高に達した瞬間が重要になります。

この位置を見つけるのが簡単ではないこともあり、その場合ノートの先頭のみが示されます。（起点はノートアサインメントモードで編集できます。）

[タイムをクオンタイズ]マクロでノートをクオンタイズすると、各ノートの音楽上の起点(見つかっている場合。見つかっていない場合はノートの先頭)が、灰色の枠の左方向へと移動します。完全に左端まで移動するか、一部だけ移動するかは、スライダーで調整します。



ポリフォニックなオーディオ素材でのクオンタイズについて: ポリフォニック素材では、アンカーに三角形が付いているものと付いていないものがあります。三角形の付いていないアンカーは、三角形が付いている別のノートに関連しており、そのため、クオンタイズ中は別に扱われます。ピアノでEのすぐあとにCを弾くと、Eに付随するトランジェント(過渡特性)がCの音にも含まれます。この場合、Cには三角形が付けられ、Eには三角形が付きません。これら2つのノートを、特別な理由もないのにクオンタイズ中にそれぞれ別の値で動かすことは、あまり意味がないだけでなく、アーチファクトが生じてしまうことさえあります。

そのため、以下のルールが適用されます。クオンタイズ中に両方のノートを選択すると、三角形の付いているノートと付いていないノートは、同じ値だけマーカーに向かって移動します。2つのノートは、主従関係にあると考えるとよいでしょう。三角形の付いたマーカーが表示されているノートだけが選択されている場合、そのノートだけがクオンタイズされます。三角形の付いていないマーカーが表示されているノートだけが選択されている場合、クオンタイズは行われません。ノートを複数選択している場合も同じように動作します。もちろん、聞こえ方に満足がいかない場合は、手動でノート(すべてまたはいずれか)を動かすこともできます。

和音では、これはクオンタイズの動作を定義する選択手順です。和音の各音が個別に選択されており、クオンタイズされている場合、上記のとおり動作し、個別にグリッドに沿ってまたはグリッドの方向に移動します。これは、たとえばギターで弾いた和音の各音(すばやく連続して弾いているため同時に聞こえる)になります。これは演奏では実現不可能ですが、音楽的には望ましい結果です。

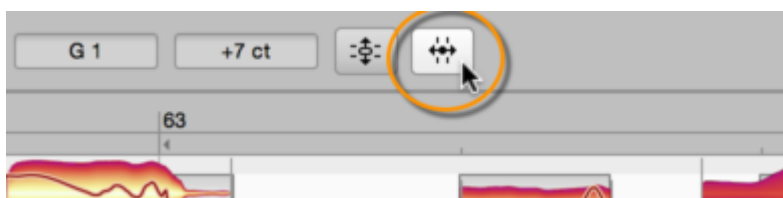
一方、クオンタイズ前に和音のすべての音が選択されている場合、各音は同じ間隔で移動します。和音の内部のタイミング(ギターの例で言えば連続する弦の音を分割する間隔)と奏法の自然さは維持されます。和音はクオンタイズ後もクオンタイズ前とまったく同じように聞こえますが、先走りや遅れが解消されます。

和音内の各音の前後の移動の幅は、和音内の最初と最後の音のサウンドの中間に最も近いところに位置する音により決まります。6弦ギターでつま弾いた和音の場合、3番目または4番目の弦で弾いた音がこれにあたります。他の弦の音をグリッドラインに合わせたい場合、和音全体を手動で動かすことができます。

[タイムをクオンタイズ]マクロを開きパラメーターを設定する

編集したいノートを選択します。ノートを1つも選択しない場合、デフォルトではマクロ編集がすべてのノートに適用されます。

[タイムをクオンタイズ]マクロを開くには、[編集] > [クオンタイゼーションマクロ] > [タイムをクオンタイズ]を選択するか、ノートエディターのツールバー右の[タイムをクオンタイズ]ボタン(画像参照)をクリックします。



まず、タイミング補正の基準となるグルーブの単位を選択します。

[なし]を選択すると、クオンタイズ位置が、上記の通り灰色の四角形の左端に設定されます。四角形の左端は、拍を示すグリッドラインに合わせられます。Melodyneは、分析後ノートをこの拍に合わせて配置します。(概して、システムはうまく機能します。しかし、Melodyneがノートをうまく検出することができず、クオンタイズ後にノートを手動で前後の拍に動かさなくてはならない場合もあります。)つまり、[なし]を選択すると、[タイムをクオンタイズ]マクロに、Melodyneによる素材の分析結果により配置された拍の上へ(または拍に近づくように)ノートを動かすよう指示を出しているのと同じことになります。



[トラック]を選択する場合、別のトラックまたはMelodyne pluginの別のインスタンスをクオンタイズ参照として使用できます。ボタン上のメニューで、希望のトラックまたはインスタンスを選択します。選択したトラックのノートがグリッドとなり、現在編集されているノートまたはトラックがこのグリッドに合わせてクオンタイズされます。他のボタンで、クオンタイズの対象グリッドを選択できます。ノート値の隣の「T」は、対応する三連符を示しています。たとえば、グルーブ単位に[1/4]を選択すると、灰色の四角形が最も近い4分音符(クロシェット)へと移動し、クオンタイズ位置がこの位置に設定されます。

タイムクオンタイズのマクロは、多くのMIDIシーケンサに一般的に搭載されているクオンタイゼーションとは異なり、より音楽的に動きます。選択されているグリッドにすべてのノートのスナップさせるのではなく、選択されているノートのリズムの強調位置を編集するのです。たとえば、連続する16分音符がいくつか含まれるパッセージがあり、これを4分音符へクオンタイズすると、連続する16分音符の各先頭部分が最も近い4分音符へとスナップします。連続部分に含まれる16分音符自体のタイミングが変更されることはありません。修正したい場合は、その後にタイムクオンタイズ動作を行うことで実行できます。この場合、16分音符をクオンタイズの単位に選択します。

[強度]スライダーでは、クオンタイズによりクオンタイズ位置へとノートが動く際の距離をパーセンテージで設定します。たとえば、スライダーを[0%]に設定するとノートは動かず、[50%]に設定すると半分の距離だけ動き、[100%]に設定すると拍の上ちょうどに合わせられます。グルーヴ単位とクオンタイズの強度は、どちらもオーディオの再生中にリアルタイムで変更することができます。設定を変更することで、どのように聞こえるのか、そして表示がどのように変わるのか(ノートエディターのblobがどのように移動するのか)確認してみましょう。

タイミングツールを使ってノートの位置を微調整済みである場合、Melodyneはそれらのノートには変更を加えません。デフォルトでは、ノートを1つも選択しないで[タイムをクオンタイズ]マクロを開き、パラメータの変更を行うと、変更内容がすべてのノートに適用されます。手動で調整済みのノートにもマクロを適用させたい場合、[手動で編集したノートを含める]のチェックボックスを選択します。手動での微調整がなされておらず、このオプションが選択不可の場合は灰色表示されます。

再開時にマクロと補正値を閉じる

[OK]で変更内容を維持し、[キャンセル]で取り消します。[タイムをクオンタイズ]マクロを使用したあとで、手動でノートを移動させてもかまいません。

マクロを使って編集したノートを選択し、再びマクロを開くと、前回適用された設定が表示されます。つまり、マクロは、各ノートに以前適用されたパラメータを記録しています。適用されたパラメータが異なっている複数のノートが現在の選択範囲に含まれている場合、各パラメータの平均値が表示されます。

[OK]で終了したあとも、[取り消す]機能を使ってマクロ編集を取り消すことができます。

メインツール

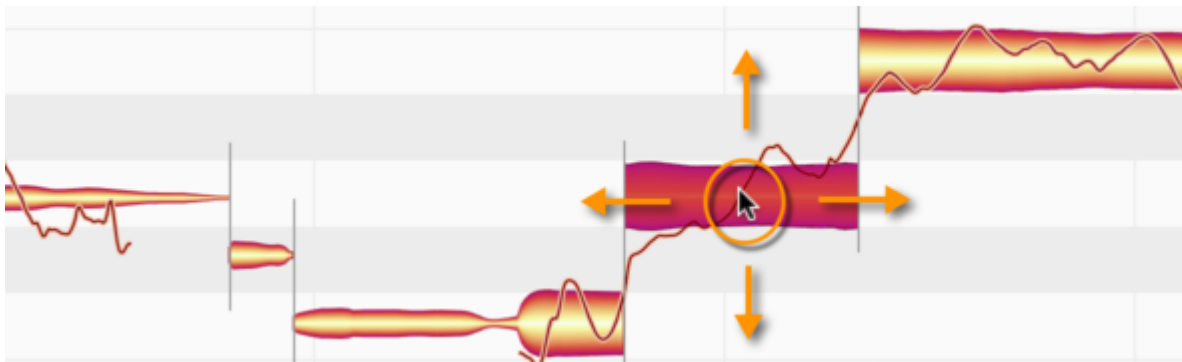
Melodyneメインツールはコンテキストツールとなっており、blobのどこにポインタを合わせるかによって機能が異なります。独自の機能はありませんが、ピッチ、タイミング、ノート分割の編集に対して機能がより特定されている他のツールの機能をさまざまな方法で 사용할 수 있으며、操作ごとにツールを変更することなく基本的な編集操作を行うことができます。

ノートのピッチとタイミングを変更する

ノートエディターのツールボックスまたはコンテキストメニューから、またはコンピューターキーボードのF2キーを押してメインツール(矢印)を選択します。(このツールに別のショートカットを割り当てたい場合、メインメニューの[Melodyne]>[環境設定]>[ショートカット]>[編集ツール]を選択して行えます。)



メインツールでblobの中央をクリックし、マウスボタンを押したまま上下にドラッグすると音高を、左右にドラッグすると時間軸上の位置を変更することができます。最初にどちらの方向に動かすか(垂直方向または水平方向)によって、音高またはタイミングのどちらが変更されるかが決まります。マウスボタンをリリースすると、ノートがその位置へ移動します。Altキーを押したまま操作すると、ピッチグリッドやタイムグリッドを無視して自由にノートを配置することができます。

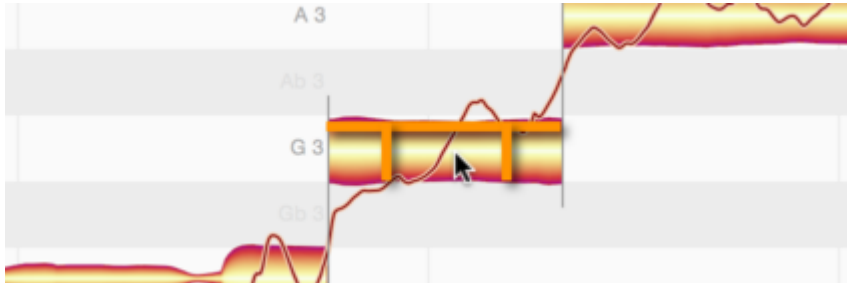


ノートを上下にドラッグすると、ノートをクリックした位置のサウンドが連続再生されます。この際、マウスを左右に動かすと、ノートの他の部分にフォーカスを移すことができます。この方法でピッチ変更をモニターしたくない場合、[オプション]>[ノートエディター]サブメニューの[blob編集時にモニター]オプションのチェックマークを外します。このオプションには、ノートエディターの右上隅の歯車アイコンからもアクセスできます。

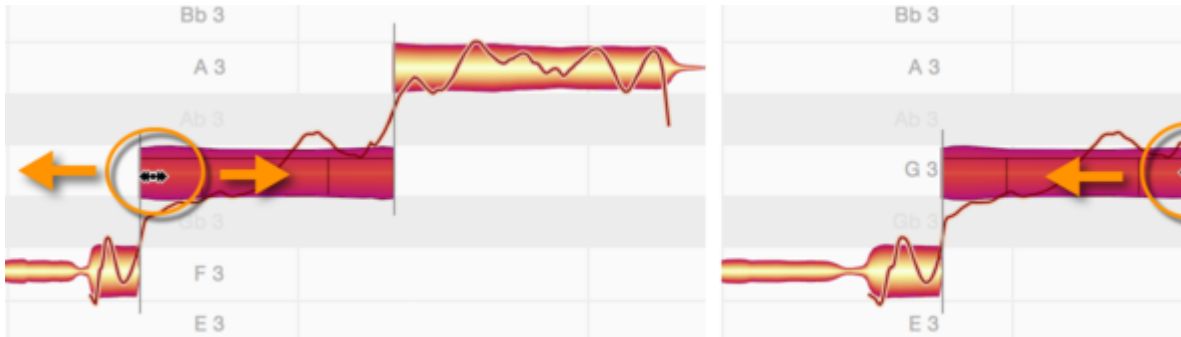
ノートの長さを変更する

[ノートエディタオプションを開く]メニューを選択し、[blob情報を表示]を選択します。blobの形がはっきり確認できるようになるまで、編集エリアを拡大表示します。マウスポインタをblobに合わせると、blob内に細い線が表示されます。この線は、メインツールをどの位置に置くとどの機能を操作できるようになるかを示しています。

図では、見やすくなるようこの線を実際より太く表示しています。blobの中央で使用できる機能については先に説明しました。blobの先頭、末尾、上半分でも、それぞれ使用できる機能が異なります。マウスポインタをそれぞれの領域に置くと、マウスポインタの形がその機能に合わせて変化します。



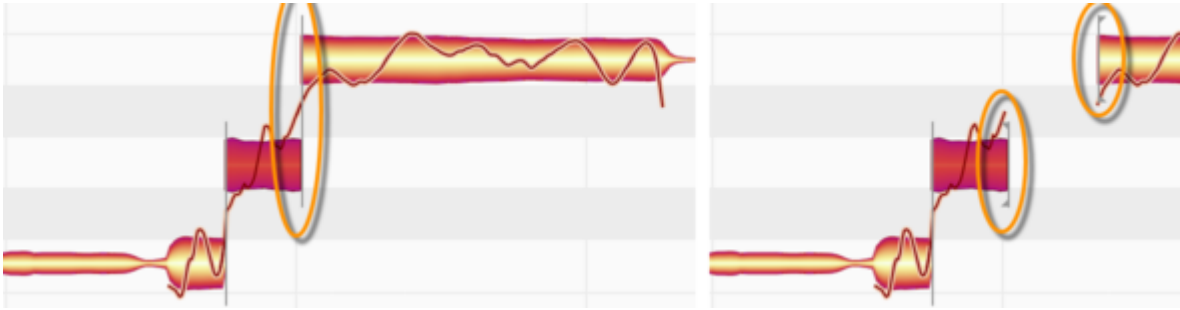
ノートの先頭部分を左右にドラッグしてみましょう。Altキーを押したまま操作すると、現在のタイムグリッドが無視されます。このとき、変化するのはノートの先頭部分だけではありません。ノートの末尾部分が固定されているため、移動に合わせてノート全体が伸縮します。



同じように、blobの一番右の部分(ノートの末尾部分)を動かすこともできます。

ノートの先頭または末尾部分をこの方法で動かすと、このノートに隣り合う前後のノートも同じ分だけ伸縮します。こうして、これら2つのノートが重なり合ったり、2つのノートの間に空白部分(無音部分)が生じたりするのを防ぎます。これは、隣り合う2つのノートの間にピッチトランジションが検出されている場合に起こります。隣り合うノートも動かされるので、ノートの連続性が分断されることなく、フレーズが維持されます。

この動作が希望でない場合、分割タイプツールを使用して「ソフト」なノート分割を「ハード」な分割に変更できます。2つのノートの間に分割線の代わりに括弧が表示され、ノートがつながっていないことが示されます。分割タイプツールは、ツールバーのノート分割ツールの下にあります。



ノート分割を編集する

マウスポインタをノートの上半分(水平線より上)に合わせると、メインツールがノート分割ツールに変化します。ダブルクリックすると、ノート分割が挿入され、ノートが2つに分けられます。



分割すると、分割されたそれぞれのノートの音高が変化することがあります。これは、分割後にノートのピッチセンターが再計算され、結果として、分割されたノートそれぞれのピッチセンターが1つのノートだったときのピッチセンターと異なることがあるためです。このような場合、新たに計算されたピッチセンターに従って、それぞれのノートが新しい音高位置に移動します。

ノート分割ツールでノート分割を水平方向にドラッグすると、既存のノート分割を動かすことができます。まず、[オプション] > [ノートエディタオプション]を選択し、[ノート分割を表示]を選択します。

ノート分割をダブルクリックすると、ノート分割を削除することができます。

複数のノートを選択してノート分割を移動させると、他の選択されたノートのノート分割も移動します。ノート分割のいずれかをダブルクリックして削除すると、他の選択されているノートも削除されます。

重なりあう複数のノートが選択されている場合、それらの全ての同じ場所にノート分割を同時に挿入したり、移動または削除することができます。

ピッチツール

ピッチツールでは各ノートのピッチセンターを編集できます。ピッチセンターは、Melodyneのメインツールを使用しても編集できます。

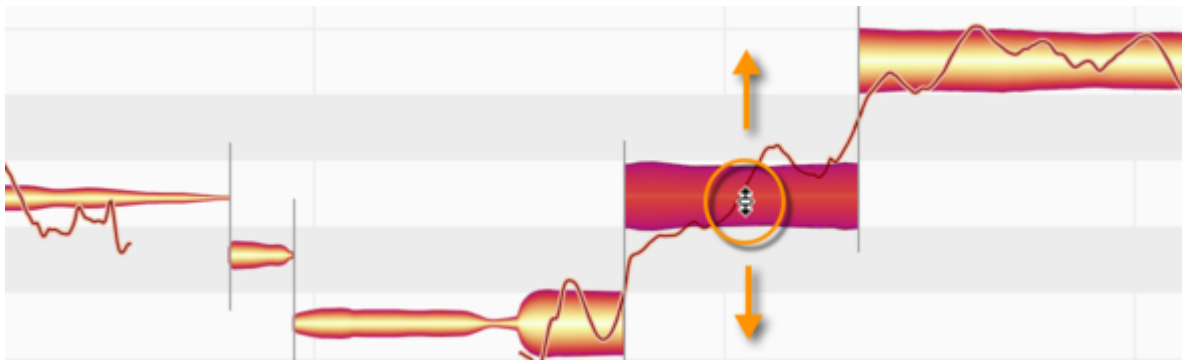
ピッチセンターをシフトさせる

ノートエディターのツールボックスまたはコンテキストメニューから、またはコンピューターキーボードのF2キーを押してピッチツールを選択します。(このツールに別のショートカットを割り当てたい場合、メインメニューの[Melodyne]>[環境設定]>[ショートカット]>[編集ツール]を選択して行えます。)

ピッチツールは、3つのピッチ編集ツールの一番上にあります。これで各ノートのピッチセンター(重心)が決まります。Melodyneでは、ノートのピッチセンターを、ノートのピッチモジュレーションやドリフトから独立して編集できます。F2キーをすばやく2回または3回連続して押すと、ピッチツールの1番目または2番目のサブツールを選択できます。[環境設定]ダイアログでは、希望に応じて、3つ全てのツールに対して別のキーボードショートカットを定義することもできます。



ノートのピッチを変更するには、ピッチツールでノートを上下にドラッグします。ノートが複数選択されている場合、選択されているすべてのノートをまとめて上下に移動することができます。



どのオプションが選択されているかによって、ノートの移動動作が変化します。[スナップなし]だとスナップされず、[半音スナップ]または[音階スナップ]だとそれぞれ半音または選択した音階の音名にスナップされます。

Altキーを押したまま操作すると、選択されているグリッドが無視されます。こうすることで、ノートを自由に移動させることができます。

ピッチシフトをモニターする

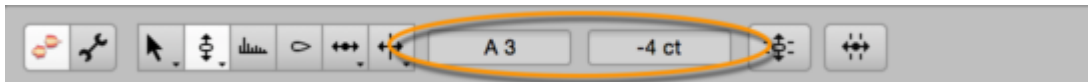
ノートを別の音高に動かすと、ノートをクリックした位置のサウンドが新しい音高で再生されます。この際、マウスを左右に動かすと、ノートの他の部分にフォーカスを移すことができます。この方法でピッチ変更をモニターしたくない場合、[オプション]>[ノートエディター]サブメニューの[blob編集時にモニター]オプションのチェックマークを外します。このオプションには、ノートエディターの右上隅の歯車アイコンからもアクセスできます。

あるノートを移動させる際、操作しているノートだけでなく、このノートに関連するサウンド(和音など)も聞こえると便利です。これを行うには、ノートを動かし始めてからCommandキーを押し、そのまま押し続けます。これで、その位置にある和音内のノートすべてが鳴り続けます。

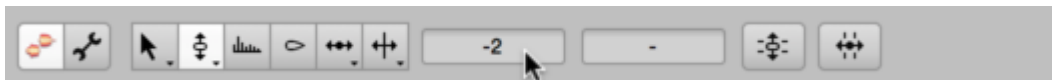
インスペクタでピッチを編集する

ピッチツールを使って行うほかにも、ノートを選択してからツールバー近くのインスペクタまたはノートインスペクタにセント単位で差異を入力して編集することもできます。ノートインスペクタでは、選択されている1つまたは複数のノートの周波数をヘルツ単位で指定することもできます。どちらの場合も、関連するボックスをクリックして矢印を上下にドラッグすることで現在の値を増減できます。

ピッチフィールドに入力する場合、絶対値(C3、D4など)または相対値(+2、-1など)のいずれかを入力することができます。

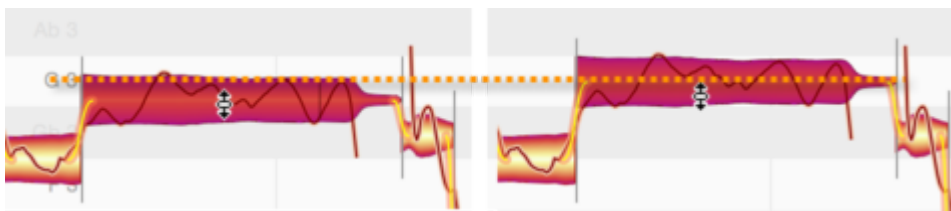


さまざまな音高の複数のノートを選択した場合、3本のハイフンがボックス内に表示されます。ボックス内をドラッグすると、相対的な変化値が表示されます。



ダブルクリックでピッチを補正する

ノートエディターのノート表示を見て、水平ストライプの中心にノートがない場合、ノートが少しシャープまたはフラットになっていることを示しています。ピッチツールでこのようなノートをダブルクリックすると、クリックされたノートがグリッドにスナップし、最も音高に近い水平ストライプ(半音)のちょうど中央に配置されます。



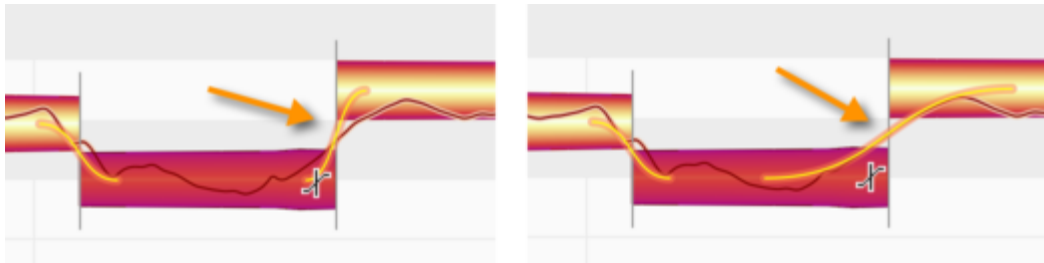
ノートの音高にはわずかな揺れがあることがほとんどです。そのため、ノートの位置はMelodyne editorが計算した平均音高に基づいています。この値をMelodyneでは「ピッチセンター」と呼んでいます。この値はピッチク

オンタイズの基準となります。音高に揺れがあるときは、クオンタイズを実行し最も近い半音にスナップしても、新しい音高でサウンドが「正しく」聞こえるとは限りません。「正確な音高」とは絶対的なものではなく、音楽の内容に常に左右されるものだからです。

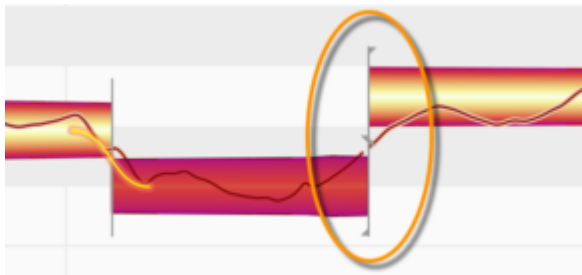
ピッチトランジション

あるノートが別のノートと関連しており、その関連性が検出されている場合、この2つのノートの内部にはピッチカーブが表示され、2つのノートの間にはピッチの推移(トランジション)を示す太いオレンジ色のラインが表示されます。

ピッチツールをこのうちのいずれかのノートの先頭部分に合わせて垂直方向にドラッグすると、ピッチトランジションの度合いを変化させることができます。



ピッチのトランジションは、連続するノート間にソフトなノート分割がある場合にのみ存在します。分割タイプツール(ノート分割ツールのサブツール)でソフトな分割をクリックすると、ハードな分割に変化し、2つのノート間の関連性がすべて分断されます。



特定の編集をリセットしランダムなずれを追加する

[編集]>[特定の編集をリセット]>[ピッチ]メニューでは、さまざまな種類のピッチ編集を元に戻すコマンドを選択することができます。コマンドを選択すると、選択されているノートの特定の編集を元の状態に戻すことができます。これらのコマンドは、選択されているノートに適用されている編集の種類がコマンドの対象に該当しない編集である場合、灰色表示されます。また、これらのコマンドは通常の[取り消す]コマンドとは無関係に動作します。

[編集]>[ランダムなずれを加える]では、現在選択されているノートのピッチをランダムに変更し、元のイントネーションに対して小程度、中程度、高程度のずれを加えることができます。コマンドを繰り返して複数回使用し、エフェクトの効果を強調することもできます。これらのコマンドは、たとえばトラックを重ねてより「厚みのあ

る」サウンドを作成する場合に便利です。ランダムなずれを追加し、コピーとオリジナルを異なったものにする
ことで、2名の奏者がユニゾンで演奏または歌っている様子をよりリアルにシミュレートすることができます。こ
れらのコマンドは、選択されているノートにのみ影響するため、選択されているノートがない場合は灰色表示に
なります。

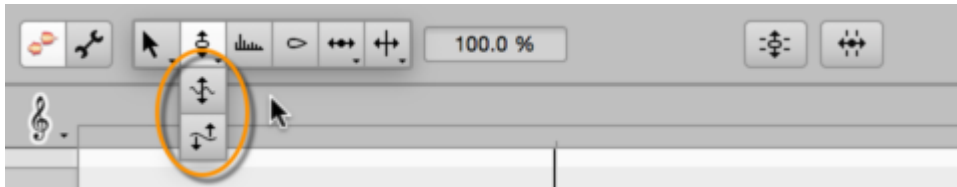
ピッチモジュレーションとピッチドリフト

「ピッチモジュレーション」とは、トリルやビブラートなど、効果を意図して演奏された急な音高の揺れのことをいいます。「ピッチドリフト」とは、演奏技術が未熟な場合に生じがちな、意図せず起こる音高のゆっくりとしたうねりのことをいいます。これらのパラメーターを編集するためのツールは、ツールバーのピッチツールの下にあります。

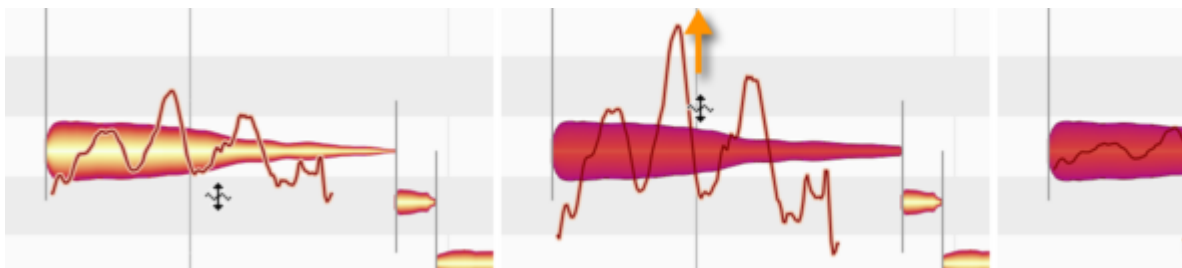
ピッチモジュレーションとピッチドリフトを編集する

ノートエディターのツールボックスまたはコンテキストメニューから、またはコンピューターキーボードのF2キーを押してピッチモジュレーションツールまたはピッチドリフトツールを選択します。

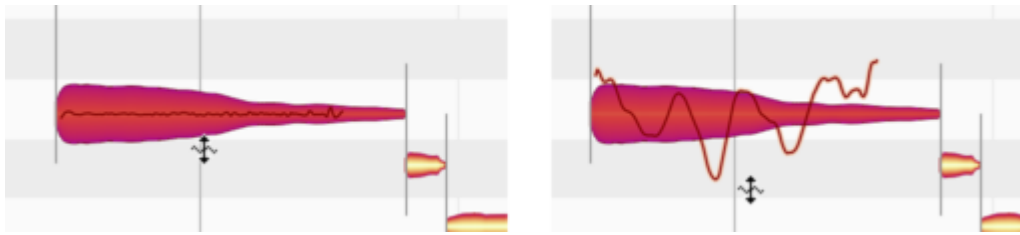
ピッチツールの1番目のサブツールがピッチモジュレーションツール、2番目のサブツールのがピッチドリフトツールです。それぞれを選択するには、F2キーをすばやく2回(ピッチモジュレーション)または3回(ピッチドリフト)連続して押します。(このツールに別のショートカットを割り当てたい場合、メインメニューの[Melodyne]>[環境設定]>[ショートカット]>[編集ツール]を選択して行えます。)ここでは、希望に応じて、3つ全てのツールに対して別のキーボードショートカットを定義することもできます。



ツールを選択したら、ノートをクリックし、マウスボタンを押したまま上下にドラッグします。複数のノートを選択して編集することもできます。その場合、選択されているノートすべてが同時に編集されます。ピッチカーブがどのように変化するかを確認しましょう。



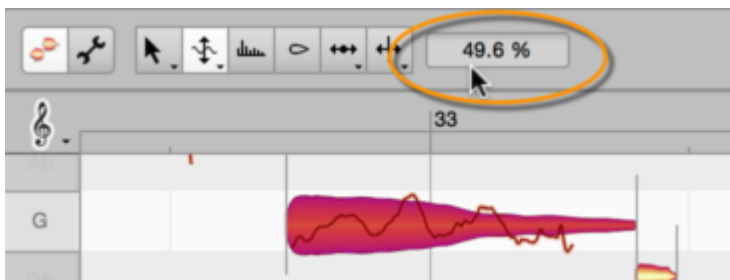
下方向にドラッグすると、モジュレーションまたはドリフトがゼロに到達し、その後反転します。



ピッチモジュレーションツールまたはピッチドリフトツールでノートをクリックすると、モジュレーション/ドリフトあり(変更前)とモジュレーション/ドリフトなし(変更後)の間で切り替わります。ダブルクリックを繰り返すことで、ありなしを切り替えることができます。モジュレーションとドリフトの両方を取り除くと、フラットでモトーンなボコーダサウンドが得られます。

ピッチモジュレーションとピッチドリフト用のインスペクタ

上記のツールを使って選択されているノートを編集するほかにも、ツールバー近くのインスペクタまたはノートインスペクタに値を入力して編集することもできます。既存の値をドラッグするか、インスペクタをダブルクリックしてから希望の値をタイプ入力します。



ピッチモジュレーションツールまたはピッチドリフトツールが選択されている場合、インスペクタに各ツールの値がパーセンテージ単位で表示されます。100%の場合は元のモジュレーションまたはドリフト、0%の場合はピッチカーブが平坦になった状態、-100%の場合はピッチカーブが反転した状態を示しています。さまざまな値の複数のノートを選択した場合、ダッシュがボックス内に表示されます。ボックス内をドラッグすると、相対的な変化値が表示されます。

[リセット]コマンド

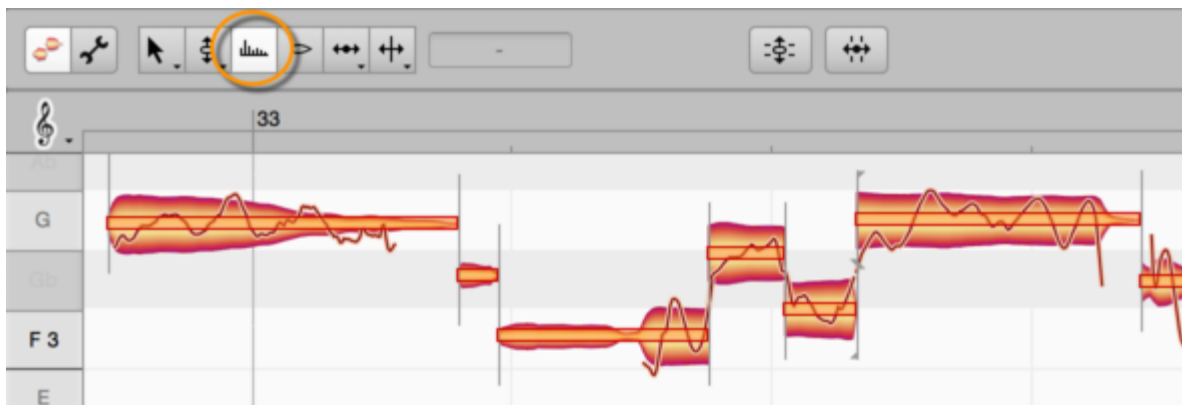
[編集]>[個別の編集をリセット]>[ピッチ]メニューでは、さまざまな種類のピッチ編集を元に戻すコマンドを選択することができます。コマンドを選択すると、選択されているノートの特定の編集を元の状態に戻すことができます。これらのコマンドは、選択されているノートに適用されている編集の種類がコマンドの対象に該当しない編集である場合、灰色表示されます。これらのコマンドは通常の[取り消す]コマンドとは無関係に動作します。

フォルマントツール

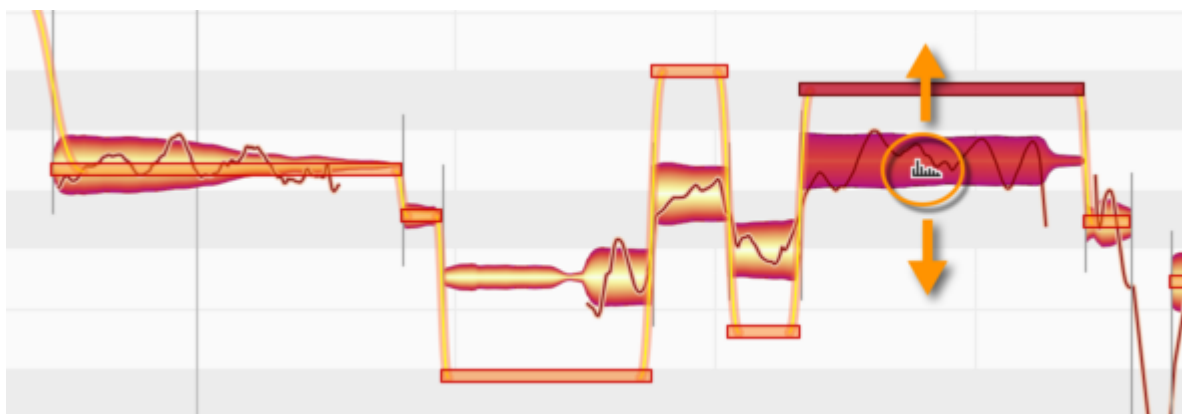
フォルマントとは、あるサウンドの周波数スペクトルのうち、基音の音高に関係なく常に同じ周波数帯に現れるピークのことをいいます。フォルマントによって、それぞれのサウンドの音色は特徴付けられています。フォルマントをシフトさせる(ずらす)ことにより、男性の声を女性の声に変化させるなどの面白い効果を得ることができます。

フォルマントをシフトさせる

ノートエディターのツールボックスまたはコンテキストメニューから、またはコンピューターキーボードのF3キーを押してフォルマントツールを選択します。(このツールに別のショートカットを割り当てたい場合、メインメニューの[Melodyne]>[環境設定]>[ショートカット]>[編集ツール]を選択して行えます。)blob上に、フォルマントが元のピッチからトランスポートされる範囲を示す線が表示されます。



ツールを選択したら、ノートをクリックし、マウスボタンを押したまま上下にドラッグします。動作に合わせて、フォルマントが上下にトランスポートします。度と方向は対応する線の上下の移動により示されます。

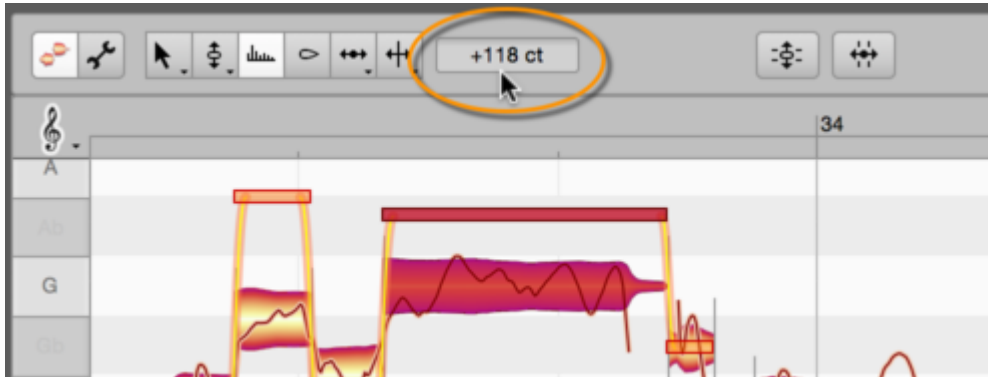


線はセント(100セント=1半音)間隔で示され、その単位でフォルマントが上下にトランスポートされます。数セントだけシフトして微妙なニュアンスを与えたり、数千セントもシフトさせてサウンドを大きく変性させることがで

きます。ノートのフォルマント(および、その他に選択しているノートがある場合はそれらのフォルマント)を元のピッチにリセットするには、フォルマントツールでノートをダブルクリックします。

フォルマントのインスペクタ

上記のツールを使って行うほかにも、ノートを選択してからツールバーまたはノートインスペクタに値を入力して編集することもできます。既存の値をドラッグするか、インスペクタをダブルクリックしてから希望の値をタイプ入力します。

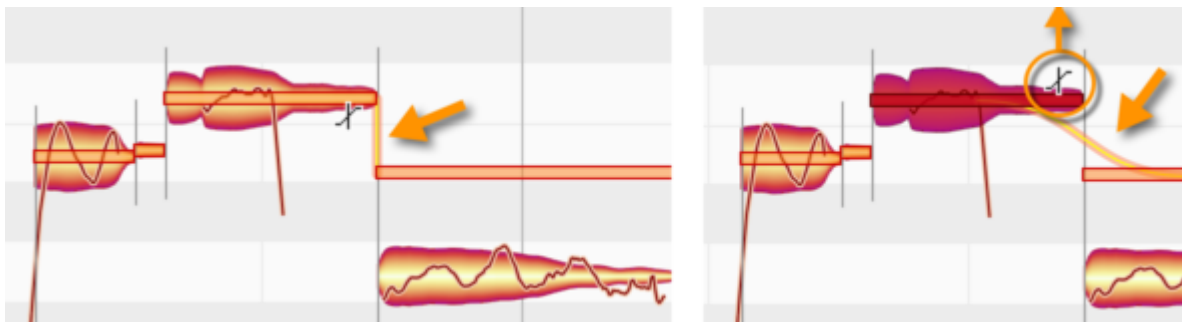


さまざまな値でフォルマントシフトされている複数のノートを選択した場合、ダッシュがボックス内に表示されます。ボックス内をドラッグすると、相対的な変化値が表示されます。

フォルマントトランジション

隣り合うノートのいずれかのノートのフォルマントをシフトすると、ノートのフォルマントビームの間に太いオレンジ色のラインが表示されます。このラインは、2つのノート間のフォルマントの推移を示しています。

1つ目のノートの終端にフォルマントツールを移動すると、フォルマントトランジションツールが表示されます。このツールを垂直方向にドラッグし、フォルマントの推移のスピードをコントロールすることができます。スピードは、ノート間を結ぶラインの角度が急であるほど速くなります。



フォルマントのトランジションは、連続するノート間にソフトな分割がある場合にのみ存在します。ノート分割タイプツール(ノート分割ツールのサブツール)をダブルクリックしてハードなノート分割に変化させると、ノート間の関連性はすべて分断され、ノート間のフォルマントのトランジションは無効になります。

[リセット]コマンド

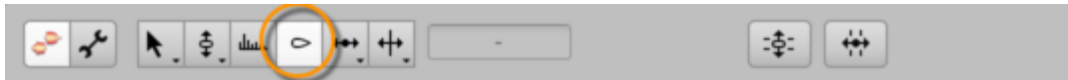
[編集]>[個別の編集をリセット]>[フォルマント]メニューでは、フォルマントトランジションやフォルマントシフトの編集を元に戻すコマンドを選択することができます。コマンドを選択すると、選択されているノートの特定の編集を元の状態に戻すことができます。これらのコマンドは、選択されているノートに適用されている編集の種類がコマンドの対象に該当しない編集である場合、灰色表示されます。これらのコマンドは通常の[取り消す]コマンドとは無関係に動作します。

音量ツール

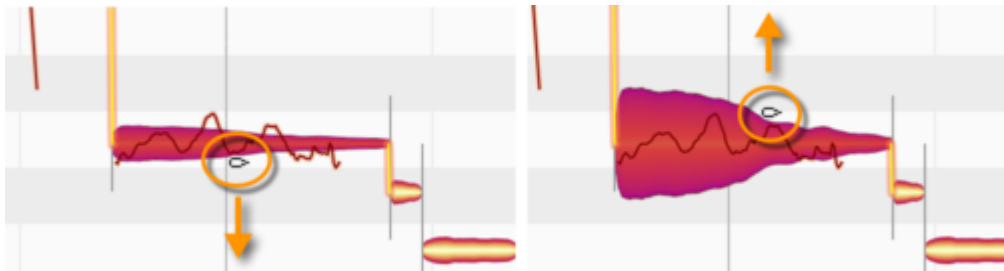
音量ツールでは、選択されているノートの音量を調整し、ノート間の音量トランジションを編集し、ノートミュートできます。

音量を編集する

ノートエディターのツールボックスまたはコンテキストメニューから、またはコンピューターキーボードのF4キーを押して音量ツールを選択します。(このツールに別のショートカットを割り当てたい場合、メインメニューの[Melodyne]>[環境設定]>[ショートカット]>[編集ツール]を選択して行えます。)



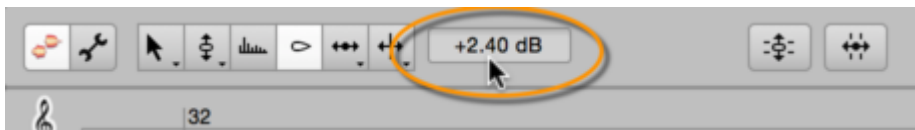
ツールを選択したら、ノート(または複数選択されているノートのいずれか)をクリックして上下にドラッグします。Blobが太くなるとノートの音量が大きくなり、細くなると音量が小さくなります。



音量調整の度合いは、垂直方向のズームレベルにより異なります。Altキーを押したまま操作すると、微調整が行えます。

インスペクタを使用して音量を編集する

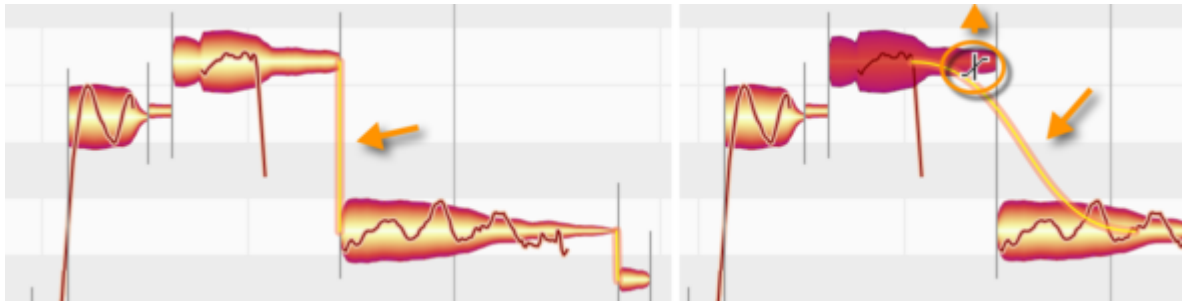
音量ツールを使って行うほかにも、ノートを選択してからツールバー右のインスペクタまたはノートインスペクタに値を入力して編集することもできます。既存の値をドラッグするか、インスペクタをダブルクリックしてから希望の値をタイプ入力します。Altキーを押したまま操作すると、微調整が行えます。



さまざまな音量の複数のノートを選択した場合、ダッシュがボックス内に表示されます。ボックス内をドラッグすると、相対的な変化値が表示されます。

音量トランジション

つながっているノートのいずれかのノートの音量を変更すると、ノートとノートの間に太いオレンジ色のラインが表示されます。このラインは、2つのノート間の音量の推移を示しています。1つ目のノートの終端に音量ツールを移動すると、音量トランジションツールが表示されます。このツールを垂直方向にドラッグし、音量の推移のスピードをコントロールすることができます。スピードは、ノート間を結ぶラインの角度が急であるほど速くなります。



音量のトランジションは、連続するノート間にソフトな分割がある場合にのみ存在します。分割タイプツール（ツールバーのノート分割ツールの下にあります）で分割をダブルクリックすると、ソフトなノート分割がハードな分割に変化し、2つのノート間のつながりがとぎれ、音量のトランジションが無効になります。

ノートをミュートする

1つまたは複数の選択されているノートを音量ツールでダブルクリックすると、ノートがミュートされます。ミュートされたノートは、blobのアウトラインだけが表示されます。ミュート中も、これらのノートを選択して編集することができます。もう一度ダブルクリックすると、ノートのミュートが解除されます。



ノートインスペクターには、「ノートオフ」と記されたこの機能に対するボタンがあります。このボタンを1回クリックすると選択されているノートがミュートします。もう1回クリックするとミュートが解除されます。

[リセット]コマンド

[編集]>[個別の編集をリセット]>[音量]メニューでは、さまざまな種類の音量編集を元に戻すコマンドを選択することができます。コマンドを選択すると、選択されているノートの編集を元の状態に戻すことができます。

[ミュートを解除]を選択すると、ミュートが解除されます。これらのコマンドは、選択されているノートに適用されている編集の種類がコマンドの対象に該当しない編集である場合、灰色表示されます。これらのコマンドは通常の[取り消す]コマンドとは無関係に動作します。

タイムツール

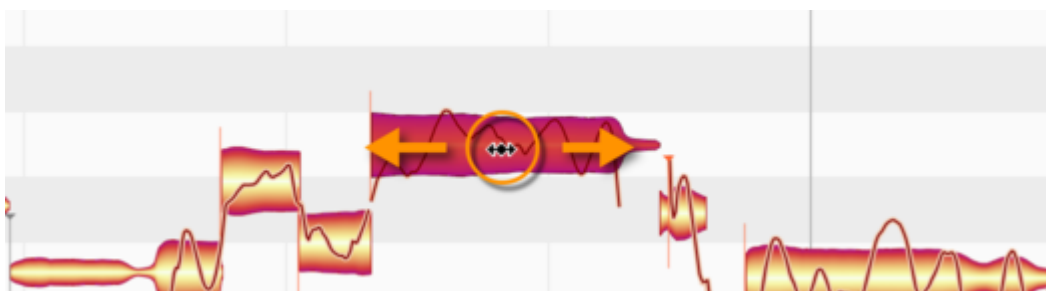
タイムツールでは、クオンタイズの有無にかかわらずノートの水平位置と長さを編集できます。

ノートの位置と長さを変更する

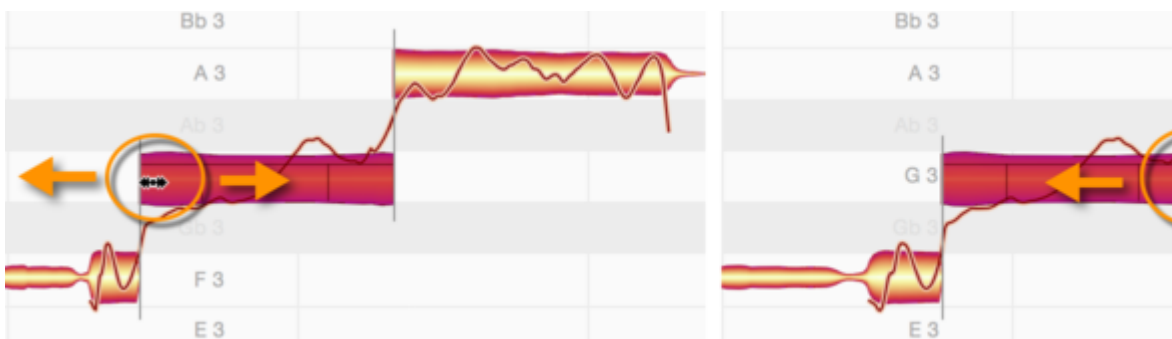
ノートエディターのツールボックスまたはコンテキストメニューから、またはコンピューターキーボードのF5キーを押してタイムツールを選択します。F5キーをすばやく2回または3回連続して押すと、タイムツールの1番目または2番目のサブツールを選択できます。(このツールに別のショートカットを割り当てたい場合、メインメニューの[Melodyne]>[環境設定]>[ショートカット]>[編集ツール]を選択して行えます。)ここでは、希望に応じて、3つ全てのツールに対して別のキーボードショートカットを定義することもできます。



ノート(または選択されている複数のノートのいずれか)の中央をクリックし、左右にドラッグしてノート全体(または複数のノートをもとめて)を水平に移動します。Altキーを押したまま操作すると、タイムグリッドが一時的に無視され、位置を微調整することができます。



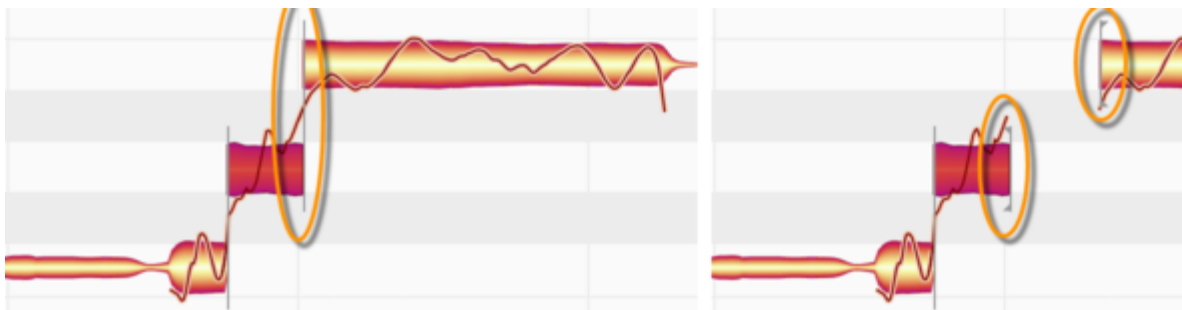
ノートの先端部分だけを動かすには、先端部分をクリックしてからドラッグします。ドラッグする方向によって、ノートはタイムストレッチ(伸び)またはタイムコンプレッションされ(縮み)ます。Altキーを押したまま操作すると、編集中、タイムグリッドが無視されます。伸縮の動作は、1つのノートが選択されていればそのノートに、複数のノートが選択されていれば複数のノートに適用されます。



同じように、1つまたは複数のblobの一番右の部分(ノートの末尾部分)だけを動かして、対応する1つまたは複数のノートを伸縮できます。

連続するノートのタイミング変更

ノートの先頭または末尾部分をこの方法で動かすと、このノートに隣り合う前後のノートも同じ分だけ伸縮します。こうして、これら2つのノートが重なり合ったり、2つのノートの間に空白部分(無音部分)が生じたりするのを防ぎます。あるノートが別のノートのすぐ後に連続しており、これらのノートの間の分割がソフトな分割である場合、これは常に当てはまります。隣り合うノートも動かされるので、ノートの連続性が分断されことなく、フレーズの音楽性が維持されます。



必要に応じて、ソフトなノート分割をハードな分割へと変更し、連続するノート間の関連性を無効にすることができます。これは、分割タイプツール(ノート分割ツールのサブツール)で分割をクリックすることで行います。

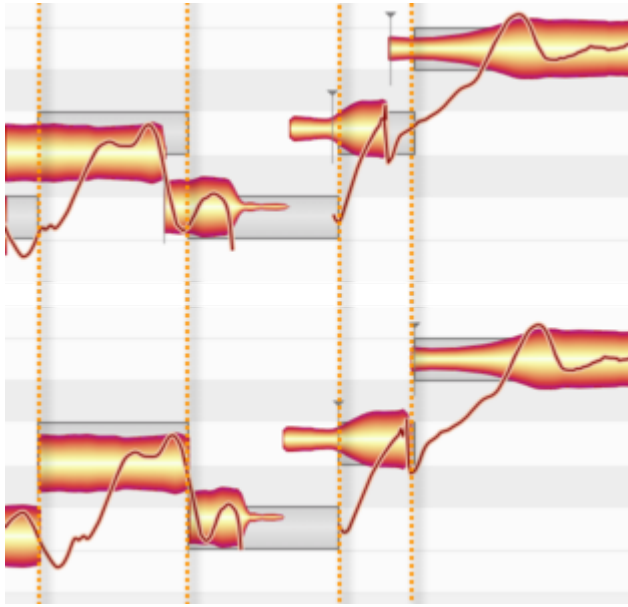
2つのノート間のすべてのつながりは、いずれかのノートをカットして、別のロケーションにペーストすることで、強制的に分断されます。

どちらの場合も、2つのノート間のノート分割線は四角形の括弧に代わり、2つのノート間のつながりがなくなったことを示します。

タイムツールを使用して2つのノートのいずれかをもう一方から十分な距離まで離すと、2つのノート間のリンクも「スナップ」します。この場合、位置を元に戻すと、もう一方のノートの位置が変わっておらず、ツールが変更されていなければ、オリジナルのリンクが復元されます。

ダブルクリックでタイミングを修正する

タイムツールを使用してノート(または選択されている複数のノートのいずれか)をダブルクリックすると、選択されているグリッド(たとえば、2つ目のルーラーの分割線のいずれか、または8分音符の先頭を示す垂直の線のいずれか)にスナップします。結果として、ノートの音楽上の先頭が最も近いグリッドラインの一番上に合わせられます。



ノートの音楽上の開始位置は、一番上の垂直線のアンカーで示されます。アンカーはblobの先頭付近にありますが、左端(ノートの「物理上の先頭」)にあるとは限りません。クオンタイズの観点から見れば、本来の音が発せられ、希望の音高に達した瞬間が重要になりますので、この位置にノートの音楽上の起点が定義されます。ただし、すべてノートに音楽上の起点があるわけではありません。ない場合、ノートの物理上の先頭がクオンタイズの基礎として使用されます。(ノートの音楽上の起点はノートアサインメントモードで編集できます。)

グリッドが有効でない場合、グリッドの「意図した」拍(拍を囲む灰色の枠の左辺)にクオンタイズされます。Melodyneの分析に従うと、この拍に合わせられます。

注: 複数の小節全体にクオンタイズすることはできません。小節の一部にクオンタイズすることしかできません。

和音では、これはクオンタイズの動作を定義する選択手順です。音が選択されており、ひとつひとつ個別にクオンタイズされる場合、上記のとおり動作し、個別にグリッドに沿ってまたはグリッドの方向に移動します。これは、たとえばギターで弾いた和音の各音(すばやく連続して弾いているため同時に聞こえる)になります。これは演奏では実現不可能ですが、音楽的には望ましい結果です。

一方、和音のすべての音が選択されており、同時にクオンタイズされる場合、各音は時間上を同じように移動します。和音の内部のタイミング(ギターの例で言えば連続する弦の音を分割する間隔)と奏法の自然さは維持されます。つまり、和音はクオンタイズ後もクオンタイズ前とまったく同じように聞こえますが、先走りや遅れが解消されます。

和音内の各音の移動の幅は、和音内の最初と最後の音のサウンドの中間に最も近いところに位置する音により決まります。6弦ギターでつま弾いた和音の場合、3番目または4番目の弦で弾いた音がこれにあたります。他の弦の音をグリッドラインに合わせたい場合、和音を手動で動かすことができます。

ランダムなずれを加える

[編集]>[ランダムなずれを加える]では、現在選択されているノートのタイミングをランダムに変更し、元のタイミングに対して小程度、中程度、高程度のずれを加えることができます。コマンドを繰り返して複数回使用し、エフェクトの効果を強調することもできます。これらのコマンドは、たとえばトラックを重ねてより「厚みのある」サウンドを作成する場合に便利です。ランダムなずれを追加し、コピーとオリジナルを異なったものにすることで、2名の奏者がユニゾンで演奏または歌っている様子をよりリアルにシミュレートすることができます。これらのコマンドは、選択されているノートにのみ影響するため、選択されているノートがない場合は灰色表示になります。

[リセット]コマンド

[編集]>[個別の編集をリセット]>[タイム]サブメニューには、タイミングに実行された編集を元に戻すのに使用できるさまざまなコマンドがあります。これらのコマンドは、選択されているノートに実行されている編集の種類がコマンドの対象に該当しない編集である場合、現在の選択対象に適用され、灰色表示されます。また、これらのリセットコマンドは通常の[取り消す]コマンドから独立して動作します。

タイムハンドルとアタックスピード

タイムハンドルツールとアタックスピードツールは、ツールバーのタイムツールの下にあります。これらのツールでは、ノート内部の時間経過とエンベロープの調整が行えます。

タイムハンドルツールとアタックスピードツールの操作

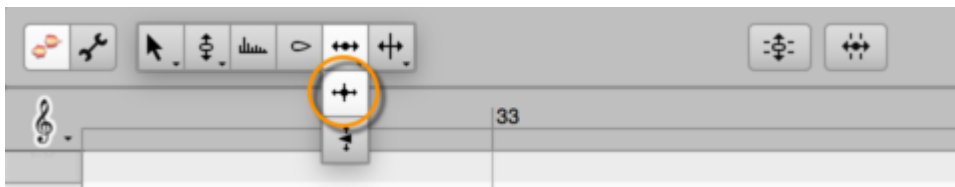
タイムハンドルとは、ノート内部の時間的変化の各段階を操作するハンドルです。左右にドラッグして、各段階の開始と終了位置を変更することができます。この操作により、ノートの時間的変化における特定の段階を早めたり遅めたりし、フレージングを微調整することができます。

アタックスピードツールも、ノートの時間的変化のスピードを操作するツールです。ノートの立ち上がり部分の長さを伸縮し、その後の変化の開始位置を変更することができます。

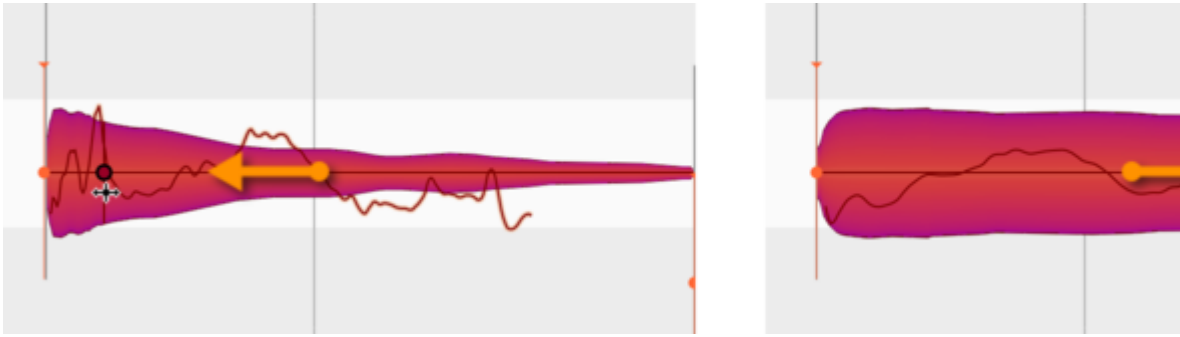
アタックを緩やかかつソフトにしたり、急かつハードにすることができます。この操作を行っても、ノートの音楽上の開始位置は変わりません。

タイムハンドルを使ってノートの時間的変化を変更する

タイムハンドルツールは、タイムツールの1番目のサブツールです。選択するには、F5キーをすばやく2回連続して押します。(このツールに別のショートカットを割り当てたい場合、メインメニューの[Melodyne]>[環境設定]>[ショートカット]>[編集ツール]を選択して行えます。)ここでは、希望に応じて、3つ全てのタイムツールに対して別のキーボードショートカットを定義することもできます。

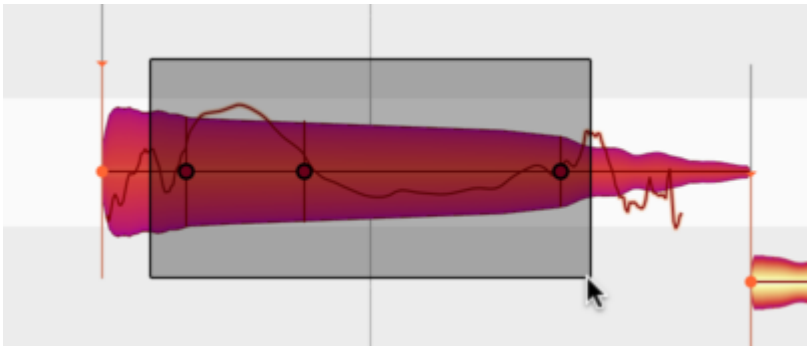


編集したいノートを拡大表示し、編集部分とタイムハンドルの位置がはっきり分かるようにします。ここで、ノートの時間的変化の各段階のうち、変更したいポイントをダブルクリックします。ツールを上下にドラッグすると、タイムハンドルが表示され、前後に移動します。ノートの全体的な長さは変更されませんので、ハンドルを大きく動かして、ノートの時間的変化の各段階の長さを伸縮することができます。



1つのノートに複数のタイムハンドルを使用することができます。それぞれのハンドルを動かし、ノートの時間的変化を微調整することができます。1つのノートに取り付けることのできるタイムハンドルの数に制限はありません。しかし、ハンドルとハンドルの間隔はMelodyneにより自動的に制限されます。取り付けたい部分にハンドルが表示されない場合、少し離して取り付けてみてください。

複数選択のテクニックを使って、複数のタイムハンドルを選択し、それらを同時に動かすこともできます。



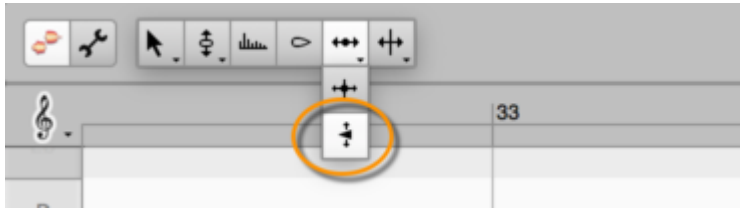
1つのタイムハンドルまたは選択されている複数のタイムハンドルをダブルクリックすると、タイムハンドルが削除され、変更が加えられていたノートの時間的変化の段階が元の状態に戻ります。

メインメニューから[特定の編集をリセット] > [タイム] > [タイムハンドルを削除]を選択すると、選択されているすべてのノートのタイムハンドルを削除することができます。

ノートのアタックスピードを変更する

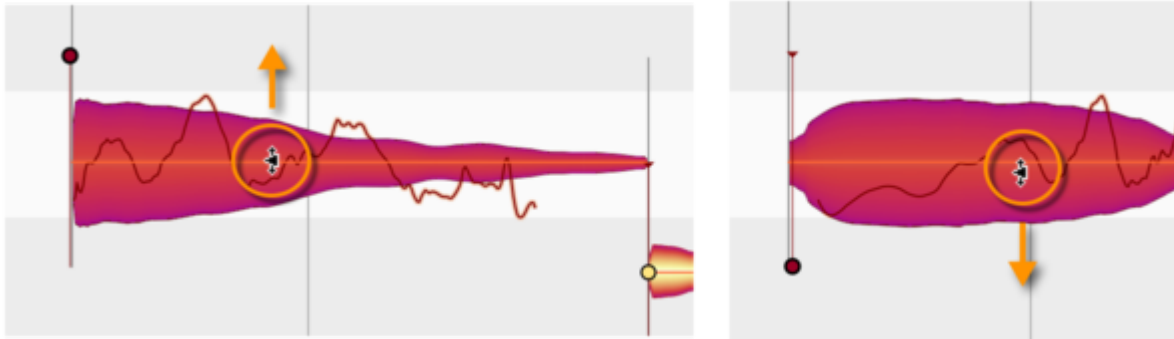
アタックスピードツールは、タイムツールのサブツールです。選択するには、F5キーをすばやく3回連続して押します。[環境設定]ダイアログでは、希望に応じて、このツールに対して別のキーボードショートカットを定義することもできます。

アルゴリズムに[ユニバーサル]が選択されている場合、このツールに機能はありません。そのため、対応するblobにハンドルが表示されず、ノートインスペクター内の[アタックスピード]フィールドが灰色で表示されます。



アタックスピードツールを選択すると、各ノートの先頭に白い点が表示されます。ここで、ツールをノート(点上でなくてもかまいません)へと動かし垂直方向にドラッグすると、この点が上下に移動します。

上に動かすと、ノートのアタック(立ち上がり)段階の長さが圧縮されスピードが上がり、ノートの他の部分のスピードが下がります。つまり、アタックがハードになり、最大音量へすばやく到達します。



下に動かすと、逆の結果となります。ノートの立ち上がり部分が伸び、ゆっくりと再生されますが、ノートの他の部分のスピードが上がります。つまり、アタックがソフトになります。アタックスピードを変更しても、オレンジ色のアンカーで表示されるノートの音楽上の開始位置は変わりませんのでご注意ください。ノートの「知覚的な」開始位置は、アタックスピードとは関係がありません。また、ノートの終了位置も影響を受けません。

ノートのアタックスピードをノートごとに変更し、アクセントを加えることができます。また、複数のノートのアタックスピードを同時に変更し、フレーズ全体の音色を変化させることもできます。

アタックスピードツールで1つのノートまたは選択されている複数のノートをダブルクリックすると、対応するパラメータが元の状態に戻ります。メインメニューから[特定の編集をリセット] > [タイム] > [アタックスピードをリセット]を選択してもかまいません。

タイムハンドルをアタックスピードツールと組み合わせる

タイムハンドルとアタックスピードツールは、組み合わせて使用することができます。この場合、アタックスピードを変更すると、タイムハンドルが移動し、一種のタイミングマスターとして機能します。つまり、アタックスピードツールを使えば、全体的なタイミングを調整する(ノートの開始位置を調整する)前に、ノート自体の時間的変化を変更し、フレージングを向上させることができます。

ノート分割ツール

ノート分割ツールでは、ノートをカットしたり、ノート分割を削除および移動したりできます。分割タイプツールでは、ハード分割とソフト分割の間で切り替えることができます。

ノート分割を挿入・移動・削除する

ノートエディターのツールボックスまたはコンテキストメニューから、またはコンピューターキーボードのF6キーを押してノート分割ツールを選択します。（このツールに別のショートカットを割り当てたい場合、メインメニューの[Melodyne]>[環境設定]>[ショートカット]>[編集ツール]を選択して行えます。）



ノート分割ツールでノート内をダブルクリックすると、ノート分割が挿入され、ノートが2つに分けられます。



分割すると、分割されたそれぞれのノートの音高が変化することがあります。これは、分割後にノートのピッチセンターが再計算され、結果として、分割されたノートそれぞれのピッチセンターが1つのノートだったときのピッチセンターと異なることがあるためです。このような場合、新たに計算されたピッチセンターに従って、それぞれのノートが新しい音高位置に移動します。

ノート分割ツールでノート分割を水平方向にドラッグすると、既存のノート分割を動かすことができます。

ノート分割をダブルクリックすると、ノート分割を削除することができます。

複数のノートが選択された状態でノート分割を編集する

複数のノートを選択してノート分割を移動させると、他の選択されたノートのノート分割も移動します。ノート分割のいずれかをダブルクリックして削除すると、他の選択されているノートのノート分割も削除されます。

重なりあう複数のノートが選択されている場合、それらの全ての同じ場所にノート分割を同時に挿入したり、移動または削除することができます。

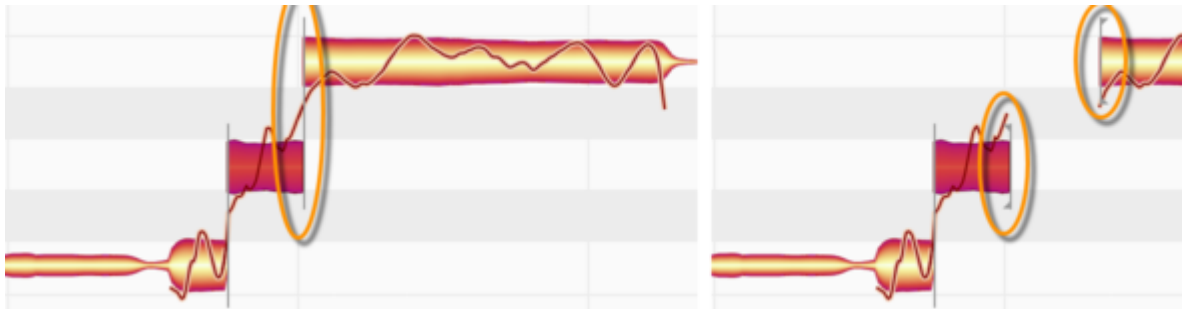
ソフトなノート分割とハードなノート分割

Melodyneでは、オーディオ素材と選択されているアルゴリズムに応じて、ノート間にソフトまたはハードな分割が設定されます。ソフト分割は連続するノート間にのみ生じ、ノート間につながりを提供します。最初のノートの末尾が移動すると、2つ目のノートがそれに従って移動し、この2つのノート間に隙間が空きません。編集時にフレー징を保つのに便利です。

ノート間につながりは、ノート間のピッチ、フォルマント、音量のトランジション(推移)にも影響します。トランジションは、ソフトな分割のある連続するノートの場合にのみあり得ます。

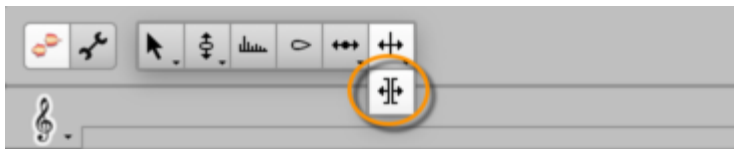
ハードな分割では、連続するノートはそれぞれ独立しています。つまり、最初のノートの長さを変更しても、2つ目のノートの位置に影響しません。また、2つのノート間のピッチ、フォルマント、音量のトランジションもありません。

ソフトな分割はノート間に薄い垂直線で、ハードな分割は括弧でそれぞれ示されます。



分割タイプツールでハード分割とソフト分割を切り替える

分割タイプツールは、ノート分割ツールのサブツールです。ハード分割とソフト分割を切り替えることができます。選択するには、F6キー(デフォルトではノート分割ツールに割り当てられている)をすばやく2回連続して押します。他のキーの組み合わせを使用したい場合、[環境設定]>[ショートカット]>[編集ツール]>[ノート分割ツール]を選択して、任意のキーを押します。希望に応じて、2つのツールのいずれかに対して別のキーボードショートカットを定義できます。



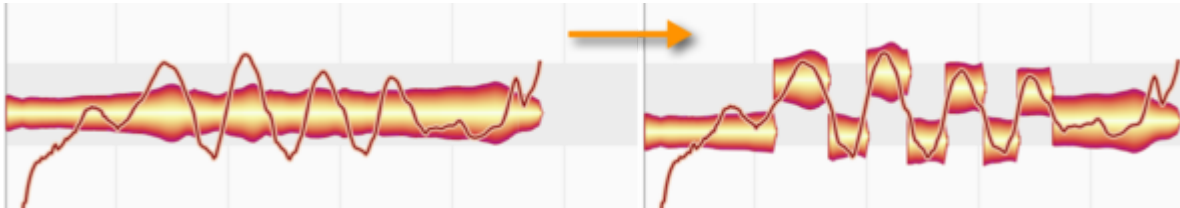
このツールで分割をダブルクリックして分割タイプを変更します。

「ソフト」と「ハード」を自由に切り替えられるのは一定の場合のみですのでご注意ください。

- ソフトな分割はいつでもハードな分割に切り替えることができます。
- 一方、ハードな分割は、それがもともとはソフトな分割であり、のちほどハードな分割へと変更されたものである場合にのみ、ソフトに変更できます。例外は「パーカッシブ」アルゴリズムを使用して検出された素材です。この場合、すべての分割はもともとハードな分割として検出されていますが、ソフトな分割に変更できます。

ノートをトリルとして分割

ノート分割ツールが選択されている場合、[ノートをトリルとして分割]コマンドがノートエディターのコンテキストメニューに表示されます。これは、選択されている1つまたは複数のノートをより各ノートの瞬間ピッチにより決定される小さなセグメントにスライスします。これは、ノート分割をピッチカーブのスロープに挿入することにより実行され、ビブラートの「山」と「谷」がそれぞれ分割されたノートとなります。



このコマンドを使用すると、たとえば、ノートを意図されるピッチにより近づけることによりトリルのイントネーションを向上させたり、上または下の範囲に[ピッチ補正マクロ]を適用することでビブラートを抑制したりできます。

ピッチカーブの揺れがあまりはっきりしない場合、[ノートをトリルとして分割]機能は効果を持ちません。また、この機能は[メロディック]アルゴリズムが有効な場合にのみ選択でき、その他の場合灰色表示になります。[ノートをトリルとして分割]コマンドにショートカットを割り当てたい場合、環境設定ダイアログを使用して行います。

ノートの分割

このコマンドは、Melodyneで指定されている位置でノートを自動分割します。ツールを使用して編集する前に歯擦音や息継ぎのノイズを分離するためにボーカルのパッセージで正確なカットを行う必要がある場合に便利です。

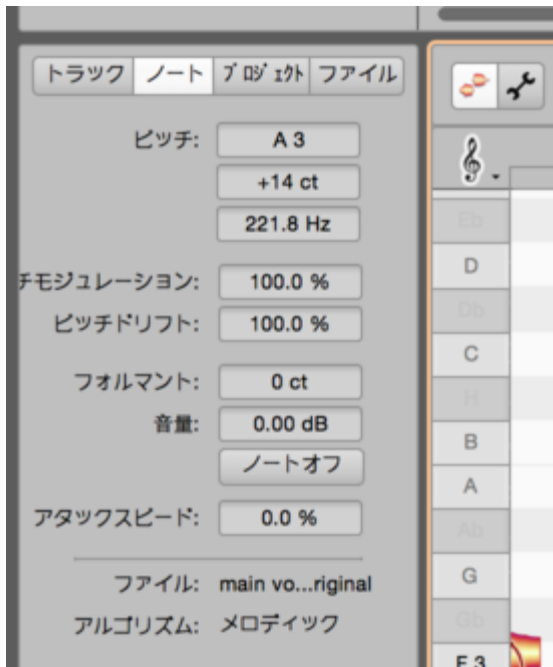
[ノートの分割]コマンドはノート分割ツールのコンテキストメニューにあります。環境設定の[ショートカット]ページでキーボードショートカットを割り当てることができます。

ノートインスペクター

情報パネルのノートインスペクターでは、選択されているノートのパラメーターの概要を確認し、値を変更できます。

ノートインスペクターのパラメーター

ノートインスペクターは、複数のツールが使用されている場合、普段ツールバー付近に表示されているインスペクターの各フィールドをまとめます。最も重要なパラメーターすべてを一度に確認でき、ツールを変更することなく編集できます。



インスペクターフィールドに含まれるデータに加えて、ノートインスペクターには、ヘルツ単位の周波数、およびノートのミュート用のボタンが表示されます。

ノートインスペクターに表示される編集可能なパラメーターは以下のとおりです(上から下)。

- 選択されているノートのピッチ(半音、セント、ヘルツ単位)
- ピッチモジュレーション(パーセンテージ単位)
- ピッチドリフト(パーセンテージ単位)
- フォルマントシフト(セント単位)
- 音量(デシベル単位)
- ノートのミュート/ミュート解除用ボタン
- アタックスピード(パーセンテージ単位)

インスペクターの下には、選択されているノートが含まれるオーディオファイルと、検出に使用されたアルゴリズムが表示されます。

値を入力する、選択されている複数のノート进行操作する

ノートエディターで1つのノートのみ選択されている場合、ノートインスペクターにはそのノートに対する具体的な値が表示されます。

原則として、すべての値は、対応するフィールドをクリックするか、マウスポインタを上下にドラッグするか、フィールドをダブルクリックして新規値を入力して変更できます。

ピッチフィールドでは、絶対値(C3、D4など)または相対値(+2、-1など)のいずれかを入力することができます。その他のフィールドでは、選択された絶対値となります。



複数のノートを選択している場合、ノートインスペクターには、選択されているノートすべてに共通の値であれば、パラメーターの具体的な値のみ表示されます。値が異なる場合、該当するフィールドにダッシュ「-」が表示されます。

ダッシュが表示されている場合、クリック&ドラッグして、すべてのノートの値を同じ量だけ変更できます。この方法で、たとえば選択対象すべてを2半音トランスポートしたりできます。

音階スナップ機能は、有効な場合、さまざまなノートの移動先をコントロールします。

複数の値をドラッグすると、Melodyneがそれらの値同士の差異を記録します。これは、パラメーターが最大値または最小値に「ぶつかった」場合にも同様です。マウスボタンを押したまま逆方向にドラッグすると、元の差異が復元されます。ぶつかったところでマウスボタンから指を離した場合にのみ、元の差異が消去されます。

また、複数のノートが選択されている場合、値を入力し、選択されているすべてのノートに適用することもできます(その場合ダッシュは消えます)。

ここでの例外はピッチで、たとえば値に「2」と入力した場合、選択されているすべてのノートは2半音分上にずれます。選択されているすべてのノートに同一のピッチを適用したい場合、「C2」といった絶対値を入力します。アルゴリズムに[パーカッシブ]または[ユニバーサル]を選択している場合、これらのアルゴリズムは相対ピッチしか認識しないため、これは効果を持ちません。

ノートをコピーする

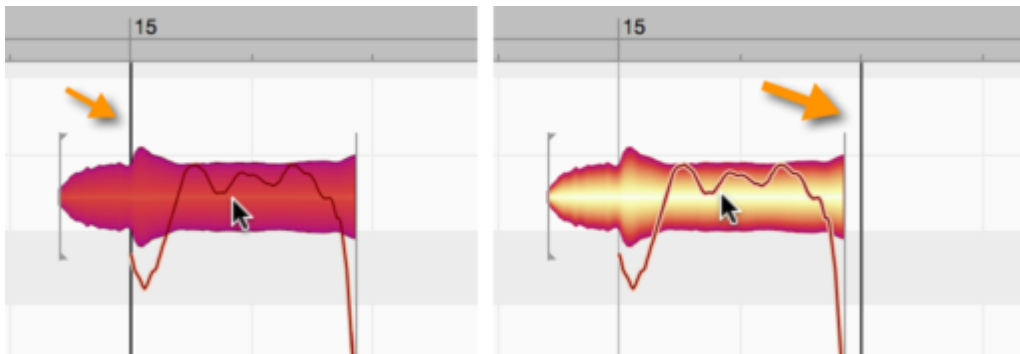
Melodyneでノートをコピーするには、希望のノートを選択してから、[編集]メニューかノートエディターのコンテキストメニューの[コピー]を選択します。これを挿入するには、[ペースト]コマンドを使用します。以下の点に注意してください。

コピー時の選択、カーソル、グリッド

[コピー]コマンドを使用してノートをクリップボードにコピーすると、カーソルが選択範囲の先頭、より正確に言うなら、選択範囲の最初の音に一番近い、タイムグリッド上の4分音符に移動します。

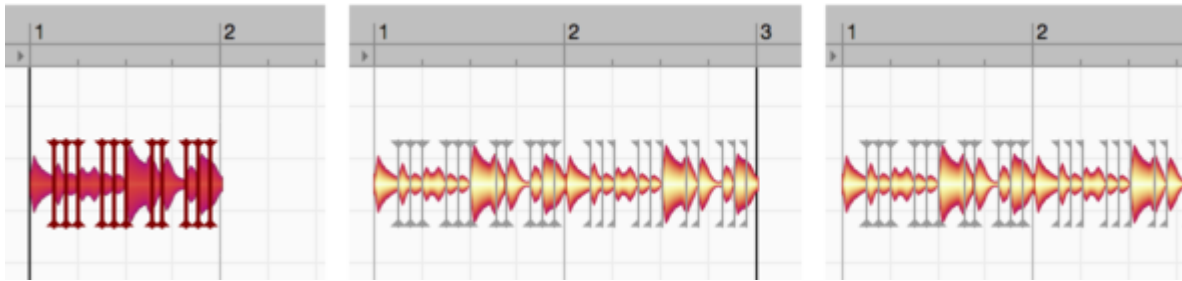
ノートが選択されたままの状態です[ペースト]コマンドを使用すると、見た目には、ペースト前に選択されていたノートの選択が解除され、カーソルが最後のノートの直後に置かれたようになります。

しかし実際は、選択されていたノートは、クリップボードにコピーされていたノードで置き換えられています。つまり、コピーによってオリジナルが置き換えられている状態です。これは特に便利に思えないかもしれませんが、カーソルの位置を見てください。最後にコピーしたノートに一番近い、タイムグリッド上の4分音符に合わせられています。



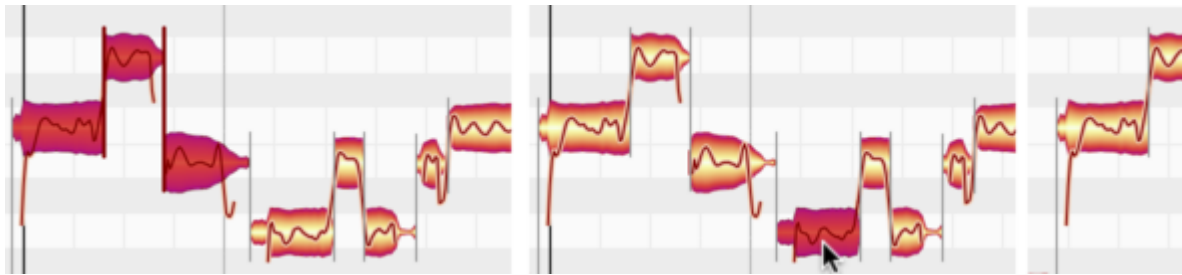
ここでさらに[ペースト]を実行すると、クリップボード上のノートがもう1回ペーストされます。今回は選択されているノートがないので、置き換えられるノートはありません。代わりに、新たにペーストされたノートは、1回目で元のノートと入れ替わったノートのすぐ後に置かれます。

ノートの位置は、カーソルで分かります。1回目のペースト以降、ペーストはタイムグリッドの4分音符(正確にはペースとしたノートの後の最初の4分音符)に合わせられるため、2回目のペーストの効果は、グリッド線に合わせられます。これにより、ドラムループの繰り返しなど、パッセージのコピーをすばやく正確に連続してペーストできるようになります。

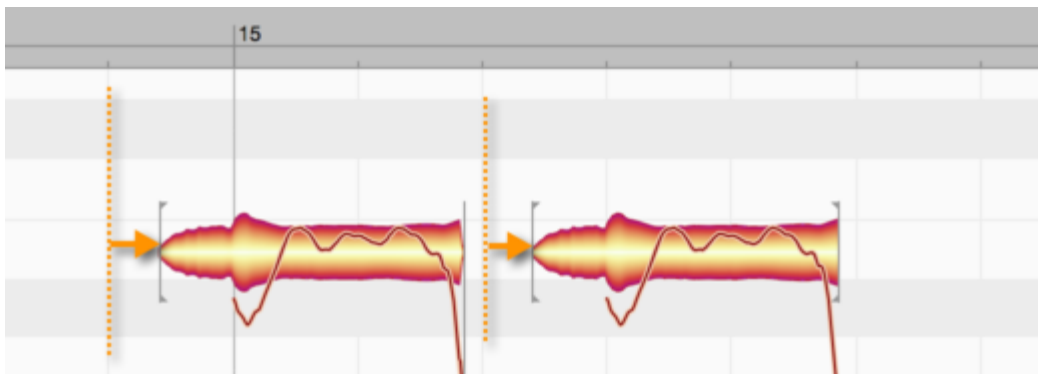


上記から以下のルールが導かれます。

[ペースト]コマンド実行時にノートが選択されている場合、これらのノートがクリップボードの内容によって置き換えられます。ペーストされたノートには、選択範囲の最初のノートの先頭から最後のノートの末尾までの範囲に正確に合致するよう、ストレッチまたはスクイーズがかかります。図をご覧ください。左はコピーされたノート、中央は選択された1つのノート(コピー先)、右はペースト実行後の結果です。選択されているコピー先のノートは置き換えられ、ペーストされたノートはスペースに合わせてスクイーズされます。



ペースト実行時に選択されているノートがない場合、カーソルによりペーストされるパッセージの開始位置が決定されます。ここではグリッド設定が重要な役割を果たします。ノートをクリップボードにコピーすると、コピーされたノートのうち最初のノートと最も近いグリッド線の間隔がMelodyneに記録されます。新しいカーソル位置でペーストを繰り返すと、ペーストされたノートのうち最初のノートと最も近いグリッド線のオフセット(ずれ)は全く同じになります。



つまり、Melodyne内のノートのコピーは、必ずしもグリッド線に合わせて実行されません。なぜなら、そのような処理を行ってしまうと、表現の機微が失われてしまうためです。代わりに、コピーされたノートはそれぞれ、グリッド線からのずれを維持します。ただし、このルールには例外があります。グリッドの単位が拍ではなく秒の場合(タイムルーラー右の[タイムグリッド設定]ドロップダウンメニューで[秒]が選択されている場合)、ノート

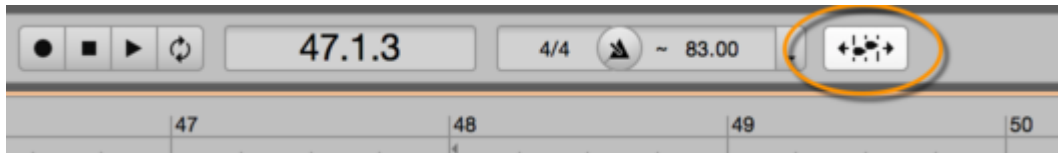
(またはコピーされた一連のノートのうち最初のノート)はちょうどカーソル位置から始まり、ずれは生じません。

- ペーストごとに、カーソルは直前のペーストの後の最初の4分音符に移動します。これにより、同じパッセージを簡単に繰り返すことができます。もちろん、必要に応じて、タイムルーラー上の別の位置にカーソルを手動で動かして、次のペーストの参照位置とすることができます。たとえば、一連のパッセージの合間にポーズを入れたい場合などに行います。

コピーされたノートのピッチは、常にオリジナルのピッチと同じになります。これは、ノートが選択されていて置き換えられる場合も、ペーストが実行される場合も変わりません。この場合、選択されているパッセージの長さは維持されますが、パッセージに含まれるノートの元のピッチは維持されません。もちろん、ペースト実行後に、ノートを任意のピッチに手動で動かすことができます。

コピー時のテンポ調整:オートストレッチスイッチ

上で見たとおり、ペースト実行時にノートが選択されている場合、挿入されるパッセージは、スペース(選択されている最初のノートの先頭から最後のノートの末尾の間)に合わせてストレッチまたはスクイーズされます。それでは、ペーストの位置をカーソル位置で指定した場合、コピーされたパッセージのテンポはどのように扱われるのでしょうか。



ペースト先のテンポがノートのコピー元であるパッセージのテンポと異なる場合、ペーストされるノートがペースト先のノートに合わせられるか、元のテンポを維持するかは、オートストレッチスイッチの状態により決まります。オートストレッチがオンの場合ノートのテンポは合わせられ、オフの場合維持されます。つまり、カーソル位置のテンポを変更したい場合以外は、ペースト実行前に自動ストレッチをオンにしておく必要があります。

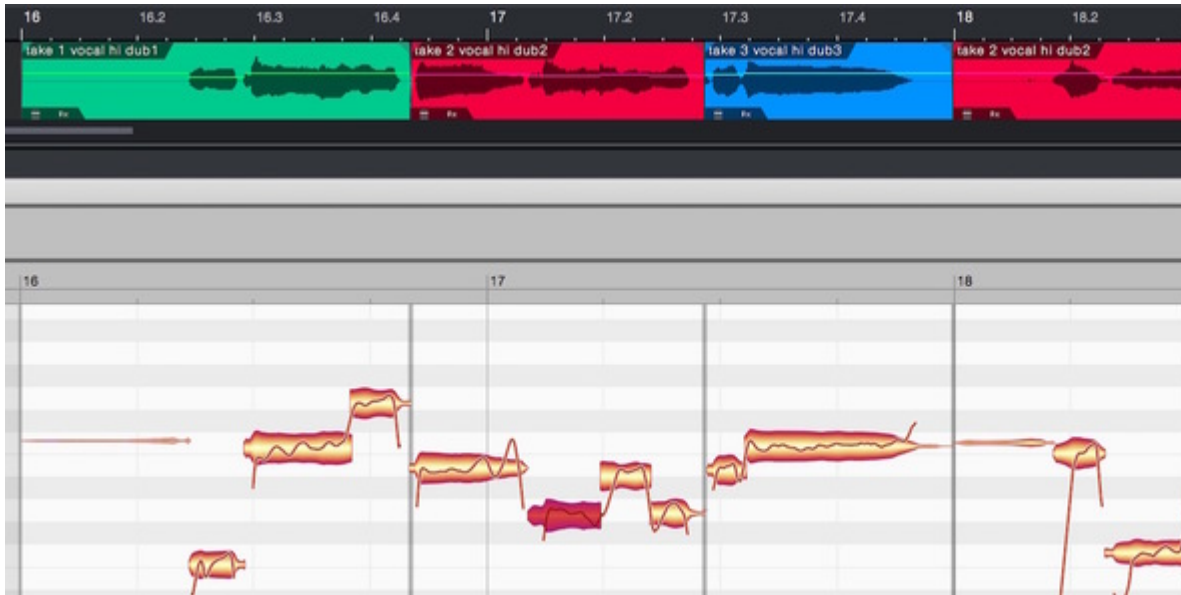
ソースのテンポがペースト先のテンポと異なり、クリップボード上の素材が新規テンポに調整されている場合、ペーストされるバージョンはオリジナルとは異なるものになります。Melodyneスタンドアロンでこれを防ぐには、ソースからペースト先にノートだけでなくテンポ(テンポ変更も含む)もコピーします。この場合、ノートまたはテンポのどちらを先にコピーするかどうかは関係ありません。

ARAとの関連におけるコピー

クリップ内では、ノートを制限なくコピー&ペーストできます。あるクリップからノートをコピーして別のクリップにペーストできるかどうかは、これら2つのクリップが同じオーディオファイルにアクセスしているかどうかによります。

たとえば、DAWでドラム録音をクリップに分割し、DAWのアレンジ内に配置して、それをMelodyneのトラック編集モードで見ているとします。この場合、ノートは、クリップ境界を気にすることなく、自由にコピー&ペーストできます(クリップがもともとひとつの長い録音物の一部であるため)。

一方、複数の異なる録音（ボーカルのテイクなど）から取得したスニペットをDAWアレンジ内にコラージュして、それをトラック編集モードで見ている場合、上記と同じ自由度でノートをコピー＆ペーストすることはできません。下のスクリーンショットで5つの各テイクに割り当てられている色は、派生元のテイクを示しています。



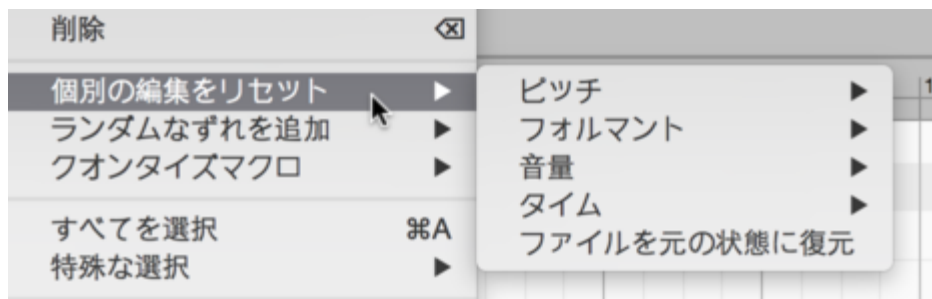
ここでは小節17の先頭で選択されているノート（および赤のクリップに由来するその他のノート）をコピーして小節16にペーストすることはできません。これは、ペースト先に異なる色（この場合緑）のクリップが含まれており、別の録音に由来するものだからです。ただし、同じ赤のテイクに由来する小節18にペーストすることは可能です。

[編集]メニュー

Melodyneの[編集]メニューには、各編集をリセットし、オーディオ素材にランダムなずれを加えることのできる項目があります。

編集をリセットする

[個別の編集をリセット]サブメニューには、さまざまな編集の効果を取り消すコマンドがあります。これらのコマンドが使用しているツールに関連するものである場合、ノートエディタのコンテキストメニューから選択できます。



コマンドは、選択されているノートに適用されている編集の種類がコマンドの対象に該当しない編集である場合、灰色表示されます。また、これらのリセットコマンドは通常の[取り消す]コマンドから独立して動作します。

以下の種類の編集の効果は、[個別の編集をリセット]サブメニューで無効にできます。

ピッチ

- ピッチの変更すべて
- ピッチセンターの編集
- ピッチモジュレーションの編集
- ピッチドリフトの編集
- ピッチトランジションの編集

フォルマント

- フォルマントの編集
- フォルマントトランジションの編集

音量

- 音量の編集
- 音量トランジションの編集
- ノートのミュート

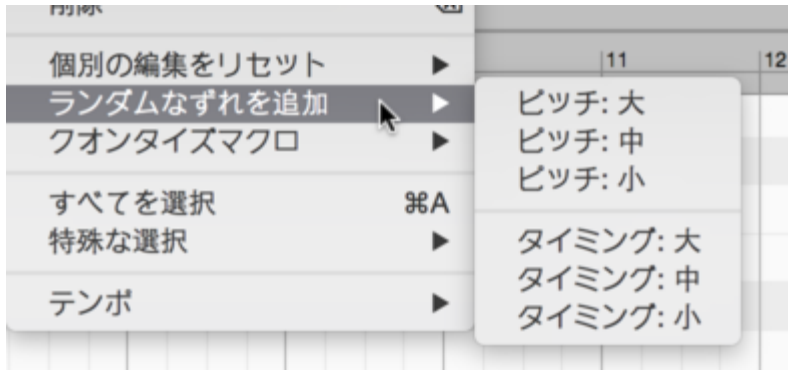
タイム

- タイミングの編集すべて(開始位置/ノート長さ)
- タイムハンドルの位置
- アタックスピードの編集

最後のコマンド[ファイルを元の状態に戻す]は、オーディオファイルになされたすべての編集(その種類に関係なく)の効果を1回で元の状態に戻します。

ランダムなずれを加える

[ランダムなずれを加える]サブメニューは、各ノートのピッチまたはタイミングをa)大幅に、b)中程度、c)繊細に、それぞれ変更します。それぞれの限度内において、ずれの方向と程度はランダムに設定されます。



これらのコマンドは、選択されているノートのピッチまたはタイミングにランダムなバリエーションを適用します。またそれらの効果は、コマンドが連続して繰り返し使用される場合、累積されます。

ランダムなずれは、ある単体のテイクの1つまたは複数のコピーを作成した際、コピーがオリジナルまたはその他のコピーと同一にならないようにしたい場合(ボーカルから合唱を作成する場合など)、特に便利です。各コピーに一定量のランダムなずれを追加することで、各ボイスが完全に同期しないようになり、2つのコピーのピッチ変動が完全に同一にならなくなるため、より自然なサウンドが得られます。

オーディオMIDI変換

このツアーでは、MelodyneでオーディオノートとMIDIノートとして保存する方法について説明します。

オーディオMIDI変換について

Melodyneでは、オーディオノートとMIDIノートとしてエクスポートし、DAWプロジェクトにインポートできます。このファイルを使用して、たとえばボーカルを2つに増やしてソフトウェアシンセのサウンドに追加したりするなどの操作が行えます。

MIDIノートは、Melodyneのオーディオノートを一対一でMIDI化したものです。各オーディオノートに対し、同じ位置、長さ、ピッチのMIDIノートが作成されます。各MIDIノートのベロシティは、オーディオノートの振幅から算出されます。

リズム素材をMIDIとして保存すると、MIDIノートはすべて同じピッチになりますが、位置、長さ、音量はリズムトラックのオーディオノートから算出されます。このテクニックを使用して、ドラムループからご使用のDAWで使用するMIDIトラックのクオンタイズ参照を生成することなどができます。

オーディオ素材からのMIDIノートの生成は、クリエイティブな可能性を数多く提供します。ぜひいろいろと試してみてください。

MIDIをエクスポートする

MIDIをMelodyneからエクスポートするには、インスタンスのリストで、MIDIとしてエクスポートしたいノートのあるすべてのインスタンスを[編集]に切り替え(ShiftまたはCommandキーを押したまま操作)、ノートエディターにノートが表示されるようにします。インスタンスのノートがノートエディターに表示されていない場合、それらのノートはエクスポートされません。

MIDIエクスポートが実行されると、すべてのインスタンスに対してMIDIファイルが作成され、各インスタンスに個別のMIDIチャンネルが割り当てられます。

エクスポートを実行するには、[設定]メニューから[MIDIとして保存]を選択します。表示されるファイル選択ボックスで、MIDIファイルの名前と保存場所を入力します。

小節1の先頭から(最初のノートが小節1になくても)、すべてのインスタンスのエクスポートが開始されます。これにより、DAWのMIDIノートがオリジナルのオーディオノートと同期します。MIDIファイルをトラックの小節1の先頭にドラッグします。

[サイクル範囲のみ]がオンの場合、サイクルゾーン内のノートのみ選択されます。これは、1フレーズや1小節といった特定の部分をMIDIとして保存したい場合に便利です。

[サイクル範囲のみ]オプションは、DAW内ではなく、Melodyne内のサイクルゾーンを指しますのでご注意ください。Melodyneのサイクルゾーンは、DAWのプレイバック停止中に設定できます。Melodyneのデフォルトのサイクルゾーンは、最初の転送の範囲となっています。デフォルトのサイクルゾーンをそれ以降の転送の範囲として適用させる場合、作成されるMIDIファイルの位置の関係で、最も近い小節に切り上げられることがあります。

MelodyneでエクスポートしたMIDIファイルには、テンポ情報も含まれています。ほとんどのDAWでは、このテンポ情報を適用するか、DAWの現在のテンポに合わせるかを選択できます。

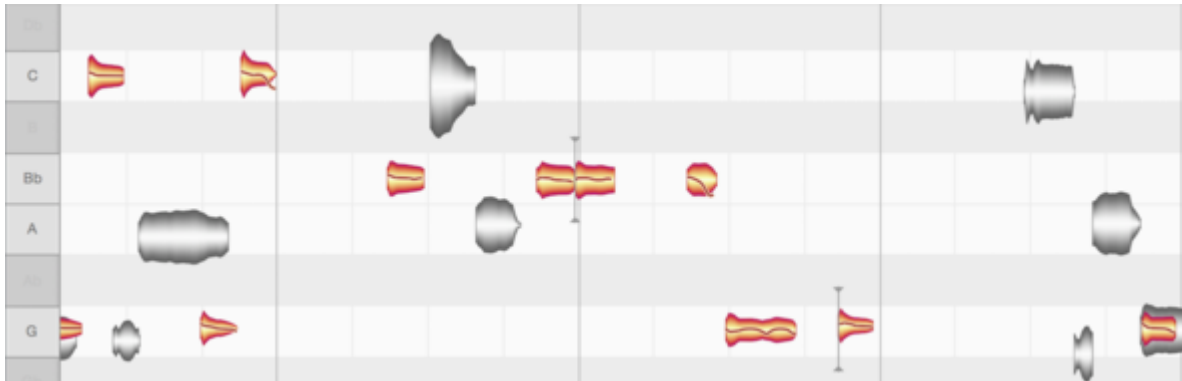
マルチトラック編集

Melodyne studioでは、スタンドアロンでもプラグインでも、複数のトラックを操作できます。トラックからトラックへ簡単に移動でき、複数のトラックにわたるノートと同時に表示および編集できます。

Melodyneのマルチトラックキング

Melodyneではオーディオファイルではなくノートを扱うため、マルチトラックキングには特別な意味があります。そのため、Melodyneのマルチトラックキングが真価を発揮するのは、ノートエディター内です。

ボーカルを含むトラックと、伴奏ギターを含むトラックがあるケースを考えてみましょう。ボーカルトラックを編集モードに切り替えると、トラックのノートがノートエディターに表示されます。ここで、ギタートラックを参照モードに切り替えると、そのノートもノートエディターに表示されます。この場合、ギターのblobは編集することも選択することもできません。これらは、単にボーカルのノートの背景に位置確認用として表示されます。これにより、メロディを追うのが非常に簡単になります。



ボーカルトラックを編集中に、ギタートラックに編集が必要な箇所を見つけた場合は？問題ありません。ギタートラックを[編集]に切り替えるか、灰色のblobをダブルクリックすれば、2つのトラックの状態を入れ替えることができます。ギターのblobが色付きで表示され編集可能となり、ボーカルのblobが灰色で背景に表示されます。

また、複数の参照トラックを扱っている場合にも、このようにしてトラックを即時に変更できます。これにより、耳だけに頼らず視覚的にもオーディオ素材を簡単に編集できます。この場合、インテリジェントモニタリングにより、編集したトラック、参照トラック、その他すべてのトラックの間のボリュームの比をコントロールできます。あるトラックの編集を中止して別のトラックに移動すると、そのたびにボリュームミックスが自動調整されます。

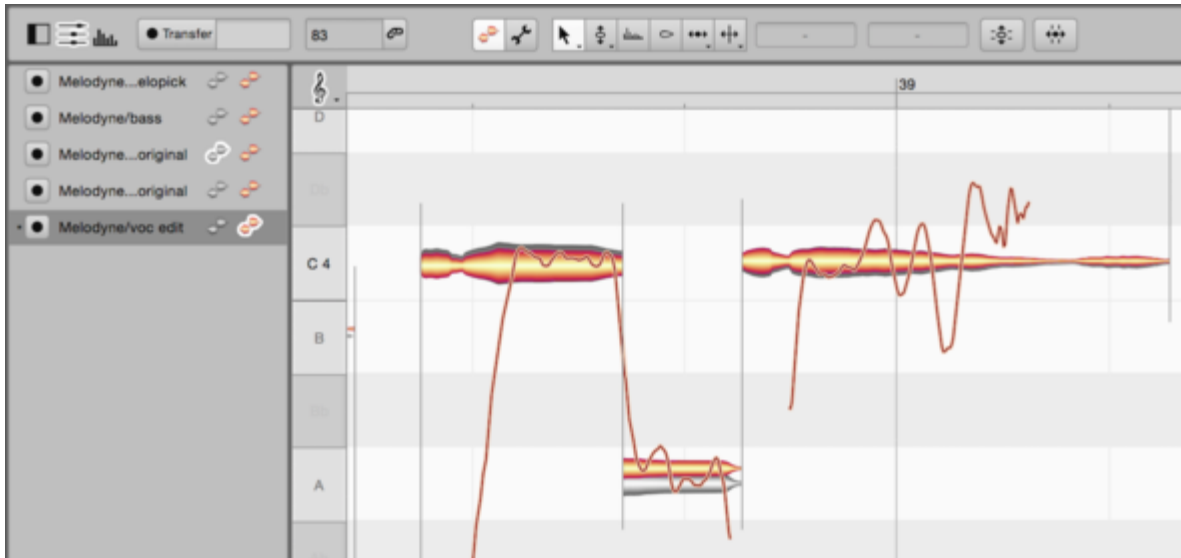
Melodyneのマルチトラックキング機能はこれだけではありません。必要に応じて、複数のトラックを同時に編集モードに切り替え、複数のトラックにわたってノートを選択、編集、削除、コピーすることができます。これは、Melodyneスタンドアロンとプラグインの両方で使用できます。

下のセクションでは、Melodyneにおけるマルチトラックングの概念について詳しく説明し、この機能を最大限に活用する方法を紹介します。

スタンドアロンとプラグインの違い

Melodyneをスタンドアロンで使用する場合、トラックは、ほとんどのDAWでの場合と同じように表示されます。トラックヘッダーのリストが左側のパネルに表示され、各トラックに属するオーディオファイルがその右に表示されます。

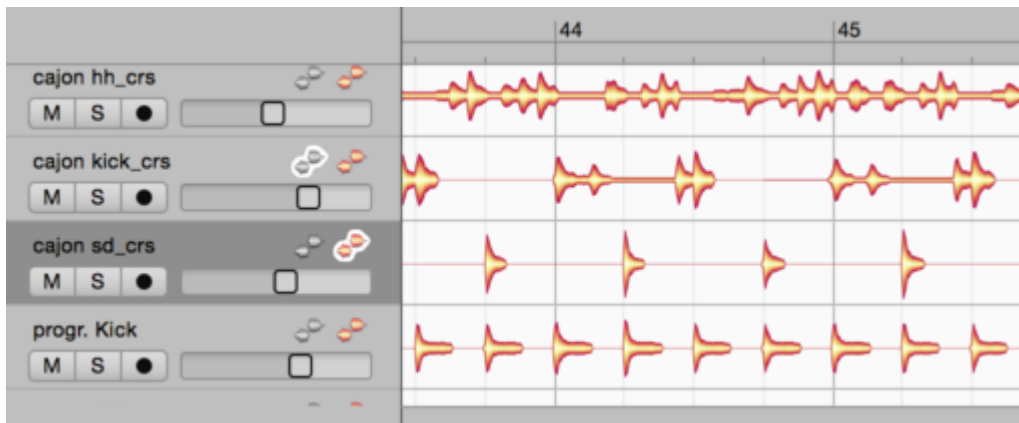
Melodyneプラグインでは、マルチトラックングはDAWとさまざまなMelodyneインスタンス間のコラボレーションとして実現されます。この場合も、ヘッダーのリストが左に表示されます。ここに、開いているMelodyneプラグインインスタンス、および、現在のプロジェクトのトラックにインサートされているその他すべてが表示されます。この背景にあるのは、操作できるのは常に_ひとつの_Melodyneプラグインウィンドウのみですが、_すべての_インスタンスの内容を確認し編集することができる点です。



プラグインでは、オーディオ素材を含むトラックパネルはありません。これは、オーディオ素材はDAWのトラックにすでに存在しているためです。そのため、表示されているのはインスタンスのリストとノートエディターだけです。

トラックヘッダー

スタンドアロン: 各トラックヘッダーには、トラック名とボリュームフェーダー、ミュート、ソロ、録音準備の各ボタンが表示されます。ソロ機能は、最後にソロボタンをクリックしたトラックでのみ有効です。複数のトラックをソロにするには、Commandキーを押したまま操作します。トラック名は、[トラック]メニュー、トラックヘッダーパネルのコンテキストメニュー、トラックインスペクター(次のセクションで説明しています)のいずれかから変更できます。



トラックヘッダーの色付きのblobアイコンは編集ボタンで、このボタンを押すとノートがノートエディターに表示されます。トラックパネルでトラックの内容をダブルクリックしても同じ効果が得られます。この編集ボタンをクリックするか、別のトラックのトラックリージョン内をダブルクリックすると、そのノートがノートエディター内の最初のトラックのノートと入れ替わります。

ここで、Commandキーを押したまま別のトラックの編集ボタンをクリックすると、このトラックのノートも色付きblobとしてノートエディターに表示されます。必要に応じて、両方のトラックのノートと一緒に選択して編集できます。同様に進めて、その他のトラックの内容をノートエディターに追加します。すでに有効になっている編集ボタンをクリックすると、対応するトラックの内容がノートエディターから削除されます。

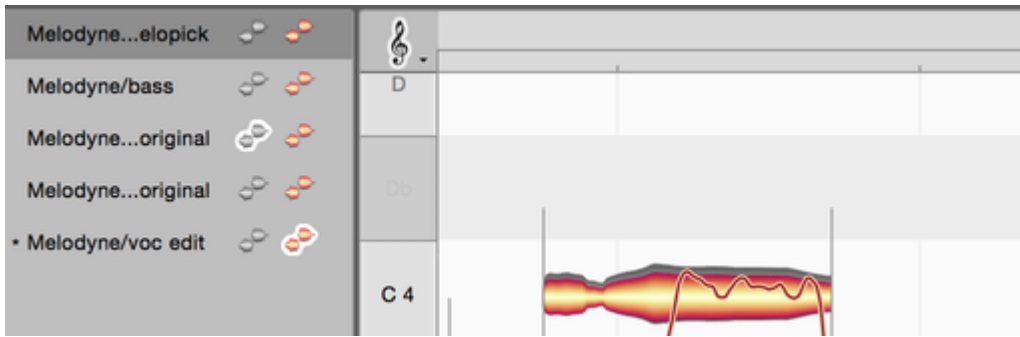
トラックヘッダーの灰色のblobアイコンは参照ボタンで、このボタンを押すとトラックのノートがノートエディターに参照用に表示されます。灰色のblobは編集することも選択することもできません。この場合、これらは、たとえば、ピッチやタイミングの調整などで位置を示す目的でのみ表示されます。さらに参照ボタンをクリックすると、同様にその他のトラックの内容をノートエディターに追加および削除できます(ここでも参照の目的のみです)。

参照トラックを編集モードに切り替える(トラックヘッダーの編集ボタンをクリックするか、現在参照用に表示されている灰色のblobをダブルクリックする)と、灰色のトラックがオレンジになり、オレンジのトラックが灰色になります。つまり、2つのトラックの役割が入れ替わります。

ヘッダーを右クリックすると、トラックメニューと同じコマンドが開きます。

トラックヘッダーを上下にドラッグして、トラックが表示される順序を変更できます。

プラグインの場合: プロジェクトに開いている各Melodyneインスタンスに対してヘッダーが表示されます。ヘッダーにミュート/ソロボタンやボリュームフェーダーはありません。これは、これらの機能がDAWによって提供されているためです。



編集および参照ボタンはスタンドアロンとまったく同様に機能し、ノートエディターのどの内容が編集可能か参照目的のみで表示されるかを決定します。インスタンスの内容を自由に切り替えることができ、またスタンドアロン同様、複数のトラックにわたって選択およびコピーして複数のインスタンスの内容を同時に編集できます。すべて同一のMelodyneウィンドウ内で作業でき、別のインスタンスにウィンドウを切り替えたり、別ウィンドウを開く必要はありません。左のトラックタイトルの側にある小さな星は、位置確認の目的で、現在作業中のウィンドウがどのMelodyneインスタンスに属しているかを示しています。

情報パネルやノートエディターにスペースを分けたい場合、対応するシンボルをクリックしてプラグインのヘッダーパネルを隠すことができます。もう一度クリックすると再び表示されます。



スタンドアロンと一部のDAWを組み合わせる場合、トラックヘッダーを右クリックしてコンテキストメニューの[トラック名を変更]を選択し、トラック名を変更できます。

このオプションは、ご使用のDAWがトラック名をMelodyneに提供している場合灰色表示になります。この場合、トラックヘッダーには正しい名前がすでに表示されているはずです。

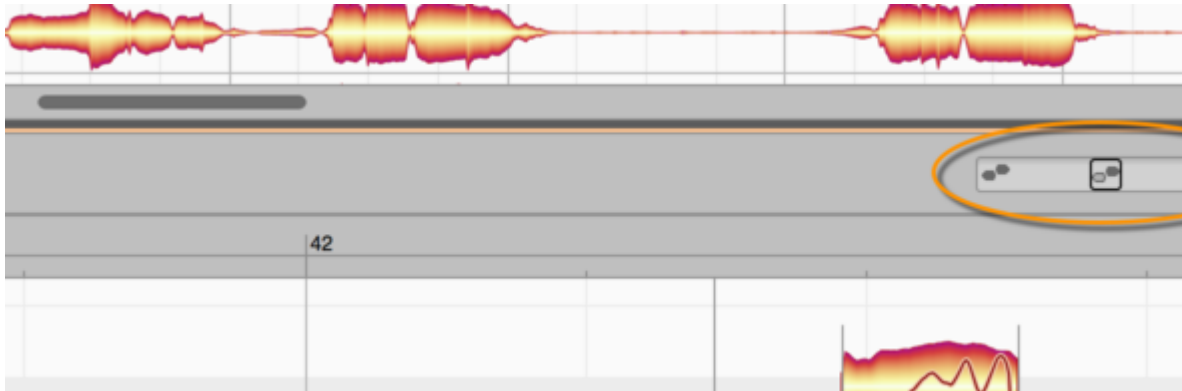
同様に、一部のDAWでは、Melodyneスタンドアロンと同じように、トラックヘッダーを上下にドラッグして、トラックが表示される順序を変更できます。

このオプションも、ご使用のDAWがトラック順序をMelodyneに提供している場合灰色表示になります。この場合、トラックはすでに正しい順序で表示されているはずです。

編集ミックスフェーダー

ノートエディターで複数のトラックのノートを同時に編集している場合、編集ミックスフェーダーは非常に便利です。トラックを編集する際、他のトラックに気を取られることなく、対象のトラックに集中できます。視覚的には、簡単に実行できます。編集する1つまたは2つのトラックを選択し、その他の2〜3のトラックを参照用にノートエディターに表示させ、残りを隠します。

聴覚的には、同様のフォーカスは実現が困難です。編集するトラックをソロにすることはできますが、こうすると、編集するトラックのイントネーションやタイミングの判断に役立つ参照がなくなってしまいます。理想的には、この場合、別のミックスを使用することができます。編集するトラックを一番高い音量に、参照用に表示されるトラックをそれより少し低い音量に、それ以外のトラックをさらに低い音量または無音にします。これは各トラックのボリュームコントロールを使用しても行えますが、編集ミックスフェーダーを使用する方がずっと簡単です。



編集ミックスフェーダーを完全左に動かすと、現在ノートエディターでの編集に対してアクティブになっているトラック(オレンジのblobのあるトラック)が聞こえます。フェーダーボタンをゆっくり中央に向かって動かすと、参照用にのみ表示されている灰色のblobの音が少しずつ上がっていき、中央位置では色付きおよび灰色のblobが同じ音量になります。ボタンを中央位置から右に向かって動かすと、残りのトラック(アレンジに含まれているもので、ノートエディターに表示されていないもの)がゆっくりフェードインします。

こうすることで、編集用に表示されているノート、参照用に表示されているノート、アレンジの残りの間の理想の音バランスをすばやく簡単に見つけることができます。

トラックのソロとミュートもミックスに影響しますのでご注意ください。ノートエディター内で参照用または編集用に表示されており、(直接、または別のトラックがソロになっているため)ミュートに切り替わっているトラックは、編集ミックスフェーダーが完全左と中央位置の間にある場合、ミュートに切り替わっているにもかかわらず聞こえます。ただし、ボタンを中央位置から完全右に動かす(ノートエディター内に表示されていないトラックが聞こえるようになる)と、ミュートに切り替わっているトラックはフェードアウトし、トラックのソロが通常通りの機能に戻ります。

トラックパネルをクリックしてノートエディターからトラックパネルにフォーカスを切り替えると、再びアレンジ全体が聞こえるようになります。これは、編集ミックスフェーダーを完全右に動かした場合と同じ状況です。その後、ノートエディター内で先の時間をクリックすると、ボリューム比が再び編集ミックスフェーダーにより決定されます。

プラグインの場合、フェーダーは同じように機能しますが、ひとつだけ小さな違いがあります。DAW再生を開始する場合、すべてのトラック間のバランスはDAW独自のミキサーによってのみ決定されます。編集ミックスフェーダーは、DAWが停止しており、Melodyneでローカル再生を開始する場合にのみ干渉します。

この場合も、ボタンが完全右にあれば色付きのblobのみ聞こえ、ボタンを中央に向かって動かすに従って灰色のblobがフェードインし、さらに右に動かすに従って残りのトラックの音量がゆっくり上がっていきます。「残り

のトラック」とは、Melodyneに内容が転送済みのトラックのみを指します。文字通り、すべてのトラックが聞こえるようにするには、すべてが転送されていないのであれば、DAW内で再生を開始する必要があります。

編集ミックスフェーダーは、フォーカスがノートエディターにある場合（最後にクリックしたパネルがノートエディターである場合）にのみ操作可能です。フォーカスされたパネルは、細いオレンジの枠で囲まれます。

[ユニゾントラックを分散]

ノートエディターに複数のトラックが同時に表示されている場合、いくつかのノートが重なって表示され、素材の確認や編集が難しいことがあります。ここに表示されているスイッチは、ノートエディターの右下隅にあり、このような場合に役立ちます。これは、ノートトラックに表示されているトラックの間隔を垂直方向に広げたり狭めたりし、ピッチが同じで異なるトラック上にあるノートの選択をやすくします。もちろん、実際のピッチには影響せず、表示方法にのみ影響します。このようにトラック同士の間隔が開いている際、ピッチルーラーはノートのピッチにおおよその目安を提供するのみであるため、ノートエディター背景の灰色と白の（鍵盤を模した）縞模様は非表示になります。

[ユニゾントラックを分散]スイッチは、ノートエディター内に複数のトラックが同時に表示されており、重なりあっている場合にのみ有効になります。



サウンドエディター

Melodyneでは、録音内容のピッチ、タイミング、フレーズ、タイミングを独自の方法で編集できるだけでなく、サウンドも変更できます。その領域は、繊細な音調整から高度に実験的な用途まで広範にわたります。これらの機能はすべてMelodyneのサウンドエディターで使用でき、このツアーで説明しています。

サウンドエディターはスペクトルレベルで機能し、音の倍音構成を詳細に操作する機能を提供します。Melodyneの他の機能と組み合わせることで、他のツールでは不可能な成果を得ることができます。

サウンドエディターの操作に、特別な知識は必要ありません。このツアー終了後、自由にお試しください。理論をより詳しく学びたい場合、Wikipediaに記載のこちらの記事をご参照ください。<https://ja.wikipedia.org/wiki/倍音>

サウンドエディターを開く

Melodyneのサウンドエディターには独自のパネルがあり、ここに表示されているボタンをクリックするか、[オプション]メニューで[サウンドエディターを表示]を選択すると開きます。



サウンドエディターはトラックベースです。サウンドエディターで1つまたは複数のトラックを開くには、トラックのヘッダーパネルでトラックを選択します。サウンドエディターで複数のトラックを同時に編集すると、各トラックのスタートとなるパラメーターは同じ量で変わります。

サウンドエディターは、メロディックとポリフォニックのアルゴリズムを使用して検出されるノートのトラックで使用されます。

技術メモ:トラックがサウンドエディターで表示または編集されている場合、Melodyneは、(ノートアサインメントモードで[コンプレックス]が選択されていても)再生タイプに[トータル]を使用します。この場合、サウンドエディターがトラック上で有効な場合、タイミングやピッチが編集されているノートのサウンドがわずかに異なることがあります。

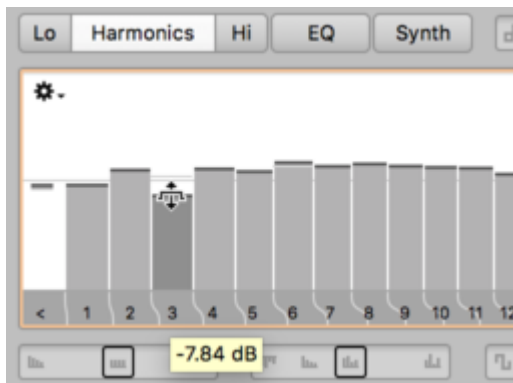
アドバイス:[ユニバーサル]または[パーカッシブ]アルゴリズムが検出プロセスに使用されていたオーディオ素材を編集したい場合、まずその他のアルゴリズムのいずれかに切り替え、改めて分析を実行する必要があります。

サウンドエディターのトラックモードとクリップモード

ARA統合使用時のサウンドエディターは(スタンドアロンの場合同様)トラック単位で機能します。つまり、トラックモードで作業しており、該当のトラックに複数のクリップが含まれている場合、サウンドエディターになされたあらゆる変更は全てのクリップに同じように影響を与えます。たとえば、第3上音を10dB下げた場合、この設定はトラック上の全てのクリップに適用されます。

ただし、クリップモードに切り替えて、選択されているクリップの第3上音を4dB上げると、選択されているクリップ内の該当する上音の値は2つの調整の合計(つまり-6dB)になり、他のクリップ内の第3上音の値は-10dBになります。こうすることで、それぞれのクリップに異なる設定を適用できます。

ここでトラックモードに戻すと、サウンドエディター内に-10~-6dBの値が該当する上音に対して表示されます。これは表示上の妥協で、該当する全てのクリップの平均が表示されています。



同様に、各クリップのパラメーターを調整するためクリップモードに切り替えることを繰り返すと、他のサウンドエディターコントロールも近似値を表示することがあります。先にも述べたとおりこれは一種の妥協ですが、これが混乱の元になりそうな場合は、目ではなく耳を信頼するようにしましょう。

上記の動作は、指定のトラック上の全てのクリップが異なる録音に由来する場合に生じます。全てではなく、一部のクリップが同じ録音に由来するものの場合、この動作はいくらか異なります。このようなクリップのサウンドエディター設定に行った変更は全て、それと同じ録音に由来するクリップにのみ適用されます。

たとえば、4つの異なるテイクから1つのボーカルトラックを(上で説明した)コンピングで作成した際、ひとつのテイクの音が他と若干異なっていた(別の日に録音されていて声の質が違っているなど)とします。この場合、サウンドエディターで音質が異なっているテイクに由来するクリップを変更すると、そのテイクに由来する全てのクリップに影響します。

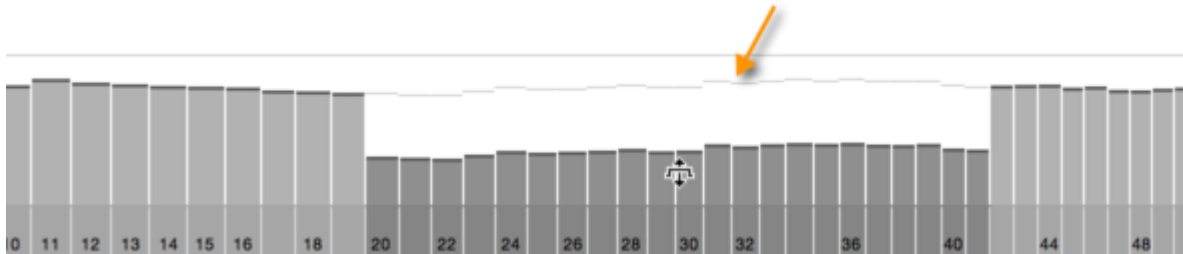
平均スペクトル

サウンドエディターの機能について詳しく見ていく前に、「平均スペクトル」という語について説明しておく必要があります。

オーディオトラックのノートが検出されると、Melodyneはスペクトル分析を実行して各ノートに含まれるハーモニックパーシャル(これ以降「倍音」と表記)とそれらの音量を測定します。分析が終わると、Melodyneは各ノートの「音響指紋」(スペクトル形状での)を保存します。トラック上の全てのノートのスペクトルを平均後、Melodyneはトラック全体の「平均スペクトル」を取得します。

サウンドエディターを使用したスペクトルの調整の始点は、該当するトラックの平均スペクトルになります。平均スペクトルは、トラックのノートの平均音色と考えるとよいでしょう。平均スペクトルは、サウンドエディターのさまざまな作業エリア内で列のサイズを変更したりカーブを再描画しても固定の細い線として表示されます。

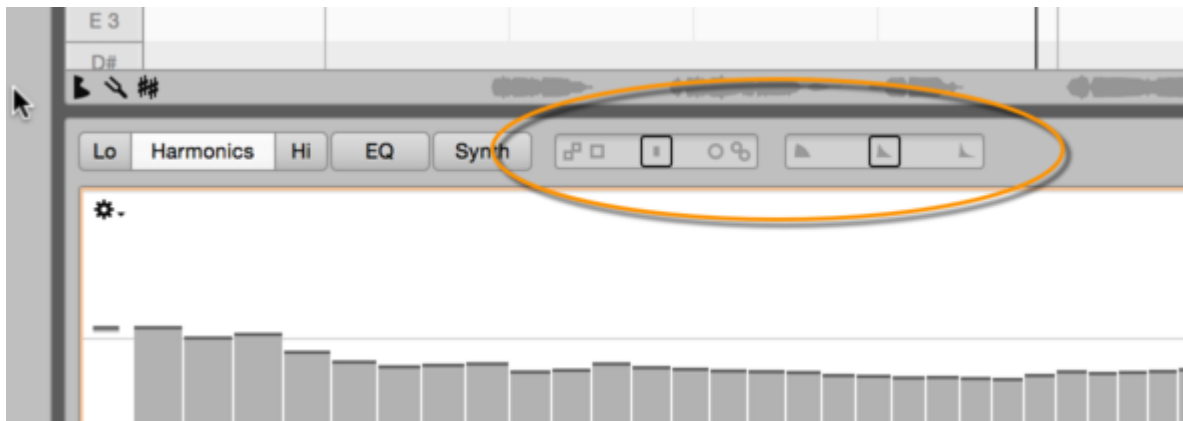
サウンドエディターを開く際に複数のトラックが選択されている場合、これはそれらの平均スペクトルとなり、表示され編集の基盤となります。



強調とダイナミクス

[強調]と[ダイナミクス]スライダーは、トラックの音色と振幅を操作するシンプルでありながら効率的な方法を提供します。これらはサウンドエディターの他の要素から独立して機能し、ディスプレイには影響を与えません。これらのコントロールのいずれかまたは両方を使用するにはサウンドエディターを開く方がよい場合があります。

[環境設定]ダイアログの[ユーザーインターフェース]ページの[ツールチップを表示]オプションにチェックマークを入れると、マウスオーバーするとさまざまなコントロール要素名がポップアップ表示されるようになります。



強調: このスライダーを中央(ニュートラル)から右に動かすにつれて、ノートのスペクトルと平均スペクトル間の差異が広がります。これにより、平均スペクトルからスペクトルが逸脱するにつれてその特性が強調され、違いは漸進的に強調されます。

スライダーを左に動かすと逆の効果が得られ、該当するノートのスペクトルがより平均に近づくのと同じになります。この場合、特性は徐々に消えていき、トラック全体の音色がより統一されます。

[強調]スライダーは、ボリュームを変更することなく、ミックス内の特定のソース部分の存在感を上げたり、他の部分を分かりにくくして上手くなじむようにしたりする優れた手段を提供します。

[強調]スライダーは両方向にかなり広い範囲で変更でき、エフェクトの生成にパワフルなツールでもあります。ただし、素材によっては、ずっと小さな値でさまざまな結果が得られます。そのため、このコントロールは慎重に操作することをおすすめします。Altキーを押したままスライダーを動かすと、パラメーターを1セント単位で上下に変更できます。

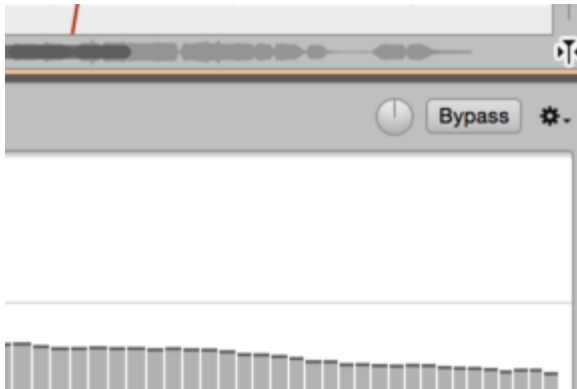
ダイナミクス: このスライダーはノートの振幅、具体的にはノートの内部ダイナミクスに影響します。スライダーを右に動かすと、各ノートの静かな部分はより静かになり、左に動かすとより大音量になります。つまり、スライダーを右に動かすと、各ノート内の振幅の変動が強調され、左に動かすと、変動がスムーズ化されます。

たとえば、[ダイナミクス]スライダーをピアノ録音に適用すると、スライダーを右に動かすとノートの減衰がより早くなり(スタッカート効果)、スライダーを左に動かすと減衰がよりゆっくりになり、パッセージにレガートの雰囲気生まれます。[ダイナミクス]スライダーは均一の振幅のノート(オルガンなどの同じエンベロープ)では、多少音が大きくなる以外、影響が現れません。

アドバイス: ポリフォニック素材では、[ダイナミクス]スライダーを左に動かすと、元は重なっていなかったノートが重なり合うことがあり、ヘッドルームが不十分な場合、歪みのしきい値を超えることがあります。ただしこれは、[ゲイン]ノブを逆時計回りに回しておくことで簡単に防ぐことができます。

バイパス、ゲイン、グローバルのサウンドエディターメニュー

サウンドエディターの右上隅には、サウンドエディターを完全に無効にして無編集のトラック信号のみが聞こえるようになるバイパススイッチがあります。このスイッチを使用して、編集済み信号と未編集信号のサウンドをすばやく比較できます。



スペクトルの編集にはレベルの劇的な変化が含まれるため、Melodyneは自動的に補正を適用し、出力レベルがだいたい同じようになるようにします。ただし、まれに歪みのしきい値を超えたり、出力レベルが低すぎたりすることがあります。このような場合、ゲインコントロールを使用してレベルを手動で調整できます。

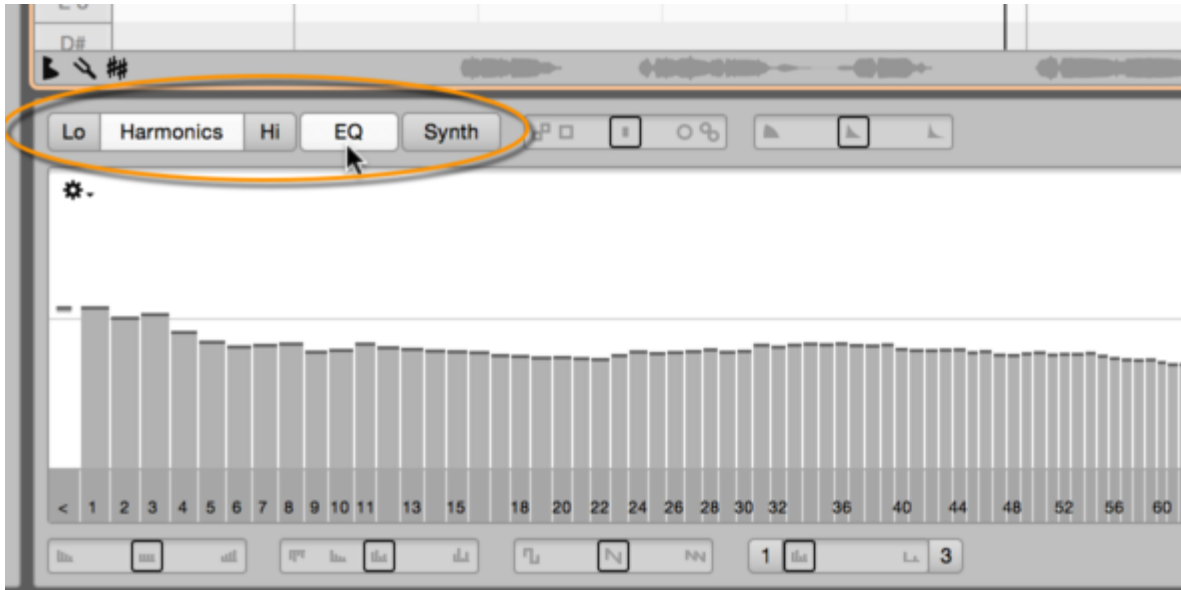
ドロップダウンメニューには3つのコマンドがあります。[すべてリセット]はサウンドエディターの作業エリア全てを管理し、該当のトラックに対して初めて開いたときの状態に戻します。同様に、[設定をコピー]では開いてい

るサウンドエディターの作業エリア_全て_の設定をコピーし、下の[設定をペースト]コマンドを使用して別のトラックに適用できます。

[設定をコピー]コマンドは、ソーストラックの平均スペクトルをコピーせず、特定の倍音の音量を大きくまたは小さくするなど、それに対して行った総体的な調整のみコピーしますのでご注意ください。そのため、この設定をペーストすると、ペースト対象のトラックの平均スペクトルに対して同じオフセットが適用されます。該当する倍音の最終的なレベルは、最初の音量に大きく依存し、コピーしたソーストラックの同一の倍音の編集には（その他の設定と併せて）部分的にしか依存しません。

作業エリア

タブを使用して、サウンドエディターの作業エリアを切り替えることができます。Commandキーを押したまま操作すると、使用可能なスペースに応じて複数の作業エリアを隣り合わせに開くことができます。開いている複数の作業エリアのいずれかを閉じるには、タブをCommandクリックします。



作業エリアにはそれぞれ、中央ディスプレイとその下にいくつかのスライダーがあります。詳細を説明する前に、いくつかの作業エリアについて見てみましょう。

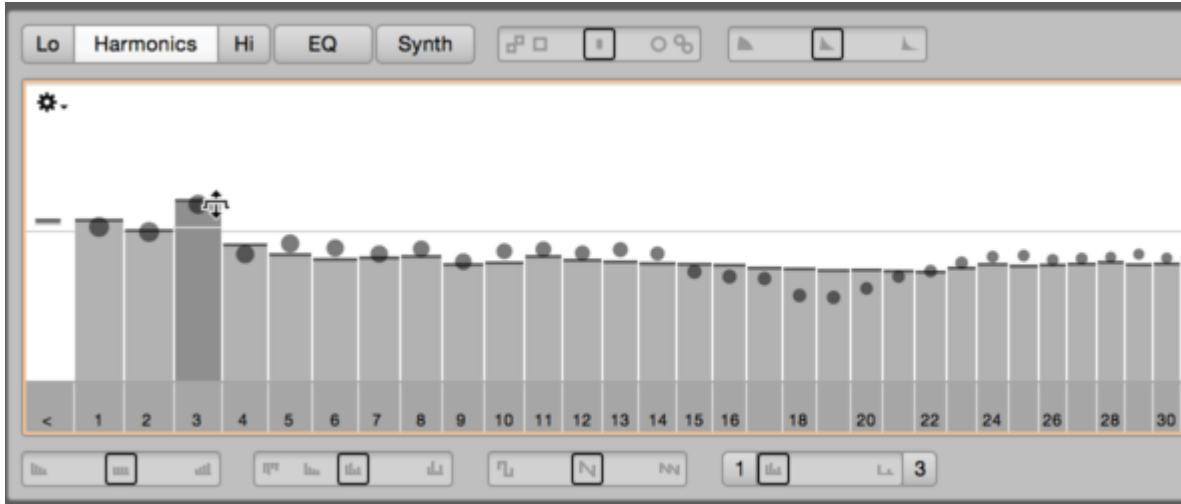
倍音、Lo、Hi: これらの作業エリアでは、ノートの上音構成を直接操作できます。それぞれレイアウトは同じで、全てのノートをコントロールする[倍音]が最も重要です。[Lo]と[Hi]は単に、希望に応じて、基音がトラックの音域の下半分(Lo)または上半分(Hi)にあるノートの倍音をさらに調整できます。

EQ: 周波数スペクトルを半音単位で帯域に分割できるグラフィックイコライザーです。[EQ]と[倍音]、[Hi]と[Lo]の各作業エリアの違いで重要なのは、後者はノートの上音のレベルを調整する(それぞれの基音のピッチによりその周波数は異なる)のに対し、EQは一般的なグラフィックEQのように固定周波数帯域に対して働く点です。

シンセ: この作業エリアには3つのエンベロープがあり、それぞれ、スペクトルに行った変更の各ノートの存続期間全体への影響、フォルマントの上向きまたは下向きのグライド、振幅内の内部変化を調整します。ここにも、サウンドエディターの再合成を調整する2つのグライダーがあります。

倍音、Hi、Loの各作業エリア

[倍音]エリアには選択されているトラックのノートの倍音スペクトルが表示され、これを編集できます。



パネルに表示されている棒グラフは、フィルターバンクやスペクトルフィルタリングを行うプラグインの表示を思わせる形状になっています。ただし、こういったフィルターとこれとはひとつ大きな違いがあります。それは、このスペクトルは各ノート、つまり基音のピッチに関連している点です。これが可能なのは、Melodyneはトラック上で聞こえるノートを認識することができるためです。

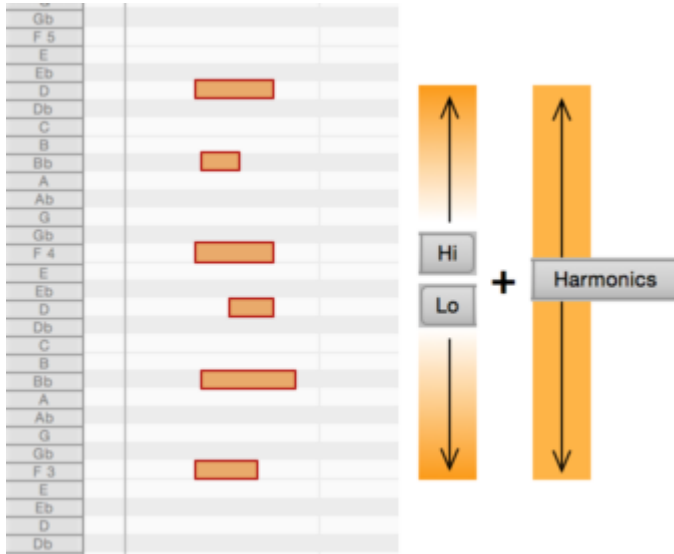
これはつまり、たとえば3番目のバーの高さを上下に変更しても、周波数スペクトルの固定帯域のレベルは変わりませんが、全てのノートの3つ目の倍音(その周波数は各ノートにより異なる)は変わるということになります。

いわば、ソースでサウンドを編集し、音色に非常に直接的な影響を与えていることになります。そのため、倍音バーは、イコライザーのバンドなどよりも、アディティブ・シンセのオシレーターやオルガンのドローバーなどと共通点を持ちます。これらは、トラック上の全てのノートの倍音の相対振幅(最初の倍音である基音のそれを含む)を反映し決定します。提供される音色のシェイピング機能は、繊細で広範にわたります。

編集のスタート位置はいつもトラック全体の平均スペクトルとなり、Melodyneは前回の分析からその位置を決定します。トラック再生中に上下に動く丸は、該当の倍音のレベルを示しています。バー最上部で示される平均値を中心に常に上下に動いているのが分かります。バーの高さを変更すると、平均スペクトル内の該当の倍音のレベルが、細い線として表示されたままになります。

[Lo]と[Hi]の作業エリアは[倍音]エリアを補完します。これら3つのエリアは同時に有効になり、その効果は累積します。[Lo]と[Hi]の作業エリアは[倍音]エリアと全く同じ機能セットを提供しますが、それぞれ、該当す

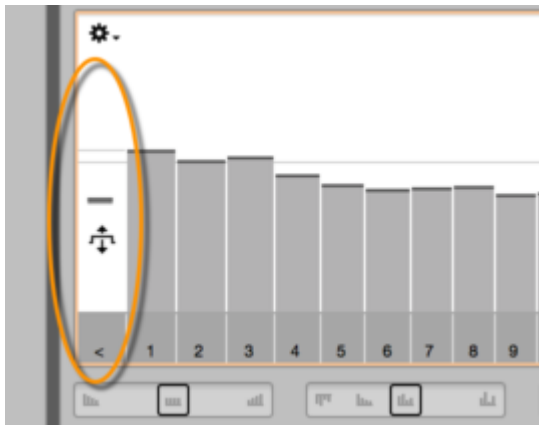
るトラックの音域の下半分または上半分にあるノートの倍音にのみ影響します。半分の位置は、Melodyneが自動で決定します。2つのリージョンに対する設定は、音色がスムーズに推移するよう、クロスオーバーゾーンでは互いにひとつに変化します。



たとえば、高めの音は完璧なのに、低めの音が少しぼんやりしたピアノトラックがあるとして。この場合、一般的なイコライザーを使用して低めの音とミッドレンジを明るめに変更しようとする、高めの音が明るくなりすぎてしまいます。一方、サウンドエディターではそのような問題は生じません。高めの音には影響を与えずに、[Lo]作業エリアで低めのノートの倍音スペクトルを編集し、同時に、低域に影響を与えることなく、[Hi]作業エリアで高めの音を調整できます。[倍音]作業エリアの設定は有効なままとなり、全ての音に対するコントロールを補完する機能を提供します。

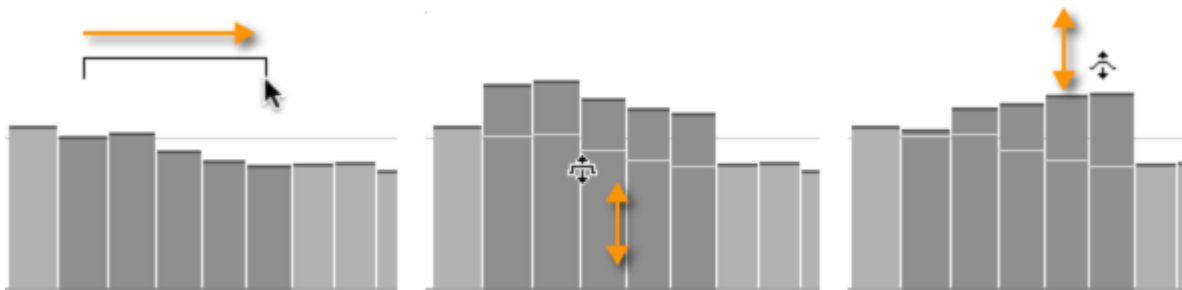
倍音バーと使用方法

[倍音]、[Lo]、[Hi]作業エリアのバーはノートの倍音パーシャルを示しています。「1」と表示されているバーは第1倍音(基音)で、その右の「2」「3」「4」バーはそれぞれ第2、第3、第4倍音を示します。周波数はそれぞれ基音の2倍、3倍、4倍となります。「<」と表示されている一番左のバーは、基音を下回る全ての周波数のレベルに影響します。複数のソースがある場合、このバーを下に下げるとサウンドがクリーンになります。



バーの高さを調整するには、次の手順で行います。

- バー最上部を上下にドラッグして高さ(と対応する倍音のレベル)を変更します。
- 微調整するには、Altキーを押したまま操作します。
- バーの上の白いゾーン内を水平にドラッグして範囲を選択します。
- 選択範囲内の全てのバーの高さを同じ量だけ調整するには、選択範囲内の中間色のエリア(最下部の暗い部分ではなく)を上下にドラッグします。選択範囲のすぐ上の位置(マウスポインターの形が変化する部分)からドラッグすると、ポインターに一番近いバーが最も遠い位置に移動し、最も遠い位置のバーが次第に近い位置に移動します。
- 隣り合わないバーを選択(または選択解除)するにはShift-クリックします。
- 対応する倍音の全てのオクターブを選択するには、バーをダブルクリックします。
- 倍音または選択範囲の倍音を平均スペクトルの元のレベルに戻すには、該当のバーまたは選択範囲をCommand-クリックします。



[倍音]、[Lo]、[Hi]作業エリアのプルダウンメニューには以下のコマンドがあります。これらは、それぞれのディスプレイの全ての倍音バーに影響します。

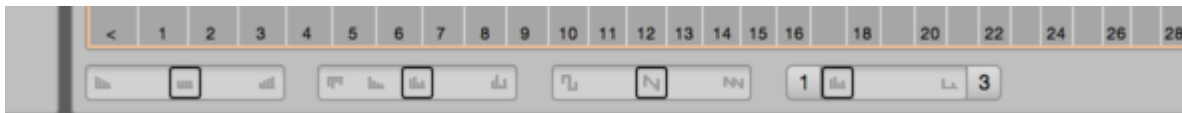


- スペクトルをリセット: 該当する作業エリア内の倍音のバーを元の位置に戻し、平均スペクトルを反映します。

- **スペクトルをコピー**:別のエリアまたはトラックにペーストできるよう、選択されているエリアのスペクトルをコピーします。スペクトルのコピーは、面白い色付け効果やモーフィング様の効果を与えます。このコピーを実行すると、コピーされたスペクトルに現在の輪郭設定が考慮されますが、他のマクロスライダーの値は単にコピーされ、フォルマント設定は無視されます。
- **スペクトルをペースト**:このコマンドは、上述の[スペクトルをコピー]コマンドと連動して機能します。コピーされたスペクトルが、編集されるトラックの現在選択されている作業エリア(倍音、Hi、Lo)にペーストされます。コピー&ペーストは、同一ドキュメント内のトラック間や、あるドキュメントから別のドキュメントに対して行えます。ペーストが実行されると、対象トラックの輪郭パラメーターがリセットされ、範囲全体がその後の編集の対象となります。
- **スペクトルをクリア**:これは、ミキサーのフェーダーすべてを下げるようなものです。結果として無音となり、新しい音色をゼロから作り上げたい場合に便利です。
- **スペクトルをシャッフル**:すべての倍音をランダムなレベルに設定します。
- **すべての倍音を表示**:すべての倍音(高さに関係なく)を表示させるか、最も低い倍音と最も重要な倍音のみを表示させるかを選択できます。後者の場合、小節がより広くなり、変更がしやすくなります。最も高い倍音は表示されていないが、選択範囲に表示中の一番右の小節が含まれている場合、それより上の倍音でディスプレイ外のものすべても選択範囲に含まれ、編集の対象となります。

倍音、Lo、Hiのマクロコントロール

3つの作業エリアにはそれぞれ同じスライダー4つがあります。これらはさまざまな倍音のレベルを制御するマクロコントロールで、その効果はディスプレイに即座に反映されます。いずれかのマクロコントロールをCommand-クリックすると、中間位置にリセットされます。これにより、それ以前に倍音のレベルや倍音バーの高さに施された操作が削除されますが、手動で行った変更(マクロを使用して行った変更以外)はそのまま残ります。



ブリリアンス: このスライダーを右に動かすと、高めの倍音のレベルが上がり、サウンドがより明るくなります。左に動かすと、高めの倍音が静かになり、サウンドがぼんやりします。



輪郭: このスライダーを右に動かすと、隣り合うバー間の高さの違いが大きくなり、山は高く、谷は深くなり、一般的に表示の輪郭がシャープになります。スライダーを左に動かすと逆の効果が生まれ、中央に向かって動かすにつれて徐々に元の輪郭に戻り、さらに左に動かすとフラットになります。



奇数/偶数: 右に動かすと奇数の倍音が徐々にフェードアウトし、左に動かすと偶数の倍音がフェードアウトします。前者の場合、オクターブは着実に強化され、後者の場合、ソースは徐々に空のようなクラリネットのようなサウンドになります。



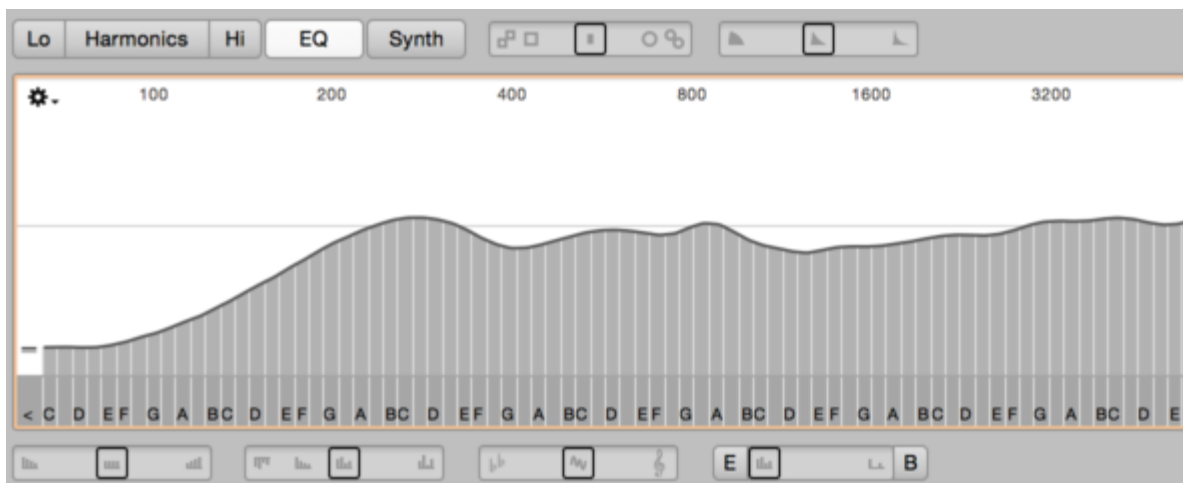
コム: このスライダーは倍音スペクトルをまばらにし、次第に奇妙な効果(櫛(コム)を思わせる表示)が生まれます。スライダーの両側のボタンではコムを横にスライドでき、これもサウンドに劇的な効果を与えます。スライダーを中央位置のままにした場合、右のボタンをクリックすると、スペクトルから一番低い倍音がひとつずつ排除されます。



倍音を示すバーの4つのスライダーを自由に組み合わせ、豊富なサウンドデザインのオプションを提供します。

EQ作業エリア

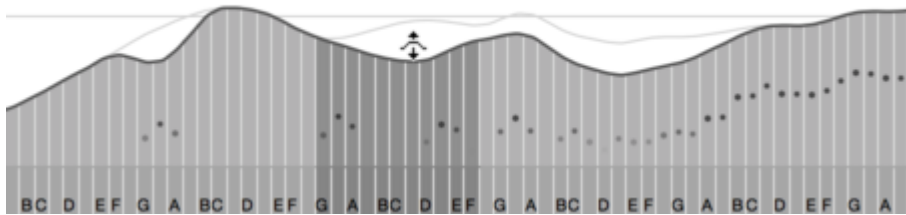
この作業エリアにはグラフィックイコライザーが含まれています。このイコライザーは、通常の場合、周波数スペクトルの固定帯域上で動作します。イコライザーは周波数スペクトルを半音幅の帯域に分割し、一番下の階名で調整されます。



イコライザーはオーディオのスペクトル範囲内の固定周波数帯域で動作するため、[倍音]、[Lo]、[Hi]の作業エリアで提供されるもの（バーでさまざまな倍音を示す）とはかなり異なるアプローチをサウンドのシェイピングに提供します。4つ全ての作業エリアは同時に使用することができます。

イコライザーを使用した編集のスタート位置はいつも編集されるトラックの平均スペクトルとなり、これはオーディオのスペクトル全体で示されます。トラックに高い音または非常に明るいサウンドの音がたくさん含まれている場合、EQカーブの右側の端はより高く（山のようになり）ます。

カーブを再形成する際、元の平均スペクトルが細い線で表示されます。再生中、その瞬間のスペクトルが、現在のカーブを上下に動く丸で示されます。



EQ作業エリアとその他のエリアの間で混乱を防ぐため、倍音ベースのもの、各帯域の現在のレベルは、水平の線ではなくカーブでここに表示されます。ただし、さまざまな周波数帯域のレベルの調整には、他のウィンドウでの倍音バーの高さの調整と同じテクニックが使用されるため、バーの選択とドラッグ方法を説明したセクションをまだお読みでない場合、まずそのセクションをご覧ください。

イコライザーは、基礎として編集されるトラック内で検出されたノートを使用します。これはつまり、正確に認識されていないオーディオ素材内のノートは、正しいEQ帯域に割り当てられず、また正しい帯域によりコントロールされません。ポリフォニック素材内のノートが検出されない場合、ノートが誤って本来より低いまたは高い音に割り当てられます。

前者の場合、そのエネルギーはより低い音の上音内に割り当てられ、EQスペクトル内にそのように表示されます。一方、より高い音に割り当てられる場合、イコライザーの最低帯域になり、「く」として示されます。ここには、検出された音の基音を下回る全ての周波数成分、またはどの音にも割り当てられない周波数成分が集められます。「く」帯域に集められるトラックの信号成分を聞くには、これを解除する前にその他全ての帯域をクリアする（ゼロに設定する）ことができます。

ノートアサインメントモードで検出を分析または必要に応じて編集し、検出されていない全てのノートを有効化してこれらがイコライザーにより正しく処理されるようにします。



ローカルのドロップダウンメニューには、EQスペクトルに対する次のコマンドがあります。

- スペクトルをリセット: 元の平均スペクトルを復元します。

- **スペクトルをコピー**:別のトラックにペーストできるよう、現在のEQスペクトルをコピーします。このコピーを実行すると、コピーされたスペクトルに現在の輪郭設定が考慮されますが、他のマクロスライダーの値は単にコピーされ、フォルマント設定は無視されます。
- **スペクトルをペースト**:このコマンドは、上述の[スペクトルをコピー]コマンドと連動して機能します。コピーされたEQスペクトルが、編集されるトラックのEQ作業エリアにペーストされます。コピー&ペーストは、同一ドキュメント内のトラック間や、あるドキュメントから別のドキュメントに対して行えます。ペーストが実行されると、対象トラックの輪郭パラメーターがリセットされ、範囲全体がその後の編集の対象となります。
- **スペクトルをペースト**:このコマンドは、[コピー]コマンド(Ctrl+C)と連動して機能し、[編集]メニューおよびノートエディターのコンテキストメニューにもあります。ノートエディター内でblob(または同一トラック上の複数のblob)を選択してコピーすると、該当するblobのスペクトル(または選択されている複数のblobの平均スペクトル)をEQ作業エリアにペーストできます。コピーされたスペクトルはサウンドに適用され、面白い音色が得られます。
- **スペクトルをクリア**:すべての帯域を最小値に設定し、結果として無音となります。
- **スペクトルをシャッフル**:すべての帯域をランダムなレベルに設定します。試してみてください。

EQマクロスライダー

マクロスライダーは全ての周波数帯域のレベルに影響し、その効果は即座に帯域の高さに反映されます。いずれかのマクロコントロールをCommand-クリックすると、中間位置にリセットされます。これにより、それ以前に帯域の高さに施された操作が削除されますが、手動で行った変更(マクロを使用して行った変更以外)はそのまま残ります。



コントロール(左から右):

ブリリアンス: このスライダーを右に動かすと、高めの帯域のレベルが上がり、信号の高周波数成分がより目立つようになります。左に動かすと、高めの帯域が弱くなり、サウンドがぼんやりします。

輪郭: このスライダーを右に動かすと、隣り合う帯域間の高さの違いが大きくなり、山は高く、谷は深くなり、一般的に表示の輪郭がシャープになります。スライダーを左に動かすと、まずはスペクトルが徐々にリニアになり、次に反転します。

調性: 右に動かすと、その音階に無関係なノートがフェードアウトします。左に動かすと、音階に関係するノートがフェードアウトします。

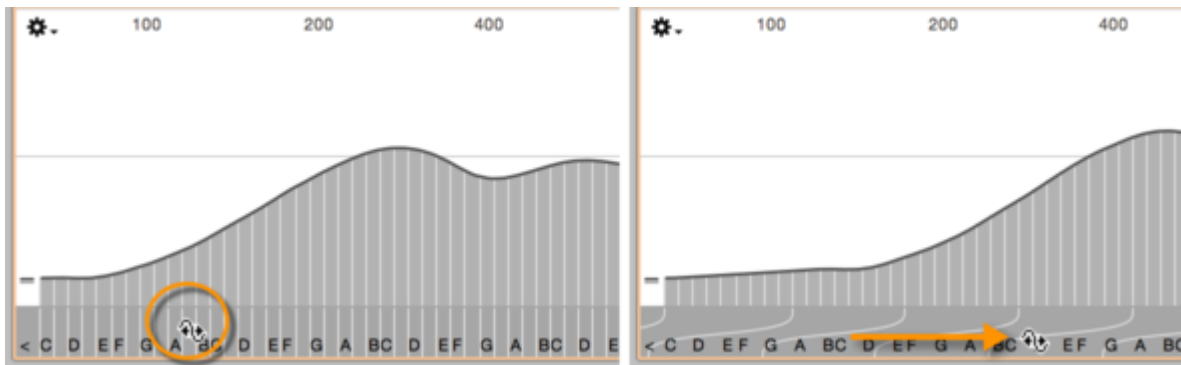
コム: 前者の場合、5度圏内の主音から最も遠い音から順に、5度圏とそのオクターブだけになるまで削除されます。スライダーの両端のボタンを使用して、どの音をこの目的での主音とするかを、5度圏を時計回りまたは逆時計回りで順に選択して決定できます。左のボタンは、現在主音に指定されている音を示します。

メインのEQディスプレイ内の各周波数帯域を直接編集して4つのスライダーを自由に組み合わせることが出来ます。

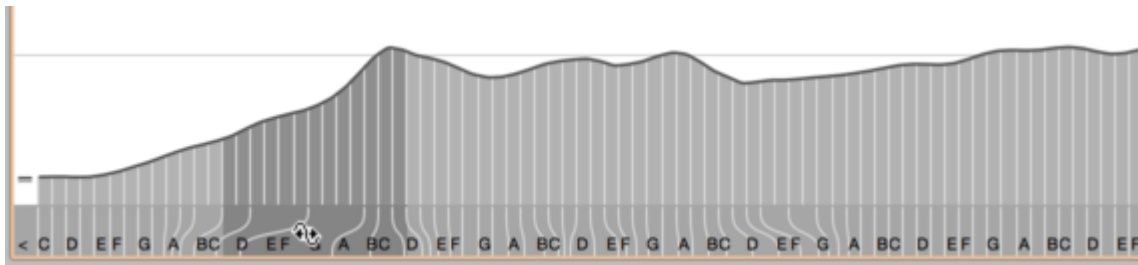
フォルマント

フォルマントは周波数スペクトル内のピークで、その位置は、基音のピッチには直接には関係していません。フォルマントは、各楽器やボイスにそれぞれの特徴を与えるのに役立ちます。これまでにMelodyneを使用したことがあれば、フォルマントツールについてはご存じのことでしょう。フォルマントツールでは、ノートのフォルマントを上下にずらすことで、ノートのサウンドを変更できます。

サウンドエディターもフォルマントへのアクセスを提供します。EQ、倍音、Lo、Hiの各作業エリア内でフォルマントを編集でき、編集内容は該当のトラックの全てのノートに影響します。フォルマントへは、バーまたは帯域の下の濃い灰色のゾーン(倍音またはノート名が表示されている部分)からアクセスできます。



- このエリアを水平にドラッグして、倍音またはEQ帯域全てを左右するフォルマントをずらします。
- 隣り合うバーまたは帯域を選択して操作すると、そのバーまたは帯域のみを左右するフォルマントをずらすことができます。この処理を繰り返すことで、複数のフォルマントをさまざまな方向にずらすことができ、ずらす量を変えることで、複雑なフォルマント推移パターンを生成できます。



- フォルマントゾーンをCommand-クリックすると、音域全体を通して元のフォルマントに戻ります。

サウンドエディターで説明したテクニックのフォルマントツールと、トラックインスペクター内の[フォルマント]ノブは、同時に適用させることができます。組み合わせた効果は次のとおりです。

- フォルマントツールは、選択されているノートのフォルマントを上下にずらしします。サウンドエディター内でトラックのフォルマントが該当のノートの方向に「曲げられて」いる場合、この「曲げられている」フォルマントがずれます。つまり、フォルマントツールは、サウンドエディター内に表示されているフォルマント構造に対して、ノートに基づくオフセットを付加します。

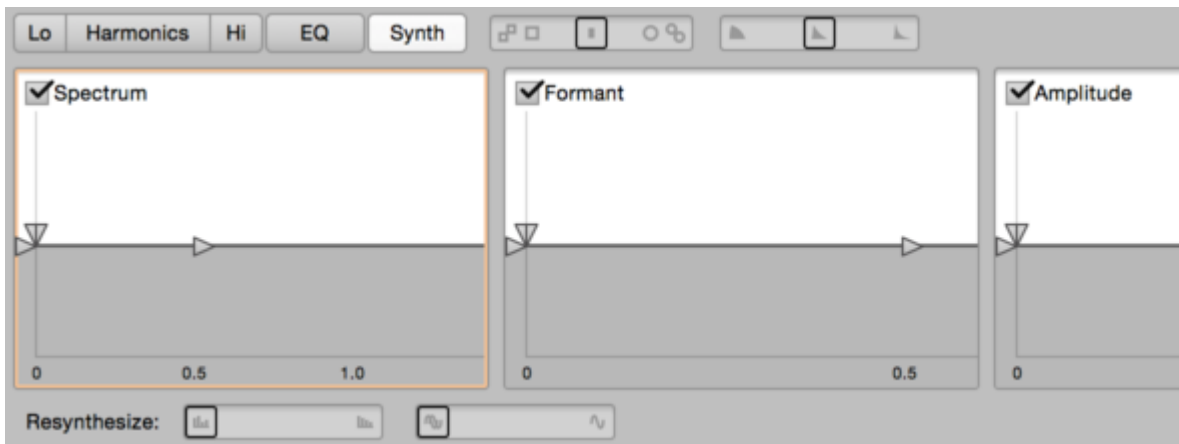
- トラックインスペクターの[フォルマント]ノブと、サウンドエディターが提供するフォルマントシフト機能は、トラック全体に影響し、連携して動きます。[フォルマント]ノブを回すたびに、サウンドエディター内のフォルマント構造(実行済みの編集を含む)全体が上下にずれます。EQまたは倍音作業エリア内で全ての倍音をずらすと、[フォルマント]ノブがそれに従って動きます。一方、サウンドエディター内で一部の倍音や周波数帯域のみを選択している場合、[フォルマント]ノブには変更が反映されません。

フォルマントは基音に変化する際には動かないため、厳密には、フォルマントを編集できるのはサウンドエディターにある4つの作業エリアのうちひとつ(EQ作業エリア)だけです。倍音、Lo、Hiの作業エリアでは、バーはノートの動きに平衡して動く倍音に結びつけられているため、「スペクトルの変更」と呼ぶにふさわしい操作です。とはいえ、4つの作業エリアで説明したテクニックを使用しても有益な結果を得ることはできます。それらの複合効果は以下のとおりです。

- EQの全帯域に適用されたフォルマントシフトは倍音作業エリアに反映されます。同様に、倍音作業エリアの全バーに適用されたフォルマントシフトはEQに反映されます。HiおよびLo作業エリアにはEQの全帯域に適用されたシフトが反映されます。
- ただし、HiまたはLo作業エリアでのフォルマントシフトは倍音またはEQ作業エリアには反映されません。これは、HiおよびLo作業エリアはそれぞれ音域の半分にしにアクセスしないため、各エリアになされた変更は基音またはEQ作業エリアに表示できないためです。
- Hiおよび/またはLo作業エリア内でフォルマントをずらしてから、倍音またはEQ作業エリアで全てのフォルマントをずらした場合、結果はHiおよび/またはLo作業エリアに反映されます。Hiおよび/またはLoで構築したフォルマント構造が、この場合まとまってずれます。同様に、HiまたはLo作業エリアでの倍音をリセットしても、倍音またはEQ作業エリアには反映されません。
- 一方、倍音またはEQ作業エリアでフォルマントをリセットすると、4つ全ての作業エリアに変更が反映されます。倍音およびEQ作業エリアではフォルマントはリセットされ、HiおよびLoではそれぞれのウィンドウで実行された編集のみ効果を維持します。
- フォルマントシフト前に全ての倍音または周波数帯域が選択されていない場合、変更は、フォルマントシフトが実行された作業エリアにのみ反映されます。

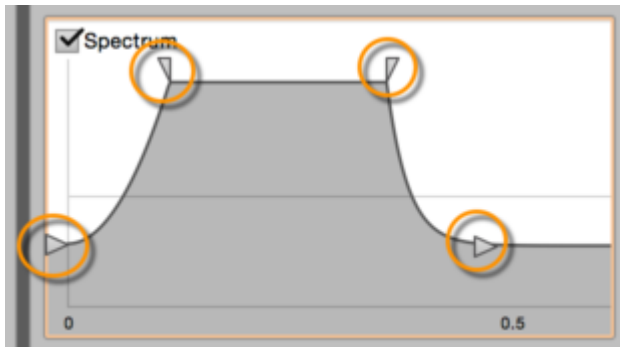
[シンセ]エリアのエンベロープ

この作業エリアには3つのエンベロープがあり、それぞれ、スペクトル編集の強度、フォルマントシフト、ノートのボリュームをダイナミックにコントロールできます。ここにも、サウンドエディターの再合成を調整する2つのグライダーがあります。

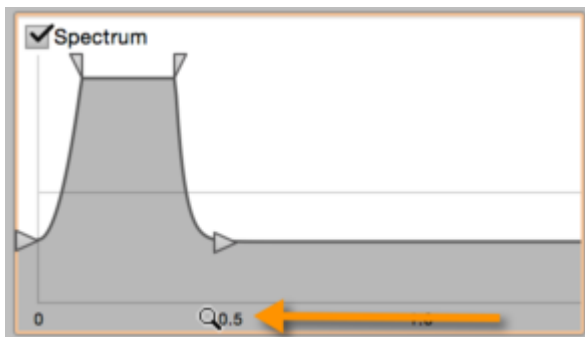


エンベロープでは、編集されているトラックのノートにさまざまな方法で影響を与えることができます。たとえば、ピアノトラックのノートのアタックをわずかに伸ばして、楽器に微妙に異なる特徴を与えることができます。また、スペクトルフィルタリングを使用することもできます。同時に、各ノートのフォルマントを上方向にグライドさせることもできます。

これらの効果は編集中のトラックのノート全てに直接作用します。各ノート(ポリフォニックなオーディオ素材に含まれるものであっても)は、他のノートから独立して、それぞれのエンベロープの指示に従います。操作原理は、エンベロープジェネレーターやポリフォニックシンセサイザーのそれとほぼ同じですが、サウンドエディターのエンベロープはMIDIメッセージではなく、オーディオトラックのノート(より正確に言えば、ノートの音楽的なスタート位置)によりトリガーされます。ノートに明確なスタート位置がない場合、先行するノート分割がエンベロープトリガーとして機能します。(Melodyneのノートアサインメントモードではノートのスタート位置を調べて設定することができます。)



エンベロープを形成するには、三角形のハンドルをドラッグするか、灰色のエリア内を直接ドラッグします。各エンベロープには、スタートレベル、アタックタイム、サステインレベル、サステインタイム、ディケイタイム、最終レベル(ディケイ段階後のレベル)の6つのパラメーターがあります。



各エンベロープの下にルーラーをドラッグして、エンベロープディスプレイに示される時間の長さでエンベロープの作成に対して使用可能な時間の長さを秒単位で決定できます。

さまざまなパネルにある[スペクトル]、[フォルマント]、[音量]の横のチェックボックスは、それぞれのエンベロープジェネレーターの有効化と無効化に使用します。エンベロープをCommand-クリックすると、元のニュートラルな設定に戻ります。

これらは3つのエンベロープディスプレイ中央の水平線で示されます。この中央線より上のエリアでは、エンベロープによって、スペクトルフィルタリングの強度が上がるか、フォルマントが上向きにシフトするか、音量が上がるかします。この中央線より下のエリアでは、エンベロープによって、スペクトルフィルタリングの強度が下がるか、フォルマントが下向きにシフトするか、音量が下がるかします。

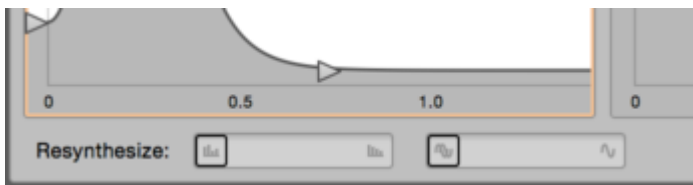
[スペクトル]エンベロープは、倍音、Hi、Lo、EQの各作業エリア内で効果を持つ元の平均スペクトルになされた全ての変更の強度を左右します。[フォルマント]エンベロープは、フォルマント構造全てを上方向または下方向に動かすことで、これらのエリア内の全てのフォルマントシフトに影響します。

[シンセ]エリアの[再合成]コントロール

サウンドエディターは、信号をさまざまな周波数に分割し、これらに変更を加えてから組み合わせて新しい信号を形成します。そのため、組み合わせられた信号には、ハーモニックパーシャル(基音の整数次倍の周波数)だけでなく、スペクトル内に散在し、ハーモニックパーシャルとほとんど一致しないインハーモニックパーシャルとシンプルなノイズ(下弦やペダルのきしみや背景雑音など)も含まれています。

倍音、Lo、Hiの作業エリアのバーはこのハーモニックパーシャルが中心となっていますが、Melodyneは、有限数のサイン波オシレーターしか使用できない純然たる他のシンセサイザーと異なり、パーシャル間の信号成分が失われることなく、信号内で再生成され、オリジナルに忠実であり続けます。倍音バーを動かすことでサウンドを(希望に応じて劇的に)変更できますが、基本となるのは常に元の録音の素材です。

2つの[再合成]スライダーを使用する際は別です。



大きさ: このスライダーを右に動かすと、スライダーが右端に到達して各ノートの存続時間音色の変化がまったく起こらなくなるまで、各倍音の振幅の変化が徐々に低減します。結果として丸が上下に動かなくなり、倍音バーの最上部に留まります。スライダーを右に動かすと、各倍音に割り当てられている帯域が狭まり、非倍音成分が徐々に信号から消失します。

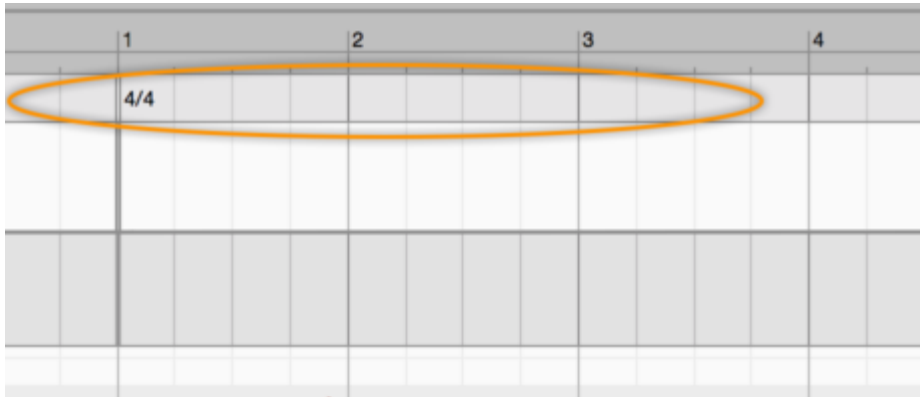
位相: さまざまなパーシャルの異なる位相も、信号の自然な再現にかなりの影響を与えます。スライダーを右に動かすと、全てのパーシャルが同相になるまでパーシャル間の元の位相比が徐々に低減していきます。これは主に信号内のトランジェントに影響し、サウンドがより人工的になります。[位相]と[大きさ]コントロールは、単独または組み合わせて使用できます。

両方のスライダーを右端にした状態だと、結果は特に「人工的」でシンセ波形を思わせるサウンドになります。これは、倍音、バー、エンベロープなどを使用したサウンドデザインの起点として使用できます。

拍子記号変更

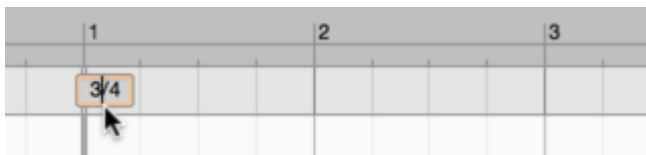
テンポエディターが一番上の水平のストリップは、拍子記号エディターです。ここに入力または表示された拍子記号が、テンポエディターをテンポ編集またはテンポアサインのどちらのモードで開いているかどうかに関係なく、常にプロジェクトに適用されます。

例外は、テンポエディターがノートアサインメントモードと同時に開いている場合です。この場合、拍子記号エディターは、ノートアサインメントモードで編集されているオーディオソース(プロジェクトの拍子記号とは異なる拍子記号である場合がある)のみに適用されます。この場合、拍子記号エディターはMelodyneのARAプラグインでも使用できます。



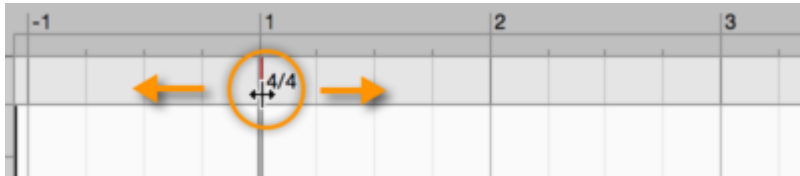
拍子記号を変更する

拍子記号を変更するには、現在表示されている拍子記号([4/4]など)をダブルクリックします。入力フィールドが表示され、新しい拍子記号を入力できます。分母だけ、分子だけの変更も可能です。たとえば、4/4から3/4に変更する場合、最初の「4」を「3」とするだけでかまいません。



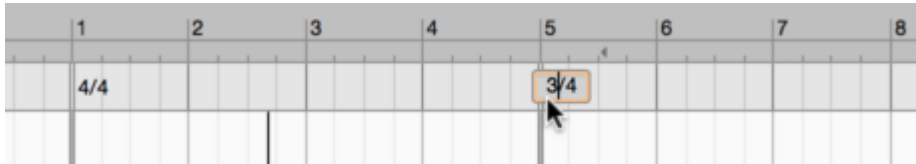
小節1の先頭に移動する

小節1の先頭が本来あるべきと思われる場所に表示されていない場合、拍子記号エディター内の任意の位置をクリックして左右にドラッグし、状況に合わせて小節1が正しい位置になるようにします。小節線が(分母で指定した)1拍ずつ先に進みます。タイムグリッドの現在の設定は、拍子記号エディターでの動作には影響しません。



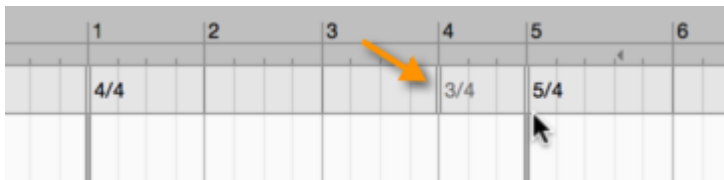
拍子記号を挿入、編集する

タイムライン上にいつでも新しい拍子記号を入力できます。拍子記号エディター内の適切な場所をダブルクリックして、表示されたテキストフィールドに希望の拍子記号を入力します。



拍子記号エディター内をクリックして水平にドラッグすると、クリックした小節に影響を与える拍子記号が(分母で指定した)1拍ずつ対応する方向に移動します。もしその過程で別の拍子記号に交わる場合、それは削除されます。拍子記号のすぐ左の複縦線をダブルクリックすると、該当の拍子記号(およびクリックした複縦線)が削除されます。先行する拍子記号の影響は、削除された拍子記号の範囲を含みます。

新しい小節は、それ以前の拍子記号に従った拍からスタートします。ですので、必要に応じて、必要な長さを補完する小節が自動で挿入され、一連の小節の一貫性が保たれます。補間小節の拍子記号は灰色で表示されます。



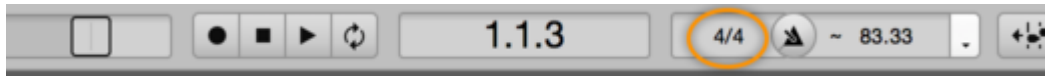
それ以降の小節線のドラッグで補完用の小節がなくなった場合、縦線は消えます。そのままにしたい場合、その拍子記号をダブルクリックします(黒に変化します)。小節頭の複縦線は、別の場所でどのような変更を行っても、位置が変わりません。

自動生成された小節は、タイムライン上の別の場所で拍子記号を編集、挿入、削除するかテンポエディターが閉じると、すぐに通常の小節に変化(灰色の拍子記号が黒に変化)します。

テンポカーブの対応する部分を選択してメインメニューで[編集]>[コピー]を選択し、一連の拍子記号をコピーします。範囲の選択を解除後、[編集]>[ペースト]を使用して再生カーソルが示す位置に挿入できます。これはテンポ編集モードとテンポアサインモードの両方で可能ですが、後者の場合、拍子記号変更のみコピーされ、テンポ編集モードではテンポカーブもコピーされます。

テンポ表示の近くの拍子記号表示

トランスポートバー内のテンポ表示の近くの拍子記号表示は、現在の再生位置での拍子記号を示しています。このフィールドに新しい拍子記号を入力しても、拍子記号の変更は追加されず、再生カーソル位置で効力を持つ拍子記号(再生カーソルの左の一番近い拍子記号)だけが変更されます。



テンポや拍子記号のない空のドキュメントの場合は、状況が異なります。このような場合、トランスポートバーの拍子記号フィールドに「3/4」を入力すると、この拍子記号がドキュメント全体に適用されます。このためだけにテンポエディターを開く必要はありません。

バージョン履歴

ここ最近のMelodyneアップデートに含まれる全変更の一覧をご覧ください。

Melodyne 4.2.3の新機能

- 解消:バージョン4.2.2で、特定の構成のMelodyneで起動時に「期限切れ」のメッセージが表示され起動できない不具合。

Melodyne 4.2.2の新機能

新機能と機能向上

Studio One 4でのウィンドウ管理機能向上: Melodyneのズームおよびその他のウィンドウ設定が一定となり、これまでウィンドウ毎に個別の設定で表示されていましたが、新規オーディオ・リージョン選択時に同じ設定で表示されるようになりました。

バグフィックス

- 解消:Cakewalkで、一定の状況下において、新規ファイルが自動分析されず、検出プロセスをスタートするのにアルゴリズムを手動で選択する必要があった不具合
- 解消:スタンドアロンのMelodyneで、他のプロジェクトが開いている状態で保存せずにプロジェクトを開じるとクラッシュすることがあった不具合
- 解消:Logicで、Melodyneプラグインの認証でDAWのローンチが低速化することがある不具合
- 解消:スタンドアロンのMelodyneで、一定の状況下においてプロジェクトを開いたりインポートしたりするとクラッシュする不具合
- 解消:ARAモードで、再生をスタートしてから停止すると、一定の状況下においてblob編集時のモニタリングができなくなる不具合
- 解消:Cakewalkで、新規クリップを選択するとMelodyneの位置表示がずれることがある不具合

Melodyne 4.2.1の新機能

新機能と機能向上

ARAのロード迅速化: ARA対応のDAWで、大型プロジェクトのロード時間が大幅に短縮されています。

バグフィックス

- 解消:MixcraftおよびCakewalkでのARA操作中、DAWで再生を開始するとblobのモニターとスクラブがMelodyneで使用できなくなる現象

- 解消: Melodyneがプレーヤーモード(使用されているコンピューター上でプログラムがアクティベートされていない状態)の場合、トラック編集モードからクリップ編集モードへと切り替える際にARAプラグインがクラッシュする現象
- 解消: Melodyneプラグインで転送後に検出が中断された後、Altキーを押したままオーディオ素材を動かそうとするとクラッシュすることがある現象
- 解消: Melodyne studioをスタンドアロンで使用中、オーディオファイルがトラックパネルで選択されている場合、インスペクターでの微調整でクラッシュすることがある現象

Melodyne 4.2の新機能

ARAによりさらに統合: MelodyneとLogic

ARA Audio Random Accessにより、Melodyne 4.2とLogic Pro X 10.4.3はさらにタイトかつ効率的に連動するようになりました。最も重要なワークフロー機能向上は以下のとおりです。

転送なしにトラックを開くことが可能: インサートエフェクトとしてMelodyneをロードし、再生を開始するだけで、トラック全体がMelodyneに自動的に表示されます。転送の必要はもうありません。

Melodyneはユーザーがトラックに加える全ての変更を追従: Melodyneはその内容をオーディオトラックの内容と比較し、リージョンの伸縮、動きを忠実に再現します。

リージョンのリアルコピーとゴーストコピー: リージョンをコピー、ループ、複製すると、Melodyneの内容は、状況に応じてリアルコピーまたはゴーストコピー(エイリアス)として動作します。

リージョンベースのミキシング: Melodyneを使用して編集されたリージョンは、Logicのリージョンインスペクターのミックス機能すべて(リージョン、ゲイン、ミュート、フェード)に対応するようになりました。

コンピングステージにMelodyneを使用可能: テイク選択の_前_にMelodyneを使用してテイクを編集できるようになりました。それぞれのメリットをより現実的に評価できるため、より優れた結果が得られます。

転送ファイルの管理は過去のものに: ARAにより、プロジェクトのアーカイブ化や共有時に転送ファイルについて心配する必要はもうありません。

[さらに詳しく...](#)

新機能と機能向上

LogicがARAに対応: Melodyne 4.2はApple Logic Pro X 10.4.3へのARA統合に対応しています。ARAにより、Logicでは転送の必要がなくなりました。また、Melodyneはオーディオトラックになされる全ての変更を追従します。

Cakewalk/Sonarでの転送パス: Cakewalk/SonarでMelodyne VST3プラグインを使用する場合、転送パスは現在のプロジェクト内に自動的に作成されるようになりました([Cakewalk Projects]>(プロジェクトフォルダー)>[Melodyne]>[Transfers])。

インタラクションの向上: Melodyne 4.2のStudio Oneとの統合がさらに向上しました。Studio Oneバージョン3.5.6以降が必要です。

追加キーボードショートカット: ノートアサインメントモードのコンテキストメニューに表示される[ノートをスタート位置ラインで再分割]コマンドに、[環境設定]ダイアログからキーボードショートカットを割り当てることができるようになりました。このショートカットはその後編集モードでも使用できます。

バグフィックス

- 解消: Studio Oneで、多数のMelodyneクリップがあるプロジェクトでMelodyneインスタンスを([Melodyneで開く]コマンドを使用して)追加生成するとプログラムが遅くなる現象
- 解消: Windows上のStudio Oneで、ズームレベル変更時にノート背景の色が変わる現象
- 解消: Studio Oneで、ユニゾントラック分散機能によりMelodyneのノートが数オクターブずれることがある現象
- 解消: Studio Oneで、ノート分割ツールを使用すると一定の状況下でクラッシュする現象
- 解消: * 解消: Studio Oneで、ノートがMelodyneで削除されているのにノート表示(波形に重ねられる線)が更新されない現象
- 解消: Studio Oneで、コピーされたイベントの場合に[DAW内のクリップ選択に追従]を実行すると違う小節が表示される現象
- 解消: Cakewalk/Sonarで、Melodyneを使用して編集した16-bitオーディオファイルをエクスポートするとクラッシュすることがある現象
- 解消: Cakewalk/Sonarで、フリーズ機能を使用するとクラッシュすることがある現象
- 解消: ARA対応のDAW全てで、調または音階に加えた変更が保存されない現象
- 解消: ARA対応のDAW全てで、[比較]スイッチによりMelodyneでのローカル再生が停止する現象
- 解消: Logic 10.3で、Melodyneを使用した特定のプロジェクトを開くとクラッシュする現象
- 解消: Digital Performerで、以前Melodyneを使用して編集したプロジェクトを開くとクラッシュすることがある現象
- 解消: プラグインで、[ファイルを元の状態に復元]コマンドを使用すると特定の状況下で違うノートが削除される現象
- 解消: 転送をキャンセルすると表示エラーや(編集を続けると)DAWがクラッシュする現象
- 解消: プラグインで、割り当て可能なキーボードショートカット[前回のメニューアクションを反復]が機能しない現象
- 解消: スケールウィンドウが開いている状態で、編集モードからノートアサインメントモードに切り替えると、タイムラインの違うエリアが表示される現象
- 解消: サウンドエディターで、アサインメントモードがオンの場合にスペクトラムのピーク値が表示されない現象
- 解消: Melodyne studioのトラックリストで、Alt-クリックで[編集]と[参照]の両方のボタンがオンになる現象
- 解消: Melodyne studioで、複数のトラックを同時にコピーすると、内容が置き換わることがある現象
- 解消: Melodyne essentialで、割り当て可能なキーボードショートカット[ノートをトリルとして分割]がない現象
- 解消: Melodyne essentialで、Melodyne studioで保存されたドキュメントを開くと違ったトラックが表示される現象

- 解消: スタンドアロンアプリケーションで、テンポアサインメントモードでノートのコピーとペーストができない現象
- 解消: スタンドアロンアプリケーションで、新規検出によりタイムライン上のオーディオがずれることがある現象
- 解消: macOSバージョン10.12上のスタンドアロンアプリケーションで、オーディオインポート機能使用後クラッシュすることがある現象

Melodyne 4.1.1の新機能

新機能と機能向上

[ノートの分割]コマンド

このコマンドは、Melodyneで指定されている位置でノートを自動分割します。ツールを使用して編集する前に歯擦音や息継ぎのノイズを分離するためにボーカルのパッセージで正確なカットを行う必要がある場合に便利です。

[ノートの分割]コマンドはノート分割ツールのコンテキストメニューにあります。環境設定の[ショートカット]ページでキーボードショートカットを割り当てることができます。

[スタート位置ラインで分割]コマンドのショートカット

環境設定の[ショートカット]ページ(見出しは「ノートアサインメント」)で、ノートアサインメントモードで使用される[スタート位置ラインで分割]コマンドにキーボードショートカットを割り当てることができるようになりました。このコマンドはこれまでノート分割ツールのコンテキストメニューからのみアクセス可能でした。

バグフィックス

- 解消: マクロを開くのに使用するボタンが特定の状況で灰色表示になる不具合
- 解消: ノート分割ツールのノートアサインメントモードでの使用時およびスレッシュホールド値変更時に生じるクラッシュ
- 解消: 保存時にオーディオファイルの長さが特定の状況で変更される不具合
- 解消: 複数回の連続録音時にまれに生じるクラッシュ
- 解消: macOS 10.12.xおよび10.11.x上のLogic Pro 10.3.1で特定の状況において生じていたクラッシュ
- 解消: Logic 10.3で特定のプロジェクトを開く際に生じていたクラッシュ
- 解消: ARAリージョンのフリーズ時にSonarで生じるクラッシュ
- 解消: macOS 10.11.6上のDigital Performer 9.13で4つ以上のトラックの同時転送時に生じる中断
- 解消: FL Studioでのメモリーリーク

Melodyne 4.1の新機能

The update brings important improvements to all editions of Melodyne, including a new playback type for high-pitched monophonic instruments, a command for separating notes as trills and additional keyboard shortcuts. When Melodyne is integrated into the DAW by means of the ARA interface extension, user-friendly new possibilities are now available for vocal comping, and in Melodyne 4 studio, the simultaneous editing of an unlimited number of tracks can now be done via ARA, too.

In ARA-compatible DAWs, Version 4.1 offers decisive improvements that make it possible to focus Melodyne's functions in an optimal manner on an individual clip or an entire track. In Clip Mode, you have access to a single clip, but this extends to notes lying beyond its borders; as a result, when comping it is very simple to solve any problems posed by clip borders slicing notes in two, which greatly streamlines the comping workflow. In Track Mode, on the other hand, you see all clips of a track exactly as these are cut and arranged in the DAW. The two modes complement each other perfectly and offer ideal editing possibilities in ARA-compatible DAWs.

When Melodyne is integrated into a DAW by means of ARA, Version 4.1 now allows the simultaneous display and editing of an unlimited number of DAW tracks in a single Melodyne plug-in window – ideal for backing vocals and other multitrack applications.

The ARA Audio Random Access interface extension, which is currently supported by Presonus Studio One, Cakewalk Sonar, Magix Samplitude and Tracktion, makes the use of Melodyne particularly fast and efficient. DAW tracks can be edited directly without any time-consuming transfers; furthermore, Melodyne follows automatically any changes made to the tracks. The result is that Melodyne feels like a comfortable integrated sample editor – but one that allows the note-based editing of tracks.

新機能と機能向上

マルチトラックノート編集がARA統合中にも使用可能に

Melodyne studioのノートエディターで、ARA上でも任意数のDAWトラックを同時に表示して編集できるようになりました。

DAWでの(ボーカル)コンピングのARA機能が向上

新しい2つのARAモードにより、Melodyneのパワーを個々のクリップまたはトラック全体のいずれかに最適な形で集中させることができるようになり、(ボーカル)コンピングなどの一般的なDAWワークフローに理想的なサポートを提供します。ARAクリップモードは、ひとつのクリップにのみアクセスしますが、クリップ全体の両側のノートにもアクセスできます。一方、ARAトラックモードはDAWトラック上の全てのトラックを、そこでの編集およびアレンジ通りに表示します。

モノフォニック楽器向けの新しい再生タイプ

ソプラノボイスや非常にピッチの高いメロディ楽器(ピッコロなど)の再生中の音質を強化するため、アルゴリズムインスペクターに新しい再生タイプ[トータル (高)]が追加されました。

[ノートをトリルとして分割]コマンド

ノートエディターとノートアサインメントモードに、Melodyne studio 3でおなじみの[ノートをトリルとして分割]コマンドが搭載されました。

[ノートの分割]コマンド

ノート分割ツールのコンテキストメニューにあるこのコマンドは、Melodyneで指定されている位置でノートを自動分割します。ツールを使用して編集する前に歯擦音や息継ぎのノイズを分離するためにボーカルのパッセージで正確なカットを行う必要がある場合に便利です。

[スタート位置ラインで分割]コマンドのショートカット

ノートアサインメントモードで使用されるこのコマンドにショートカットを割り当てることができるようになりました。

[オーディオを置換]コマンド

[オーディオを置換]コマンドでは、[エクスポート]ダイアログを開くことなく、オーディオファイルを既存の名前で保存できます。

キーボードショートカットの向上

各サブツールに独自のショートカットが用意されました。タイムグリッド用のショートカットも用意され、ズームコマンドはテンキーに割り当てられました。

ユーザーインターフェースのコントラストバリエーション

[環境設定]ダイアログで、ユーザーインターフェース用に新しいコントラストオプションを選択できるようになりました。

Windows上でのHiDPI対応

Windows 8以降を実行する互換システム上では、Melodyneは高解像度スクリーンに対応するようになりました。スタンドアロンとStudio Oneでのプラグインの両方が該当します。その他のDAWでのHiDPI対応も計画中です。

必要メモリが低下

内部最適化により、Melodyne(スタンドアロン、プラグイン、ARA)は特にWindowsでの必要メモリが低下しています。

自動スクロールオプション

Melodyneをプラグインとしてしようしている場合、[自動スクロール]設定を各インスタンスに対して個別に保存できるようになりました。

iLok

iLok 2に加えて、MelodyneはiLok 3にも対応しました。

バグフィックス

- 解消: Windows 7で、一部のMP3ファイルをロードするとMelodyneスタンドアロンがクラッシュする不具合
- 解消: Cubaseで、プラグインウィンドウの[常に全面に表示]設定によりクラッシュすることがある不具合
- 解消: プラグインのグラフィックスの問題
- 解消: 入力または検出された調性が保存時にCメジャーにリセットされる不具合
- 解消: Melodyne 4によりインポートされたMelodyne studio 3のMARファイルに不正確なテンポ情報が含まれている不具合
- 解消: studio 3ファイルのインポートに影響するその他の問題
- 解消: アルゴリズムの事後変更後オーディオ素材が数サンプル分ずれる不具合
- 解消: DAWでのテンポ学習後タイムグリッドがずれることがある不具合

- 解消: Cubaseのテンポ検出ダイアログでの拍子変更に関連する情報のMelodyneプラグインへの転送が不確かになる不具合
- 解消: macOS 10.12.xおよび10.11.x上のLogic Pro 10.3.1で特定の状況において生じていたクラッシュ
- 解消: Logic 10.3で特定のプロジェクトを開く際に生じていたクラッシュ
- 解消: ノート分割ツールのノートアサインメントモードでの使用時およびスレッシュホールド値変更時に生じるクラッシュ
- 解消: 保存時にオーディオファイルの長さが特定の状況で変更される不具合
- 解消: ARAリージョンのフリーズ時にSonarで生じるクラッシュ
- 解消: マクロを開くのに使用するボタンが特定の状況で灰色表示になる不具合

トラブルシューティング

問題が生じた場合はまずこちらをご覧ください。追加トピックへはサイドメニューの「FAQ」をクリックするとアクセスできます。

問題が解決しない場合、support@celemony.com までご連絡ください。弊社サポートチームは英語およびドイツ語にてお問い合わせを承っております。

Melodyneの正しいインストール方法が分からない。

ダウンロードしたインストーラーまたはMelodyne CDに収録されているインストーラーを起動します。これで、スタンドアロン版のMelodyneと、各種プラグイン版のMelodyneの両方がハードディスクにインストールされます。

Melodyneをインストールしたが、見つからない。

macOSの場合、スタンドアロン版には「Melodyne」という名前が付いています。[アプリケーション]フォルダー内に「Melodyne」という名のサブフォルダーがあるはずです。プラグインには「Melodyne」という名前が付いており、次のロケーションにあります: Macintosh HD/ライブラリ/Audio/Plug-Ins/〈該当する種類のプラグインのサブフォルダー〉

Windowsの場合、スタンドアロン版には「Melodyne.exe」という名前が付いています。次のロケーションにあります: C://Programs/Celemony/Melodyne/またはC://Program Files (x86)/Celemony/Melodyne/ プラグインには「Melodyne」という名前が付いており、それぞれ次のロケーションにあります:

VST3(64ビット): C://Programs/Common Files/VST3/Celemony

VST3(32ビット): C://Program Files (x86)/Common Files/VST3/Celemony

VST2(64ビット): C://Programs/Common Files/Steinberg/VST2/Celemony (インストール時にパスを選択できます。ご使用のDAWが使用しているパスをご確認ください)

VST2(32ビット): C://Program Files (x86)/Steinberg/VSTplugins/ (インストール時にパスを選択できます。ご使用のDAWが使用しているパスをご確認ください)

AAX: C://Programs/Common Files/Avid/Audio/Plug-Ins

RTAS: C://Program Files (x86)/Common Files/Digidesign/DAE/Plug-Ins

ご使用のDAWでは、Melodyneは他のオーディオエフェクトプラグインと同じように表示されます。使用するには、希望のオーディオトラックにプラグインをインサートします。

Melodyneをインストールしたが、アクティベーションの方法が分からない。

Melodyneスタンドアロンを起動します。表示されるダイアログボックスで[アクティベート]をクリックします。オンライン登録ページが開きます。ユーザーアカウントをお持ちでない場合はここで作成できます。画面上の指示に従ってください。完了すると、ご使用のコンピューターがアクティベートされ、Melodyneを制限なく使用できるようになります。Melodyneを弊社ウェブショップからご購入いただいた場合、ユーザーアカウントが購入時に作成済みのため、[アクティベート]をクリックするだけで完了となります。

エラーメッセージが表示され、アクティベーションを完了できない。

プログラムをアクティベートするには、インターネット接続が必要です。ウェブブラウザでページを開いてみるなどして、オンライン状態をご確認ください。オンライン状態である場合、Melodyneを再起動してから再試行してください。

Melodyneを再インストールしたいが、インストールプログラムが手元にない。

インストールプログラムはユーザーアカウントにあります。www.celemony.com/loginにログインしてダウンロードし、Melodyneを再インストールします。

実行中のMelodyneのエディションとバージョンが分からない。

実行中のMelodyneのエディションとバージョンナンバーを調べるには、メインメニューの[Melodyneについて]を選択します。エディション名は、画面最上部のMelodyneロゴの横にも表示されています。必要に応じて、ユーザーアカウント(www.celemony.com/login)からご所有のライセンスに応じたMelodyneエディションのインストールプログラムを取得できます。

使用中のMelodyneに対するアップデートがあるかどうか知りたい。

Melodyneはインターネットを介してアップデートを自動確認します。この機能は、[環境設定]ダイアログの[アップデートを確認]ページで設定できます。ここでは、[今すぐ確認]をクリックして手動でアップデートを確認することもできます。また、弊社ニュースレターでもアップデート情報を提供しています。ニュースレターには、ユーザーアカウント(www.celemony.com/login)から登録できます。

Melodyneをスタンドアロンで起動できない。

コンピューターを再起動してから、再度Melodyneを起動してみてください。上手くいかない場合、Melodyneプリファレンスを削除(下に手順を記載)してから再試行してください。それでもMelodyneが起動しない場合、弊社サポートsupport@celemony.comまでご連絡ください。Melodyneプリファレンスは次のロケーションにあります:

- macOS: FinderでAltキーを押したままメインメニューの[移動]>[ライブラリ]を選択して、[Preferences]サブフォルダーを開きます。下にスクロールして「com.celemony.melodyne.pref.plist」ファイルを探し、削除します。
- Windows: C://ユーザー/<ユーザー名>/AppData/Roaming/Celemony/を開き、「com.celemony.melodyne.plist」ファイルを削除します。[AppData]フォルダーが非表示になっている場合、[スタート]ボタンをクリック (Windows 7)または画面左下隅を右クリック(Windows 8)して[コントロールパネル]を開きます。[デスクトップのカスタマイズ]、[フォルダーオプション]を順に選択します。[表示]タブをクリックします。[詳細設定]で、[隠しファイル、隠しフォルダー、および隠しドライブを表示する]にチェックマークを入れ、[OK]をクリックして終了します。

MelodyneをプラグインとしてDAWのオーディオトラックにインサートしたが、反応がない。

インサートしたMelodyneは空の状態です。まず、DAWのトラックからMelodyneにオーディオ素材を転送する必要があります。これを行うには、Melodyneの[転送]ボタンをクリックしてから、編集したいパッセージをDAWで再生します。転送が完了したら、Melodyneに音が表示され、編集可能となります。

使用中のDAWとMelodyneとの連携がうまく行っていない気がする。

ARAインターフェイス拡張に対応しているかどうかなど、どのDAWにも注意すべき独自の特性があります。弊社のヘルプセンターには、主要DAWについての必要な情報とヒントが掲載されています。ヘルプセンターへは、Melodyneの[ヘルプ]メニューを開くか、www.helpcenter.celemony.comからアクセスできます。

Melodyneスタンドアロンからのオーディオ出力が得られない。

[環境設定]ダイアログの[オーディオ]ページを開き、正しいオーディオデバイスが選択されているかどうか確認します。macOSでは、内蔵オーディオハードウェアか、お手持ちのオーディオインターフェイスが選択されていなければなりません(たとえば、ワイヤレスインターフェイスのAirplayは使用できません)。Windowsでは、正しいASIOドライバーを選択してください。DirectXでは録音できません。

オーディオの転送後またはインポート後、Melodyneに表示されたblobが予想と全く異なっている。

デフォルトでは、Melodyneはオーディオ素材に対してアルゴリズムを自動選択します。そのため、モノフォニック素材がポリフォニック素材として解釈されてしまうことがあります。このような場合、影響を受けたパッセージのノートをクリックして、[アルゴリズム]から適切なアルゴリズムを選択します。

ノートエディターでblobを縦方向に動かせるときと、横方向にしか動かせないときがある。

メインツール(矢印)を使用してblobを編集する際は、ドラッグを始めた方向によって、縦または横のどちらに動かせるかが決まります。方向を変えるときは、いったんblobから指を離します。ピッチグリッドまたはタイムグリッドがアクティブな場合、微調整するにはAltキーを押したまま操作する必要があります。blobを横方向に動かすときは、blobの中央をドラッグする場合と、blobの端をドラッグする場合とでは動作が異なることを覚えておきましょう。中央をドラッグするとblob自体を動かすことができ、端をドラッグするとそこだけが変化してblob自体は動きません。

blobによっては、ピッチをずらすと不自然なサウンドになることがある。

モノフォニックオーディオ素材の検出ではオクターブエラーが生じることがあります。このエラーがポリフォニックオーディオ素材で生じると、上音が別個の音として誤って認識されてしまいます。このような場合、対応するblobを動かすとアーチファクトが生じます。編集作業を始める前に、実際の演奏内容と表示されている音が確実に一致するよう、ノートアサインメントモードで検出結果を確認し、必要に応じて手を加えることで、これを防ぐことができます。

スタンドアロンで、インポートしたオーディオファイルのテンポが間違っている。

オートストレッチスイッチをオンにすると、インポートするファイルがプロジェクトのテンポに合わせられます。オフにすると、インポートするファイルの元のテンポが維持されます。前者の場合、インポートするファイルのテンポが間違っただまの場合、blobをプロジェクトにコピーする前に別プロジェクトのドキュメント内でファイルを開き、テンポアサインを修正します。